

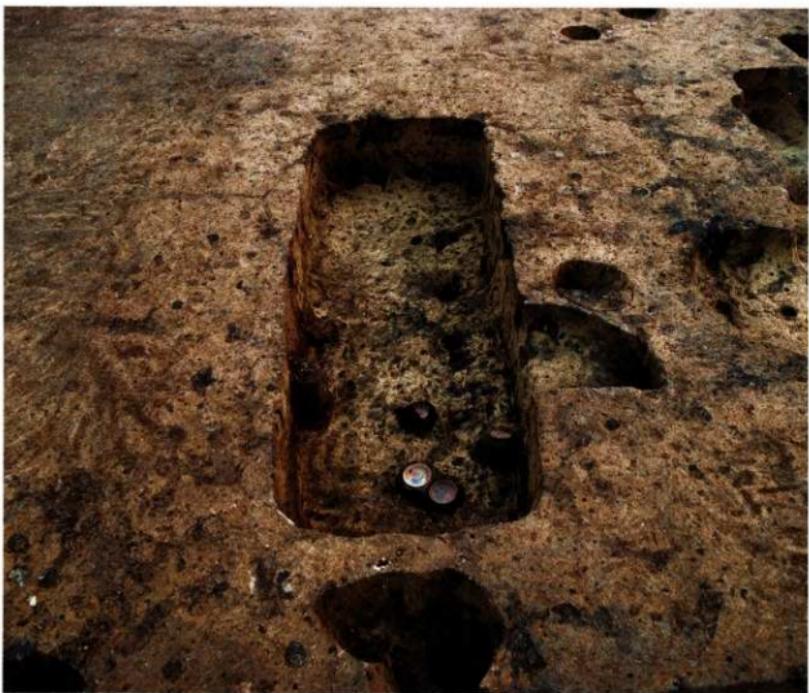
富山県南砺市

宗 守 Ⅲ 遺 跡
宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡
梅原胡摩堂遺跡

— 県営ほ場整備事業北山田中部西地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告 —

2013年1月

南砺市教育委員会



宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の土坑墓

富山県南砺市

**宗 守 Ⅲ 遺 跡
宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡
梅原胡摩堂遺跡**

— 県営ほ場整備事業北山川中部西地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告 —

2013年1月

南砺市教育委員会

序

南砺市の中央部に位置する北山田中部地区は、山田川左岸の河岸段丘上に位置します。県営は場整備事業に伴い平成19年度から試掘調査を行った結果、縄文時代から近世までの様々な遺跡を発見し、多くの歴史的遺産が埋蔵されていることが分かりました。遺跡の大半は盛土により現地保存が図られましたが、一部の水田削平部分については平成22年度から本調査を実施し、記録保存を行ってきました。

当地区の埋蔵文化財本発掘調査は市教育委員会と民間会社で調査を実施しました。調査の結果、奈良・平安時代、中世の遺構が確認されました。また、当時の生活に用いられた土器も数多く出土しました。本書は、その調査の成果をまとめたものです。郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

終わりに、この調査の実施にあたり、富山県農林水産部、南砺市シルバーパートナーシップセンター、ほ場整備事業北山田中部西地区委員会をはじめ、地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに、深く感謝を申し上げます。

平成25年1月

南砺市教育委員会

教育長 浅 田 茂

例　　言

- 本書は、県営は場整備事業北山田中部西地区に伴う発掘調査報告書である。
- 調査は、宮山県農林水産部の委託を受け、南砺市教育委員会が実施した。地元負担金については、南砺市教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。
- 調査事務局は南砺市教育委員会文化・世界遺産課(23年度までは文化課)においていた。年度別・調査別の各担当は以下のとおりである。

年度別	総括	調査事務	調査担当	遺跡名	地区名	調査面積
22年度	文化課長 浦辺　一成	主幹　野村　和典 主任　佐藤　聖子	文化課　主任 佐藤　聖子	宗守Ⅲ遺跡	1地区	1,307m ²
			日本海航測㈱ 小川　幹太	宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡	1地区	900m ²
23年度	文化課長 浦辺　一成	副主幹　山田　修弘 主任　佐藤　聖子 主任　宮崎順一郎	文化課　主任 宮崎順一郎	宗守Ⅲ遺跡	2地区	860m ²
			文化課　主任 佐藤　聖子	宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡	2地区 3地区	300m ² 600m ²
			日本海航測㈱ 久保　治一郎	宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡	4地区	1,490m ²
24年度	文化・世界遺産課長 浦辺　一成	副主幹　山田　修弘 主任　片田　亞紀	文化・世界遺産課 主任　片田　亞紀	梅原湖摩堂遺跡	27地区 28地区	350m ² 340m ²

4. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。

大嶋建設株式会社・富山県砺波農林振興センター・野村清典・森田芳男・宗守自治会（敬称略・五十音順）

5. 本書で使用した方位は東北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄著1967「新版標準上色帖」日本色研事業株式会社を用いた。

6. 調査参加者は次の通りである。

南砺市教育委員会

上田信治・太田信夫・奥野勝子・片田行儀・川合仁志・川向由一・高下久義・瀧田君子・瀧谷昂・種部年子・中井達雄・中島昌治・中田睦子・中山政義・橋本澄子・林長敏・水口一義・水口剛夫・水口苦嗣・瀧口日出夫・山田和夫・山田博・吉井代枝子・渡辺正幸（現地作業員）

河合陽子・西川和美（現地調査補助及び遺物整理作業）

日本海航測株式会社

天池秋夫・荒岡健一・井口光枝・上坂伊光・上島勝枝・大西好夫・川向由一・木下史・工藤富二・齊藤定明・瀬川明久・立野美知子・田中清文・田中稔・谷山幸男・種部年子・道順優吉・得能薰・中川敏正・中島義雄・中村孝志・長沢一正・西村敏・瀧口清・宮丸登喜雄・筒原澄子・山田俊之・山田敏之・山村美喜子・吉田一男

目　　次

I 位置と環境	1	第4図 宗守Ⅲ遺跡の調査区割	5
第1図 位置と周辺の遺跡	1	3 宗守Ⅲ遺跡 2地区の概要	7
II 調査に至る経緯と経過	2	第5図 宗守Ⅲ遺跡 2地区の基本層序	7
第1表 調査経過	2	4 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 1地区的概要	9
III 調査の概要	3	第6図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 1地区的基本層序	9
1 調査の方法	3	第7図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡の調査区割	10
第2表 遺跡の概要	3	5 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 2地区的概要	18
第2図 遺跡範囲と調査区位置図	4	第8図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 2地区的基本層序	18
2 宗守Ⅲ遺跡 1地区的概要	5	6 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 3地区的概要	20
第3図 宗守Ⅲ遺跡 1地区的基本層序	5	第9図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 3地区的基本層序	20

- 7 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の概要… 21
 第10図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の基本層序… 22
 8 梅原胡摩堂遺跡27地区の概要… 27
 第11図 梅原胡摩堂遺跡27地区の基本層序… 27
 第12図 梅原胡摩堂遺跡27地区的調査区割… 28
 9 梅原胡摩堂遺跡28地区的概要… 29
 第13図 梅原胡摩堂遺跡28地区的基本層序… 29
- IVまとめ… 30
 参考文献… 31
- 第14図 宗守Ⅲ遺跡1地区平面図
 第15図 宗守Ⅲ遺跡1地区的遺構(1)
 第16図 宗守Ⅲ遺跡1地区的遺構(2)
 第17図 宗守Ⅲ遺跡2地区平面図
 第18図 宗守Ⅲ遺跡2地区の遺構
 第19図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区平面図
 第20図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(1)
 第21図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(2)
 第22図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(3)
 第23図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(4)
 第24図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(5)
 第25図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(6)
 第26図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(7)
 第27図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(8)
 第28図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(9)
 第29図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(10)
 第30図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(11)
 第31図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(12)
 第32図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区平面図
 第33図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区的遺構(1)
 第34図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区的遺構(2)
 第35図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡3地区平面図
 第36図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡3地区的遺構
 第37図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区平面図
 第38図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(1)
 第39図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(2)
 第40図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(3)
 第41図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(4)
 第42図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(5)
 第43図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(6)
 第44図 梅原胡摩堂遺跡27地区平面図
 第45図 梅原胡摩堂遺跡27地区的遺構
 第46図 梅原胡摩堂遺跡28地区平面図
 第47図 梅原胡摩堂遺跡28地区的遺構
 第48図 宗守Ⅲ遺跡1地区的遺物
 第49図 宗守Ⅲ遺跡2地区的遺物
 第50図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺物
 第51図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2・3地区的遺物
 第52図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺物
- 第53図 梅原胡摩堂遺跡27-28地区の遺物
 図版1 宗守Ⅲ遺跡1地区的遺構(1)
 図版2 宗守Ⅲ遺跡1地区的遺構(2)
 図版3 宗守Ⅲ遺跡1地区的遺構(3)
 図版4 宗守Ⅲ遺跡1地区的遺構(4)
 図版5 宗守Ⅲ遺跡2地区的遺構(1)
 図版6 宗守Ⅲ遺跡2地区的遺構(2)
 図版7 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区全景
 図版8 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区全景
 図版9 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(1)
 図版10 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(2)
 図版11 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(3)
 図版12 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(4)
 図版13 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(5)
 図版14 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(6)
 図版15 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(7)
 図版16 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(8)
 図版17 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(9)
 図版18 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(10)
 国版19 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(11)
 国版20 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(12)
 国版21 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(13)
 国版22 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺構(14)
 国版23 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区的遺構(1)
 国版24 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区的遺構(2)
 国版25 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区的遺構(3)
 国版26 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡3地区的遺構
 国版27 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区全景
 国版28 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(1)
 国版29 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(2)
 国版30 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(3)
 国版31 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(4)
 国版32 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(5)
 国版33 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(6)
 国版34 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺構(7)
 国版35 梅原胡摩堂遺跡27-28地区全景(1)
 国版36 梅原胡摩堂遺跡27-28地区全景(2)
 国版37 梅原胡摩堂遺跡27地区的遺構
 国版38 梅原胡摩堂遺跡28地区的遺構
 国版39 宗守Ⅲ遺跡1地区的遺物(1)
 国版40 宗守Ⅲ遺跡1地区的遺物(2)
 国版41 宗守Ⅲ遺跡2地区的遺物
 国版42 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区的遺物
 国版43 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2・3地区的遺物
 国版44 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区的遺物
 国版45 梅原胡摩堂遺跡27-28地区的遺物

報告書抄録

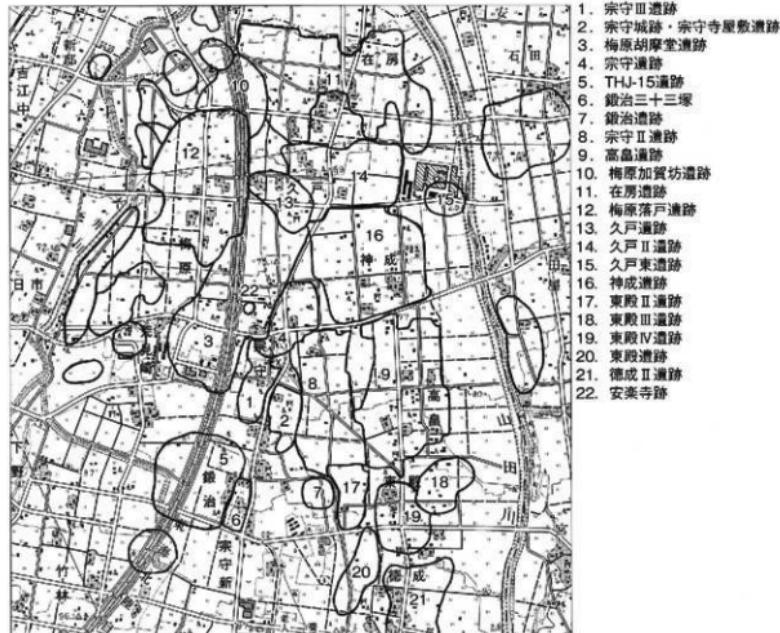
I 位置と環境

南砺市は富山県の西南部端に位置する。市の西側には養老3年(719)、泰澄大師によって開山されたと言われる雲峰医王山をはじめとする山脈が連なる。市の南側に位置し石川県白山市との境にある大門山に源を発する小矢部川が、その支流とともに平野部を形成する。市街地は主に小矢部川沿いに展開し、小矢部川とその支流である山田川にはさまれた段丘には小河川が縱横に走り、それらを利用した田地が広がる。

宗守Ⅲ遺跡・宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡・梅原胡摩堂遺跡は、山田川左岸の緩やかな傾斜を持つ洪積台上に位置し、標高約77~84mを測る。現況は主に田地・畑地である。分布調査や試掘調査から縄文・古代・中世の散布地および集落であることが知られている。

周辺の遺跡には宗守遺跡・宗守Ⅱ遺跡・神成遺跡・鍛冶遺跡・鍛冶三十三塙などがある。近年の調査で、古墳時代・奈良・平安時代の住居跡や中世の建物跡が数多く発見されている。また墨書き器や製塩土器なども出土しており、一帯では古くから大規模な集落が営まれていたことがわかる。

文献資料では、福光町の一部が礪波川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村と呼ばれ官倉が置かれていたことが知られる。その後11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。



第1図 位置と周辺の遺跡 (S=1:25,000)

II 調査に至る経緯と経過

平成16年度、県営担い手育成基盤整備事業が南砺市高畠・宗守・鍛治地区を中心とする北山田中部地区において策定された。この事業は、農業の生産性向上を目的として、その生産基盤であるは場条件を整備し、農地の集積化、農地の担い手育成を図ることを併せて、農村集落の活性化を目指すものであった。は場は、すでに昭和30年代に団体営耕地整備事業が実施され、10ha区画（50m×20m）がキとなっていたところを、今回の事業で標準区画1.0ha（150m×70m）に再区画する計画となっていた。しかしながら、事業対象地区に隣接する北山田北部地区、北山田南部地区や近隣の梅原地区では、同様のは場整備事業が実施された際に多数の遺跡を確認していたため、同地区にも遺跡が多く存在する可能性があった。このことから、南砺市教育委員会では平成16年12月に地区内の詳細分布調査を実施したところ、広範囲で遺物の散布を確認し、新たに4遺跡を発見した。この結果を受け、市教委と富山県で取扱について協議を行い、試掘調査を実施し、遺跡の遺存状況確認及びは場整備事業での田面計画高調整のための資料として遺跡遺存高を標高で把握する作業を行った。試掘調査は、平成19年度から実施した。調査対象地区の大部分で遺跡が遺存していたことから、南砺市と富山県砺波農地林務事務所（現砺波農林振興センター）が協議し、施工の際は遺跡の大多数は盛土により保存し、やむを得ず削平する田面部分について本調査を行い、幅員狭小の川排水路、表面直下の浅い箇所に遺跡が存在する箇所等については工事立会対応とした。中途で、事業の便宜上、北山田中部地区は地区の中央を流れる権現堂川を境とし、東側を北山田中部東地区、西側を北山田中部西地区とした。対象地区本調査は、は場整備施工計画に合わせ平成22年度から実施し、平成24年度に終了した。

北山田中部西地区に所在する遺跡の、これまでの調査面積は次のとおりである。

第1表 調査経過

	遺跡名	試掘調査対象面積	本調査面積	備考
平成20年度	鍛治遺跡	約7.0ha		
	宗守Ⅲ遺跡	約1.5ha		
平成21年度	T H J 15遺跡	約7.8ha		
	鍛治三十三塚	約2.0ha		
平成22年度	宗守Ⅱ遺跡	約3.0ha	1,307m ²	
	宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡	約5.6ha	900m ²	民間委託
	梅原胡摩堂遺跡	約2.6ha		
平成23年度	宗守Ⅲ遺跡		860m ²	
	宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡		2,390m ²	うち1,490m ² を民間委託
平成24年度	梅原胡摩堂遺跡		690m ²	

III 調査の概要

1 調査の方法

調査区域の設定後、試掘調査の結果に基づき、調査員の立ち会いのもとで表土除去を行った。表土除去には重機を使用し、耕作土および前回は場整備時の盛土の層まで掘削した。耕作土は、盛土と分けて調査区の外に搬出した。

表土除去後に、調査区に合わせたおおよその東西方向、南北方向に基準杭を設置して調査区割りを行った。区割りは、南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを一区画としてアラビア数字で表記した。

調査区に合わせてサブトレレンチを設定し、地山面まで掘り下げて層位を観察した。一部にセクションベルトを残して層位を確認しながら、人力による包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構の掘削は、埋土の堆積状況を観察するために平載するか、セクションベルトを2本ないし3本残して掘削し、上層の記録作業が終わりしだい完掘した。排土は、人力により調査区外へ搬出した。

遺構は検出後、1:100で概略図を作成して、遺構毎に通し番号をつけた。遺構の検出状況や土層、遺物の出土状況は、調査員と調査補助員が手尖測により1:20で図化した。各遺構の検出状況、断面、完掘状況などの記録写真、調査区のブロック写真、全体写真は調査員が撮影した。すべての遺構完掘終了後、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を図化用に行い、あわせて俯瞰・斜め写真等を撮影した。

出土遺物は、現地作業と並行して洗浄・バインダー処理・注記・仕分けの整理作業を行った。接合、復元は現場作業中止時や、現場終了後に行った。遺物実測やトレース等は基準を統一し、調査員と整理員で図版を作成した。写真や図面は年度・遺跡・地区毎にファイルにまとめ、出土遺物は報告書の写真図版のとおりに整理箱に収めた。またそれ以外の遺物は地区的遺構毎、グリット毎にならべて整理箱に収めた。

第2表 遺跡の概要

遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
宗守Ⅲ遺跡	縄文、中世、近世	土坑、溝、穴	縄文土器、中世土師器、珠洲焼、青磁、近世陶磁器
宗守城跡・宗守寺原敷遺跡	縄文、古代、中世、近世	壁穴住居、掘立柱建物、柱穴、土坑、溝、塼、井戸、土坑墓	縄文土器、須恵器、土師器、中世土師器、珠洲焼、青磁、近世陶磁器
梅原湖摩堂遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世	壁穴住居、掘立柱建物、柱穴、土坑、溝、塼、井戸	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、珠洲焼、青磁、白磁、越前、越中窯戸、瀬戸美濃、石臼、木製品
THJ-15遺跡	中世、近世		中世土師器、伊万里
鎌治三十三塚	中世	柱穴	



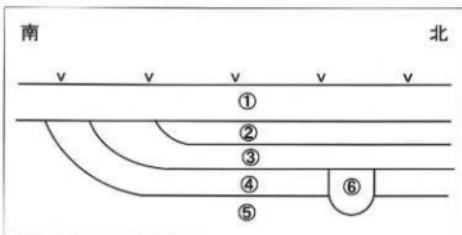
第2図 遺跡範囲と調査区位置図 (S = 1 : 5,000)

2 宗守Ⅲ遺跡 1地区の概要

(1) 地形と基本層序 (第3図)

本調査区は、山田川左岸河岸段丘上、遺跡の南部端に位置する。地形は、南側から北側に向けて緩やかに傾斜する。標高は約81.50～81.90mを測る。

基本層序は、①耕作土、②灰褐色粘質土（盛土）、③黒褐色粘質土（盛土）、④黄褐色粘質土（地山1）、⑤黄褐色砂礫土（地山2）である。遺物包含層は無く、遺構は④層の上面で確認できる。そのため、遺物出土量は極めて少なく、遺構も時期が特定できるものは少ない。江戸時代後半から明治期にかけての擾乱、昭和30年代に実施されたほ場整備等で削平された箇所が多く、調査区内では⑤の地山層が広範囲で露出している。



第3図 宗守Ⅲ遺跡 1地区の基本層序

(2) 遺構の概要 (第14～16図、図版1～4)

本地区では、中世から近世の大溝1条、小溝10条、土坑約33基、その他小穴等を確認した。

SK01 (第16図、図版2)

調査区の北東側、X11～14、Y9～20に位置する。長軸が東西方向に20m、短軸が南北方向に3m以上、深さ0.3～0.4mを測る。遺構の軸方向は、ほぼ真北である。壁面の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。埋土は黒色土に地山土、砾、鉄分が混じる。出土遺物は無い。



第4図 宗守Ⅲ遺跡の調査区割 (S=1:2,000)

SK02 (第15図、図版2)

調査区北東側、X 12～13、Y 16～17に位置する。長軸が南北方向に1.5m、短軸が東西方向に1.0m、深さ0.5mを測り、南北に長い方形を呈する。遺構の軸方向は、ほぼ真北である。壁面は垂直に近い角度で立ち上がり、床面は平坦である。埋土は黒褐色土にオリーブ褐色土が混じる。出土遺物は無い。

SK03 (第15図、図版2)

調査区西側中央部、X 9～10、Y 4～5に位置する。SK03は一辺1.8mの方形を呈し、深さ0.3mを測る。遺構の軸方向は、ほぼ真北である。壁面はやや緩やかに立ち上がり、床面は平坦である。埋土は黒色土に10cm大の石を多く含む。出土遺物は無い。

SK04 (第15図、図版2)

調査区の中央部西寄り、X 7～10、Y 7～9に位置する。長軸が東西方向に3.9m、短軸が南北方向に3.6m、深さ0.3～0.45mを測る。掘り方は不整形である。遺構の軸方向は、N-7.5°-Eである。壁面の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。埋土は黒褐色土に疊、3～5cm大の石を多く含む。出土遺物は無い。

SK05・06・07 (第15・16図、図版2)

調査区の中央部、X 5～7、Y 11～13に位置する。SK05は一辺2mの方形を呈し、深さ0.1～0.2mを測る。遺構の軸方向は、N-20°-Eである。壁面の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。埋土は黒褐色土に3～5cm大の石を含む。出土遺物は無い。

SK06は一辺1.1mの円形を呈し、深さ0.3mを測る。遺構の軸方向は、N-38°-Eである。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は凹凸がある。埋土は黒褐色土に黄褐色土、5～20cm大の石を含む。出土遺物は無い。

SK07は一辺1.2mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。遺構の軸方向は、SK06とほぼ同一である。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は凹凸がある。埋土は黒褐色土に黄褐色土を多く含み、2～10cm大の石を含む。出土遺物は無い。

SK16 (第16図、図版3)

調査区東側中央部、X 7～9、Y 19～20に位置する。一辺約2.0mの方形を呈し、深さ0.1～0.4mを測る。遺構の軸方向は、ほぼ真北である。壁面の立ち上がりは緩やかで、床面は凹凸がある。埋土は黒褐色土にオリーブ褐色土が混じる。出土遺物は無い。

SK18 (第16図、図版3)

調査区中央部、X 6～7、Y 13～14に位置する。一辺約1.1mの方形を呈し、深さ0.1mを測る。遺構の軸方向は、N-3°-Wである。壁面の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。埋土は黒色土に疊が少量混じる。出土遺物は無い。

SK33 (第16図、図版3)

調査区中央部、X 7～8、Y 10～11に位置する。南北方向に短軸1.0m、東西方向に長軸1.5m、深さ0.15mを測る。平面形は東西に長い方形を呈する。遺構の軸方向は、N-11°-Eである。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は平坦である。埋土は黒褐色土に黄褐色土が少量混じる。出土遺物は無い。

SD01 (第16図、図版4)

調査区西側、X 0～14、Y 0～2に位置する。溝は調査区南西側から調査区外の北西方向に調査区西壁に沿って位置し、遺構の西の掘り方の大半は調査区外にある。幅2.1m以上、深さ0.45～0.6mを測る。壁の立ち上がりは急で、床面は平坦である。埋土は黒色土に疊を多く含む。流れは、調査区外の南東から

調査区外の北西に向かっている。出土遺物には、中世土師器・皿、珠洲焼・壺の体部がある。これらの遺物から、造構は13世紀後半から16世紀前半に存在したと考えられる。

SD02・03 (第16図、図版4)

SD02は調査区東側中央部、X 5～7、Y 18～21に位置する。幅1.4m、深さ0.45mを測り、断面形は緩やかなすり鉢状を呈する。埋土は黒褐色土にオリーブ褐色土を多く含む。流れは、南西から北東に向かっている。出土遺物は無い。

SD03は調査区北東部、X 9～11、Y 17～18に位置する。幅0.4m、深さ0.1mを測り、断面形は台形を呈する。埋土は黒褐色土にオリーブ褐色土を少量含む。溝は、一辺約28mの「コ」の字状を呈する。出土遺物は無い。

SD10・11 (第16図)

調査区中央部から北側、X 9～14、Y 0～18に位置する。幅0.4m、深さ0.3mを測り、断面形は方形を呈する。埋土は黒色土に黄褐色土が少量混じる。区画溝の一部と考えられる。出土遺物は無い。

(3) 遺物の概要 (第48図、図版39・40)

縄文時代から近世までの遺物が整理箱で1箱出土した。遺物には縄文土器、中世土師器、珠洲焼、越中瀬戸、伊万里、唐津等がある。以下、図化したものについて記述する。

1は縄文土器・深鉢の口縁部である。外面に縄文を施し、内面は磨いている。口縁はやや外反する。縄文中期後半か。2～7は中世土師器である。2～6は手捏ね成形であり、7はロクロ成形である。2は口縁を大きく外反させ、3、4はやや直線的に外反させている。5、6は口縁部を丸めている。

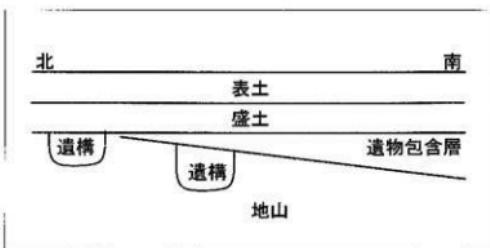
8は唐津・碗の口縁部である。9は越中瀬戸・鉢である。10は伊万里、11は青磁か。12は伊万里、13は珠洲焼・壺の体部破片である。(佐藤聖子)

3 宗守Ⅲ遺跡2地区の概要

(1) 地形と基本層序 (第5図)

本調査区は、山山川左岸河岸段丘上、遺跡の北部に位置する。地形は、西側から東側に向けて緩やかに傾斜する。標高は約79.40～79.60mを測る。

基本層序は、①耕作土、②黒褐色粘質土(盛土)、③黒褐色粘質土(包含層)、④黄褐色砂礫土(地山)である。



第5図 宗守Ⅲ遺跡2地区の基本層序

(2) 遺構の概要 (第17～18図、図版5～6)

本地区では、中世の土坑1基、中世の大溝1条、その他溝12条、土坑6基、不明遺構4基、井戸1基、その他小穴等を確認した。中世の遺構の帰属時期は、概ね15世紀前半である。

SK04 (第18図、図版6)

調査区の西側、X 1～3、Y 3～4に位置する。長軸が南北方向に3.6m、短軸が東西方向に3.1m、深さ0.49mを測る。遺構の形状は方形を呈する。壁面の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。遺構の北側をSP106に切られ、SX02を切っている。埋土は黒色土に暗褐色土がスジ状に混じる。出土遺物はない。

SD11 (第18図、図版6)

調査区西側、X 0～1、Y -1～8に位置し、調査区を南北に横断している。幅0.7m～1.4m、深さ0.5～0.7mを測り、断面形は緩やかなすり鉢状を呈する。埋土は褐色土上に暗褐色土がスジ状に混じる。流れは、調査区外の南から調査区外の北に向かっている。出土遺物には、磨製石斧、珠洲焼・甕壺があり、この調査区で唯一遺構から出土した中世以前の遺物である。これらの遺物から、遺構は15世紀前半には存在したと考えられる。磨製石斧は混人と考える。

SK01

調査区北東側、X14～15、Y 5～6に位置する。長軸が東西方向に約2.1m、短軸が南北方向に約0.8m、深さ0.1mを測り、東西に長い方形を呈する。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は平坦である。埋土は黒色土を基調とし、1cm大の小石が多く混じる。出土遺物はないが、埋土から近世以降の遺構と考えられる。

SK02

調査区北東側、X12～13、Y 5～7に位置する。長軸が東西方向に約2.2m、短軸が南北方向に約2.5m、深さ0.2mを測り、南北に長い方形を呈するが、遺構は北側の調査区外へ伸びている。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は平坦である。埋土は黒色土を基調とした3層に細分される。図示していないが近世陶磁器が出土している。

SK05

調査区北西側、X 5～6、Y 6に位置する。長軸が東西方向に約1.8m、短軸が南北方向に約1m、深さ約0.2mを測り、梢円形を呈する。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は平坦である。埋土は黒褐色土を基調とし、1cm大の小石が多く混じる。出土遺物はないが、埋土から近世以降の遺構と考えられる。

SK06

調査区中央、X11～12、Y 3～4に位置する。長軸が東西方向に約2.0m、短軸が南北方向に約1.7m、深さ0.3mを測る。不整形の土坑である。遺構の東側をSP88に切られ、SP90を切っている。壁面の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土、黒褐色粘質土を基調とした3層に細分される。出土遺物はないが、埋土から近世以降の遺構と考えられる。

SD03

調査区南側、X 0～18、Y -1～1に位置する。幅0.8m～1.3m、深さ0.1～0.2mを測り、断面形はやや急に立ち上がり、床面は平坦である。埋土は黒色粘質土と黒褐色土を基調とした2層に細分される。出土遺物はないが、埋土から近世以降の遺構と考えられる。

SD04

調査区中央、X 6～9、Y 1～5に位置する。幅1.1m～2.0m、深さ0.10～0.16mを測り、断面形は緩やかで、床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土を基調とした2層に細分される。遺物は図示していないが近世陶磁器が出土している。

SD05

調査区中央から北側、X 4～9、Y 3～7に位置する。幅0.9m～1.2m、深さ0.10～0.20mを測り、断面形は緩やかで、床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土を基調とした3層に細分される。出土遺物はないが、埋土から近世以降の遺構と考えられる。

(3) 遺物の概要 (第50図、図版41)

縄文時代から近世までの遺物が整理箱で2箱出土した。遺物には縄文土器、打製石斧、磨製石斧、須恵器、珠洲焼、越中瀬戸、近世陶磁器等がある。以下、図化したものについて記述する。

S D11 (第50図、図版41)

1は磨製石斧で刃部のみ残存している。2、3は珠洲焼の壺の口縁部である。2の口縁形状はくの字状に屈曲する方頭で、肩部の張り出しある。3の口縁形状は丸みを帯びた方頭を呈する。4、5は珠洲焼の壺底の体部破片である。

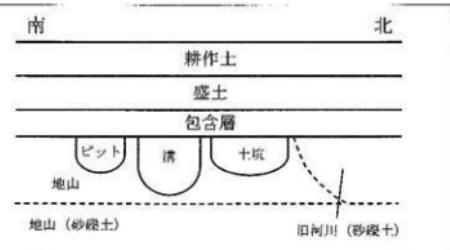
包含層 (第50図、図版41)

6は短冊形を呈する打製石斧である。7は縄文土器で、外面に条痕文を施している。縄文晩期のものである。8は須恵器・壺の体部破片である。外面は平行叩き目が施され、内面には同心円状の当て具痕が残る。9は珠洲焼の壺底の体部破片である。10は越中瀬戸・皿である。(宮崎順一郎)

4. 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の概要

(1) 地形と基本層序 (第6図)

宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡は山田川扇状地の中央部に位置する。海拔は82.8m～83.0mを測り、地形はほぼ平坦である。調査区北側では旧河川(砂礫土)が検出された。旧河川上に遺構が確認されず、遺構検出面(地山)を削って構築されていることから、本来は調査区北側にも遺跡が展開していた



第6図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の基本層序

が、この旧河川により削平を受けたと考えられる。また、この旧河川から遺物は出土しなかった。

地表から地山までの深さは20～30cmである。

基本十層は上位から耕作土(I層土)、盛土(II層土)、包含層(黒褐色シルトⅢ層土)、地山(黄褐色シルトⅣ層土)、地山(砂礫土Ⅴ層土)の順に堆積している。

(2) 遺構の概要

主な遺構として、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡2棟、溝15条、土坑11基、土坑墓6基、その他多数のピットを検出した。

S I O1 (第20・21図、図版9・10)

調査区南西端X 3～5、Y 1～3に位置する。竪穴は長軸4.34m、短軸3.55m、深さ0.10mを測り、主軸はN-10°-Wで、南北にやや長い方形を呈する。底部は平底を呈し、側壁はほぼ垂直である。埋土は黒褐色シルトを基調とした5層に細分される。竪穴の内側および周辺からP63・94・95などが検出されたが、深度・埋土の差異、ピット位置関係などから、いずれも竪穴に伴う柱穴であると断定できない。また、貼床および周溝は確認されなかった。

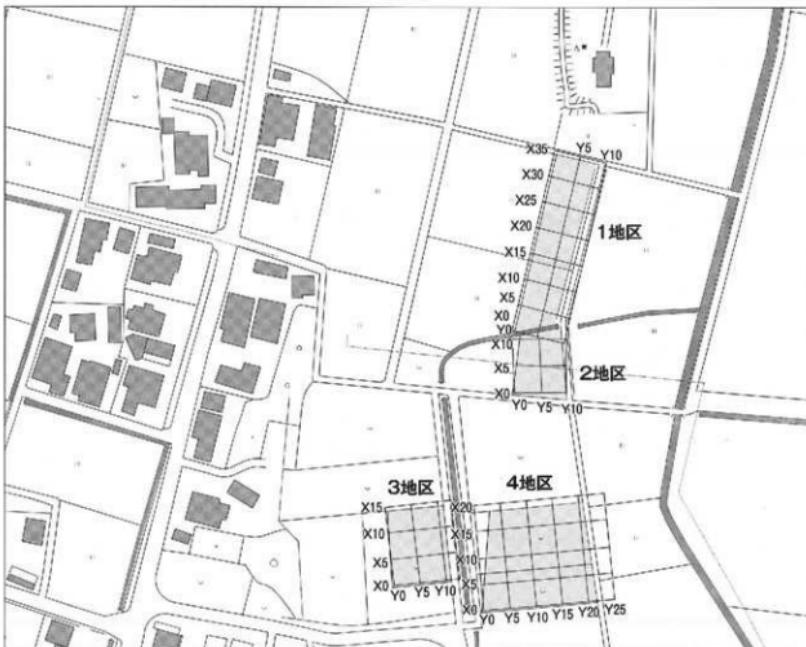
竪穴住居の南西隅からカマド跡が検出された。カマドの上部構造は不明であるが、長軸1.30m、短軸1.01m、深さ0.23mの焼土を伴う不定形の土坑が検出された。土坑の底部は平底であり、断面形状は急に立ち上がる。埋土は黒色シルト・黄褐色シルトを基調とした6層に細分され、焼土粒・炭化物を多含している。

土師器壺（1）（3）や、土師器小甕（2）の他、細片であるため図示できないが土師器片が数点出土している。

竪穴住居の南側からSK09が検出された。長軸3.17m、短軸1.85m、深さ0.44mを測る楕円形の土坑である。底部は平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルト・褐灰色シルトを基調とした5層に細分される。SK09は竪穴およびカマド跡に切られ、埋土は地山ブロックを多含することや、土層の堆積状況から、SK09は竪穴住居構築前に人為的に埋めたと考えられ、埋めたSK09上に竪穴住居を構築したものであり竪穴住居に付随する遺構ではないと考える。

SB01 (第22図、図版11・12)

調査区南西端X1～3、Y2～4に位置する。SB01-P01～P04の4基で構成される。梁行2間、桁行は推定2間以上であり、それ以降は調査区外に伸びると考えられる。梁行4.6m、柱間2.3m、残存桁行2.8m、柱間2.8mを測る。主軸はN-11°-Wである。建物の柱穴は直径約0.40～0.58m、深さ約0.10～0.23mを測り、柱穴の深度はほぼ一定である。柱穴の平面形状は円形を呈し、抜き取り痕や柱痕が確認される。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。P01～04が等間隔に配列し、堆積状況・埋土の統一性から掘立柱建物とした。P02南側、P04東側に柱穴が確認されなかったことから、建物中央に柱穴が存在しない側柱建物であると考えられ、P01の南側に存在する東側桁行はSD02に切られているため存在しないが、それ以南は調査区外に伸び、P04以南の西側桁行も調査区外に伸びると考えられる。



第7図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡の調査区割 (S = 1:2,000)

SB02 (第23図、図版12)

調査区中央東側X13～15、Y6～8に位置する。SB02-P01～P07の7基で構成される。梁行2間、桁行3間の側柱建物である。梁行3.9m、柱間2.0m、残存桁行4.3m、柱間2.0m～2.2m、残存床面積8.51m²を測る。主軸はN-1°-Wである。建物の柱穴は直径約0.31～0.41m、深さ約0.15mを測り、柱穴の深度はほぼ一定である。柱穴の平面形状は円形を呈し、抜き取り痕や柱痕が確認される。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。また、P07・P03間に柱穴が確認されないこと、SD08以南から柱穴が検出されないことから、南側梁行をSD08に切られた2×3間の側柱建物と考えられる。

SK02 (第24図、図版13)

調査区南東端X3、Y8に位置する。残存長軸1.14m、短軸0.60m、深さ0.40mを測る長方形の土坑である。主軸はN-5°-Wである。底部は平底を呈し、断面形状はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒色シルト・黒褐色シルト・黄褐色シルトを基調とした5層に細分され地山ブロックを多含する。遺物は中世土器器・皿(4～6)がほぼ完形で出土した。

SK03 (第24図、図版13)

調査区南東側X7～8、Y6～7に位置する。長軸1.96m、短軸0.70m、深さ0.36mを測る長方形の土坑である。主軸はN-2°-Wである。底部は平底を呈し、断面形状はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色シルト・にぶい黄褐色シルトを基調とした3層に細分され地山ブロックを多含する。

SK10 (第24図、図版13)

調査区中央西寄りX15、Y3に位置する。長軸2.00m、短軸0.73m、深さ0.32mを測る長方形の土坑である。主軸はN-14°-Eである。底部は平底を呈し、断面形状はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色シルト・黄褐色シルトを基調とした5層に細分され地山ブロックを多含する。遺構の北側からほぼ完形の中世土器器・皿(7～10)が丁寧に配置された状態で出土した。

SK11 (第25図、図版13)

調査区東側X18、Y3～4に位置する。長軸2.20m、短軸0.77m、深さ0.62mを測る長方形の土坑である。主軸はN-5°-Wである。底部は平底を呈し、断面形状はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色シルト・暗褐色シルト・黄褐色シルトを基調とした7層に細分され地山ブロックを多含する。南側でSD10を切る。

SK14 (第25図、図版14)

調査区中央北寄りX21、Y3～4に位置する。長軸1.57m、短軸0.93m、深さ0.26mを測る長方形の土坑である。主軸はN-3°-Eである。底部は平底を呈し、断面形状はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒色シルト・黒褐色シルト・黄褐色シルトを基調とした4層に細分され地山ブロックを多含する。遺構の東側からほぼ完形の中世土器器・皿(11～18)が丁寧に配置された状態で出土した。

SK17 (第25図、図版14)

調査区中央北側X17～18、Y7に位置する。長軸1.76m、短軸0.80m、深さ0.50mを測る長方形の土坑である。主軸はN-7°-Eである。底部は平底を呈し、断面形状はほぼ垂直立ち上がる。埋土は黒褐色シルト・黄褐色シルト・灰黄褐色シルトを基調とした6層に細分され地山ブロックを多含する。遺構の中央北寄りから完形の青白磁の合子・身(19)が丁寧に配置された状態で出土した。

SK06・07・08、P24 (第26図、図版15)

調査区中央南寄りX12、Y3～4に位置する。SK06は長軸1.67m、残存短軸0.57m、深さ0.06mを測

る楕円形の土坑である。底部は平底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる。北側をSK07に、南側をSD08に切られる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。SK07は残存長軸1.40m、短軸1.05m、深さ0.09mを測る楕円形の土坑である。底部は平底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる。東側をSK08に切られる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。SK08は直径0.90m、深さ0.21mを測る円形の土坑である。底部はやや丸底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる。西側でSK07を切る。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。P24は長軸0.94m、残存短軸0.35m、深さ0.49mを測る楕円形のピットである。底部は丸底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。北側をSK07に切られ、P24を切る。埋土は黒色粘質土を基調とした2層に細分される。

SK13（第26図、図版15）

調査区中央北寄りX20、Y5に位置する。長軸1.11m、短軸0.89m、深さ0.11mを測る不定形の土坑である。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色シルト・褐灰色シルトを基調とした3層に細分される。

SK16（第26図、図版15）

調査区南東側X10、Y6に位置する。長軸1.23m、短軸0.74m、深さ0.12mを測る不定形の土坑である。底部は平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした3層に細分される。

SD03・04（第27図、図版15）

調査区東側X9～13、Y8に位置する。SD03は残存長1.81m、幅0.71m、深さ0.06mを測る。主軸はN-56°-Wで北東から南西に延びる。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。西側の一部をSD04に切られ、東側は調査区外に延びる。埋土は黒色シルトを基調とした4層に細分される。SD04は残存長5.90m、幅0.56m、深さ0.32mを測る。主軸はN-16°-Eで南から北に向かって弧状に延びる。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。北側をSD08に切られ、南側でSD03を切る。埋土は黒色シルトを基調とした4層に細分される。

SD05、P06・07（第27図、図版16）

調査区南東側X6、Y1～2に位置する。SD05は長さ2.33m、幅0.35m、深さ0.17mを測る。主軸はW-3°-Sで西から東に延びる。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒色シルトを基調とした3層に細分される。南側をP06・07に切られる。P06は直径0.25m、深さ0.15mを測り、P07は直径0.20m、深さ0.15mを測る円形のピットである。いずれも底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土はP06が黒色シルトを基調とした単層であり、P07は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

SD06、P16（第27図、図版16）

調査区南東側X7～8、Y3に位置する。SD06は長さ2.66m、幅0.28m、深さ0.20mを測る。主軸はN-1°-Wで北から南に延びる。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒色シルトを基調とした3層に細分される。中央でP16を切る。P16は残存直径0.24m、深さ0.03mを測る楕円形のピットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

SD07、P17・18・19（第27図、図版16）

調査区南東側X8、Y1～2に位置する。SD07は長さ2.33m、幅0.24m、深さ0.13mを測る。主軸はW-4°-Nで西から東に延びる。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒色シルトを基調とした2層に細分される。東側でP17に切られ、中央においてP18を切る。P17は長軸0.38m、

短軸0.23m、深さ0.21mを測り、P18は残存長軸0.33m、短軸0.25m、深さ0.08mを測り、P19は長軸0.38m、短軸0.25m、深さ0.10mを測る楕円形のピットである。いずれも底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土はP17が黒色シルトを基調とした3層に細分され、P18・19は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

SD08 (第27図、図版15・16)

調査区中央南寄りX11～12、Y1～9に位置する。残存長14.42m、幅2.86m、深さ0.57mを測る。主軸はW-6°-Sで西から東に向かって延び、両端とも調査区外に延びるため全容は不明である。断面形状は緩やかに立ち上がり、弧状を呈する。埋土は黒褐色シルトを基調とした3層に細分される。遺物は土師器・壺片(24)、近世陶磁器(25～27)や細片であるため図示できないが土師器片・陶磁器片が出上している。

SD10 (第28図、図版17)

調査区中央X15～18、Y2～5に位置する。溝の形状はコの字状を呈する溝であり、北辺・南辺と東辺に切り合い関係が認められないことから同一造構とした。北辺は長さ4.19m、幅0.52m、深さ0.29mを測り、東辺は長さ1.35m、幅1.27m、深さ0.40mを測り、南辺は長さ4.70m、幅0.71m、深さ0.56mを測り、全長は13.24mを測る。東辺の断面形状は緩やかに立ち上がり弧状を呈し、やや幅が広いのに対し、北辺・南辺の底部はやや平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がり幅が狭い。また、深度は北辺・南辺の西端が最も浅く、東辺にかけて深くなる。埋土は黒色粘質土・黒褐色粘質土を基調とした5層に細分される。北辺をSK11に切られ、南辺をP40・41・42を切る。

SD09・15 (第29図、図版18)

調査区中央西寄りX14～16、Y1～2に位置する。SD09は残存長1.14m、幅0.66m、深さ0.06mを測る。主軸はW-37°-Sで西から東に延びる。底部は平底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色シルトを基調とした単層である。東側でSD15を切り、西側は調査区外に延びる。SD15は長さ3.75m、幅0.43m、深さ0.17mを測る。主軸はN-17°-Eで南から北に延びる。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。中央をSD09に、北側をP26に切られる。

SD11 (第29図、図版18)

調査区中央南寄りX16～18、Y3に位置する。長さ3.49m、幅0.34m、深さ0.23mを測る。主軸はN-3°-Wで北から南に延びる。底部は平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

SD12 (第29図、図版18)

調査区東側X19～20、Y2に位置する。長さ4.34m、幅0.45m、深さ0.26mを測り、北西から南東に向かって弧状に延びる。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。中央でP56に切られる。埋土は黒色シルトを基調とした2層に細分される。

SD13 (第29図、図版18)

調査区東側X19～21、Y2に位置する。長さ3.88m、幅0.61m、深さ0.33mを測る。主軸はN-10°-Wで北から南に向かって延びる。底部は平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。北側でSK12を切る。埋土は黒色シルトを基調とした2層に細分される。

P09・10 (第30図、図版19)

調査区南西側X6、Y3に位置する。P09は長軸0.32m、短軸0.22m、深さ0.20mを測り、P10は長軸0.31

m、残存短軸0.18m、深さ0.44mを測るいずれも楕円形のビットである。P09の底部は丸底を呈し、断面形状は急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。P10は断面逆三角形を呈する。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P11 (第30図、図版19)

調査区南東側X 7、Y 8に位置する。長軸0.65m、短軸0.49m、深さ0.14mを測る円形のビットである。底部はやや平底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる弧状を呈す。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P20 (第30図、図版19)

調査区南西側X 9、Y 3に位置する。直径0.26m、深さ0.12mを測る円形のビットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる弧状を呈す。埋土は黑色シルトを基調とした2層に細分される。

P23 (第30図、図版19)

調査区中央南寄りX 9、Y 4に位置する。直径0.24m、深さ0.04mを測る円形のビットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる弧状を呈す。埋土は黒色シルトを基調とした単層である。

P27・28 (第30図、図版19)

調査区西側X 15、Y 2に位置する。P27は直径0.28m、深さ0.16mを測る円形のビットである。P28は長軸0.47m、短軸0.23m、深さ0.24mを測る楕円形のビットである。いずれも底部は丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P30 (第30図、図版19)

調査区中央南寄りX 13、Y 4に位置する。直径0.31m、深さ0.15mを測る円形のビットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる弧状を呈す。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P31 (第30図、図版19)

調査区西側寄りX 13、Y 1に位置する。直径0.35m、深さ0.21mを測る円形のビットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P32 (第30図、図版20)

調査区西側寄りX 13、Y 1に位置する。直径0.30m、深さ0.19mを測る円形のビットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P34 (第30図、図版20)

調査区西側寄りX 13、Y 2に位置する。長軸0.37m、短軸0.29m、深さ0.21mを測る楕円形のビットである。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P36 (第30図、図版20)

調査区西側寄りX 13、Y 2に位置する。直径0.21m、深さ0.11mを測る円形のビットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

P37 (第30図、図版20)

調査区西側寄りX 13、Y 2に位置する。長軸0.24m、短軸0.16m、深さ0.07mを測る楕円形のビットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。埋土は黑色シルトを基調とした単層である。

P43 (第30図、図版20)

調査区中央X14、Y3に位置する。直径0.23m、深さ0.20mを測る円形のビットである。底部は平底を呈し、断面形状は急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

P53 (第30図、図版20)

調査区西側X18、Y2に位置する。直径0.24m、深さ0.17mを測る円形のビットである。底部は平底を呈し、断面形状は急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P54 (第30図、図版20)

調査区西側X18、Y2に位置する。長軸0.26m、短軸0.19m、深さ0.15mを測る楕円形のビットである。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒色シルトを基調とした単層である。

P57 (第30図、図版20)

調査区中央西寄りX19、Y2に位置する。直径0.37m、深さ0.05mを測る円形のビットである。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とした単層である。

P58 (第31図、図版21)

調査区中央西寄りX20、Y3に位置する。直径0.19m、深さ0.07mを測る円形のビットである。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土はにぶい黒褐色シルトを基調とした単層である。

P59 (第31図、図版21)

調査区中央西寄りX20、Y3に位置する。直径0.21m、深さ0.13mを測る円形のビットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P60 (第31図、図版21)

調査区中央西寄りX19、Y3に位置する。直径0.25m、深さ0.13mを測る円形のビットである。底部は丸底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P61 (第31図、図版21)

調査区中央西寄りX19、Y3に位置する。直径0.20m、深さ0.14mを測る円形のビットである。底部は丸底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

P64・65・66 (第31図、図版21)

調査区中央西寄りX19、Y1～2に位置する。P64は長軸0.67m、短軸0.49m、深さ0.11mを測る楕円形のビットである。底部は平底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる。P65は直径0.22m、深さ0.08mを測り、P66は直径0.15m、深さ0.06mを測る円形のビットである。いずれも底部は丸底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

P67 (第31図、図版21)

調査区中央西寄りX19、Y1に位置する。直径0.47m、深さ0.08mを測る円形のビットである。底部は丸底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる弧状を呈する。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

P68・69 (第31図、図版21)

調査区中央西寄りX19、Y2に位置する。P68は直径0.17m、深さ0.06mを測り、P69は直径0.22m、深さ0.08mを測る円形のビットである。いずれも底部は丸底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。埋土は明黄褐色シルトを基調とした単層である。

P74 (第31図、図版22)

調査区南東側X9、Y7に位置する。直径0.44m、深さ0.14mを測る円形のビットである。底部は丸底

を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした2層に細分される。

P80 (第31図、図版22)

調査区南東側X11、Y7に位置する。直径0.26m、深さ0.11mを測る円形のピットである。底部は丸底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

P84 (第31図、図版22)

調査区東側X17、Y8に位置する。直径0.23m、深さ0.06mを測る円形のピットである。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトを基調とした単層である。

P86 (第31図、図版22)

調査区中央X17、Y5に位置する。長軸0.45m、短軸0.27m、深さ0.06mを測る楕円形のピットである。底部はやや平底を呈し、断面形状は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

P88 (第31図、図版22)

調査区中央北東寄りX20、Y6に位置する。直径0.23m、深さ0.07mを測る円形のピットである。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトを基調とした単層である。

P90・91 (第31図、図版22)

調査区中央北東寄りX21、Y7に位置する。P90は長軸0.28m、短軸0.12m、深さ0.04mを測る楕円形のピットである。底部はやや平底を呈し、断面形状はやや緩やかに立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトを基調とした単層である。P91は長軸0.30m、短軸0.16m、深さ0.11mを測る楕円形のピットである。底部は丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

P92 (第31図、図版22)

調査区西側X18、Y2に位置する。直径0.18m、深さ0.09mを測る円形のピットである。底部は丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを基調とした単層である。

P93 (第31図、図版22)

調査区西側X14、Y2に位置する。直径0.24m、深さ0.17mを測る円形のピットである。底部はやや丸底を呈し、断面形状はやや急に立ち上がる。埋土は暗褐色シルトを基調とした単層である。

(3) 遺物の概要

出土遺物には、土師器、須恵器、中世土師器・皿、珠洲焼、青白磁、近世陶磁器などがある。遺物は整理箱に6箱ほど出土し、遺物の年代は、古代・中世の二時期に区分される。遺物はできる限り帰属時期を特定し、それを各文末に記した。遺物の帰属時期について、土師器は山島編年(山島 1988)に、中世土師器・皿は越前編年(越前 1996)に、近世陶磁器は九州近世陶磁学会(九州陶磁器の編年 2000)に基づき比定した。土師器の帰属時期は概ね8世紀後半に、中世土師器・皿は12世紀後半～13世紀前半に位置付けられる。

S101 (第50図、図版42)

1は土師器・壺もしくは壺の口縁部片である。口縁端部は面をもち、断面形状は方形を呈する。口縁部はナデが施され、口縁部内面はハケが施されている。8世紀後半に位置付けられる。

2は土師器・小壺の口縁部片である。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は若干先細りする。体部は若干丸みを呈し、内外面にはナデが施され、外面には強いナデによる凹凸痕が認められる。口縁部に一部ススが付着する。8世紀後半に位置付けられる。

3は土師器・壺の口縁部から体部片である。口縁端部は面をもち、断面形状は方形を呈する。口縁部は

若干外屈して立ち上がり、体部はやや丸みをおびる。口縁部外面にはナデが施され、胴部には継位のハケが、口縁部内面は横位のカキメが施されている。内外面の一部にススが付着している。8世紀後半に位置付けられる。

SK02 (第50図、図版42)

4はロクロ成形の中世土師器・皿である。底部から口縁部にかけて若干丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。底部内面見込み部分をナデ廻すため、見込み中央は若干盛り上がる。底部には糸切り痕が認められる。(RE II類)

5は非ロクロ成形の中世土師器・皿である。口縁部は短く垂直気味に立ち上がり、若干浅身である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部は丸く収まる。底部は平底を呈する。(ND II類)

6は非ロクロ成形の中世土師器・皿である。口縁部は短く開いて立ち上がり、浅身である。口縁部は強い一段ナデが施され、口縁端部は丸く収まる。底部は平底を呈する。(ND II類)

SK10 (第50図、図版42)

7は非ロクロ成形の中世土師器・皿である。口縁部は短く立ち上がり、若干浅身である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部は丸く収まる。底部は若干丸みを帯びた平底を呈する。(ND II類)

8・9は非ロクロ成形の中世土師器・皿である。口縁部は開いて立ち上がり、若干深身である。口縁部は強い一段ナデが施されるため若干外反し、体部中位にはナデによる明瞭な稜をもつ。口縁端部は丸く収まり、底部は丸底を呈する。(ND II類)

10は非ロクロ成形の中世土師器・皿である。口縁部は短く立ち上がり、若干浅身である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部は丸く収まる。底部は平底を呈する。(ND II類)

SK14 (第50図、図版42)

11は非ロクロ成形の中世土師器・大皿である。口縁部は内弯しながら垂直気味に立ち上がり、深身である。口縁部は二段ナデが施され、口縁端部はやや先細りする。底部は若干丸みを帯びた平底を呈する。(NA II類)

12は非ロクロ成形の中世土師器・大皿である。口縁部は内弯しながら垂直気味に立ち上がり、深身である。口縁部は強い一段ナデが施され、口縁部は強い一段ナデが施されるため、体部中位にはナデにより稜をもつ。口縁端部は丸く収まり、底部は若干丸みを帯びた平底を呈する。(NC II類)

13は非ロクロ成形の中世土師器・皿である。口縁部は短く開いて立ち上がり、浅身である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部は丸く収まる。底部は平底を呈する。(ND II類)

14は非ロクロ成形の中世土師器・皿である。口縁部はやや開いて立ち上がり、浅身である。口縁部は強い一段ナデが施されるため、体部中位にはナデによる明瞭な稜をもつ。口縁端部は丸く収まり、底部は丸底を呈する。(ND II類)

15～18は非ロクロ成形の中世土師器・皿である。口縁部は短く垂直気味に立ち上がり、浅身である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部は丸く収まる。底部は平底を呈する。(ND II類)

SK17 (第50図、図版42)

19は青白磁・合子の身である。体部外面にはやや太い蓮弁文が施され、体部中位には段をもつ。胎上は白色を呈し硬質である。緑掛かった水色の釉が体部の上位および内面のみ施釉され、その他の体部下位、底部外面、受部は露胎である。

SD02 (第50図、図版42)

20は珠洲焼・壺の底部片である。体部はやや開いて立ち上がり、底部は平底を呈する。底部外面はヘラ

切り後ナデが施されている。

21は珠洲焼・播鉢の底部片である。内面には摩滅のため単位不明の鉢し日が、間隔をもって施されている。底部外面はヘラ切り後ナデが施されている。

22は信楽焼・皿である。体部は開いて立ち上がり、口縁部で垂直に屈曲する。口縁端部はやや丸く取まり、緩やかな輪花状を呈する。高台は削り出し高台であり細身である。全体に褐色の釉薬が施釉されており、底部は露胎である。内面見込み部分は圓線を描き、菊花文をあしらった文様が施されている。19世紀前半に位置付けられる。

23は伊万里焼・碗である。底部から体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で直立する。口縁端部はやや先細りする。体部外面にはコンニャク印判による桐文が施される。18世紀中頃に位置付けられる。

S D08 (第50図、図版42)

24は土師器・壺の体部片である。体部はやや直立気味に立ち上がり、底部付近の破片であると考えられる。摩滅により調整は不明瞭であるが、内外面ともハケおよびナデが施されている。

25は肥前陶磁器・碗の口縁部片である。いわゆる陶胎染付である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸く取まる。暗青灰色の釉が施釉され、体部外面には唐草文が施されている。18世紀後半に位置付けられる。

26は唐津・播鉢の口縁部片である。口縁部にて外屈し、口縁端部は丸く取まる。全体に褐色の鉄釉が施され、体部内面には鉢し日が施されている。

27は伊万里焼・碗である。体部はやや開いて緩やかに立ち上がり、口縁端部はやや先細りする。全体に乳白色の釉薬が施釉され、豈付きおよび内面見込み部分のみ露胎である。体部内面下半には圓線を、底部内面中央には五弁花、体部外面には草花文が呉須により描かれている。18世紀中頃に位置付けられる。

包含層 (第50図、図版42)

28は珠洲焼の壺の口縁部片である。口縁部は嘴頭状に肥厚し、口縁端部はやや平坦である。

表採 (第50図、図版42)

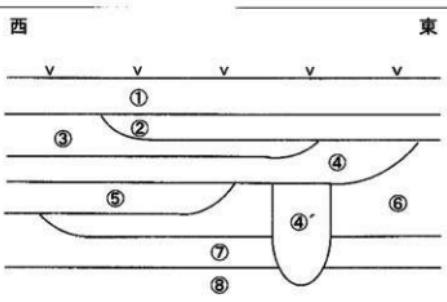
29は青磁・碗であり、同安窯系青磁碗と考えられる。体部はやや開いて立ち上がり、口縁端部は外屈する。全体に淡青灰色の釉薬が施釉され、体部内面にはヘラ描文が施されている。(小川幹太)

5 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区の概要

(1) 地形と基本層序 (第8図)

本調査区は、山田川左岸河岸段丘上、遺跡の南東部に位置する。地形は、南西側から北東側に向けて緩やかに傾斜する。標高は約82.30～83.30mを測る。

基本層序は、①耕作土、②黒褐色土やや粘質(床土)、③黒褐色粘質土(盛土)、④、⑤黒色粘質土(中世の遺物包含層)、⑥黒褐色土やや粘質(中世以前の堆積層)、⑦黒茶褐色土やや粘質(漸移層)、⑧黄褐色粘質土(地山)である。④、⑤の層は調査



第8図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区の基本層序

区内北側に存在するものの、本調査区では中世の遺物出土量は極めて少ない。④の中世遺構は、調査区北側では④の中世遺物包含層から掘り込んでおり、南側では上面を後世に削平され耕土直下で確認できる。昭和30年代に実施されたは場整備等で削平された箇所が多く、調査区内南側では②、③、④の層がなく、⑤の地山層が耕土直下で広範囲に確認できる。

(2) 遺構の概要 (第33～35図、図版23～25)

本地区では、中世の大溝1条、小溝2条、土坑約8基、その他小穴等を確認した。遺構の帰属時期は、概ね12世紀後半から13世紀前半となる。

SK01・02 (第33・34図、図版24)

S K01は調査区の南西側、X 1～2、Y 0.5～1に位置する。長軸が南北方向に1.2m、短軸が東西方向に0.8m、深さ0.1mを測る。遺構の軸方向は、N - 30° - Eである。壁面の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。埋土はやや粘質の黒色土に黄褐色土が少量混じる。出土遺物は無い。

S K02は調査区の西側中央、X 3～4、Y 2.5～3に位置する。長軸が南北方向に1.4m、短軸が東西方向に0.6m、深さ0.15mを測る。遺構の軸方向は、N - 8° - Eである。壁面の立ち上がりは緩やかで、床面は平坦である。埋土はやや粘質の黒色土に黄褐色土が混じる。出土遺物は無い。

S K01・02とも出土遺物は無いが、遺構の規模、埋土等から墓坑の一種と考えられる。

SK03 (第33図、図版24)

調査区中央部、X 3～4、Y 4.5～5.5に位置する。長軸が南北方向に1.3m、短軸が東西方向に0.9m、深さ0.1～0.15mを測る。遺構の軸方向は、ほぼ真北である。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は平坦である。埋土はやや粘質の黒色土で、固くしまる。S D01を切っている。出土遺物は無いが、遺構の規模、埋土等から墓坑の一種と考えられる。

SK04・05 (第33図、図版24)

調査区の北西側、X 5～8、Y 2.5～4に位置する。S K04は長軸が南北方向に1.2m、短軸が東西方向に0.9m、深さ0.2mを測る。遺構の軸方向は、N - 42° - Eである。壁面の立ち上がりは急で、床面は平坦である。埋土はやや粘質の黒色土に黄褐色土が多く混じる。出土遺物には、中世土師器・皿が4個体ある。

S K05は長軸が南北方向に1.5m以上、短軸が東西方向に0.8m、深さ0.25mを測る。遺構の軸方向は、ほぼ真北を向いている。壁面の立ち上がりは急で、床面は平坦である。埋土は黒色土に黄褐色土を少量含む。出土遺物には、中世土師器・皿が5個体ある。これらの中世土師器は、遺構内で意図的に配置されていたと考えられる。

S K04・05とも、出土遺物から12世紀後半から13世紀前半に存在し、遺物の出土状況から墓坑であったと考えられる。

SK08 (第33図、図版24)

調査区の南東側、X -1～0、Y 6～8に位置する。S K04は長軸が東西方向に2.9m、短軸が南北方向に0.9m以上、深さ0.3～0.35mを測る。遺構の南側大半は調査区外にある。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は平坦である。埋土はやや粘質の黒色土に黄褐色土が少量混じる。出土遺物は無い。

SD01 (第34図、図版25)

調査区中央を南北に縱断する。X -1～8、Y 2～7.5に位置する。幅4.5m～7.5m、深さ0.1～0.3mを測る。壁面の立ち上がりは緩やかで、北側では掘り方がはっきりしない。埋土は黒色土に黄褐色土が少量混じる。流れは、調査区外の南から調査区外の北西に向かっている。S K03・05・08に切られる。出土遺物が無く、

専属時期の詳細は不明であるが、上坑との切り合い状況から12世紀前半以前に存在したと考えられる。

SD02・03・04（第34図、図版25）

S D02は調査区南西隅、X -1～1、Y 0～2に位置する。幅1.0m～1.8m、深さ0.5mを測る。断面形は台形状を呈する。溝は、調査区外南側からほぼ真北に伸びた後、西側へクランクする。埋土は黒色粘質土に黄褐色土が多く混じる。流れは、調査区外の南から調査区外の東に向かっている。出土遺物は無いが、SK05等と遺構の軸方向が類似していることから、墓域を区画する溝であったと考えられる。

S D03は調査区西側中央、X 2～5、Y 0～3に位置する。幅0.5m～0.8m、深さ0.3mを測る。断面形は台形状を呈する。溝は、調査区外南西側から東に伸びた後、北側へクランクする。埋土は黒褐色土に黄褐色土が多く混じる。出土遺物は無いが、これも区画溝の一部と考えられる。

S D04はS D03に付属する。調査区南西隅、X 2～3、Y 1～2に位置する。幅0.4m、深さ0.3mを測る。断面形はすり鉢状を呈する。溝は、S D03から北に伸びる。埋土は黒色土に黄褐色土が多く混じる。出土遺物は無い。

（3）遺物の概要（第51図、図版43）

古代から中世、近世の遺物が整理箱で1箱出土した。遺物には、須恵器、中世土師器、珠洲焼がある。以下、図化したものについて記述する。

SK04（第51図、図版43）

1～4は中世土師器、皿である。いずれも口径約8～9cm、器高1.7～2.0cmの手捏ね成形であり、二段ナデを施す。口縁をやや外反させている。1、4の口縁端部は丸く、2、3の口縁端部は外面に面取りする。遺物はいずれも12世紀後半に帰属する。

SK05（第51図、図版43）

5～9は中世土師器、皿である。いずれも手捏ね成形で二段ナデを施す。5は口径約12cm、器高2.7cmを測る。口縁は直線的に外反する。底面の器壁は薄いが、体部から口縁端部を肥大させている。6は逆に底面の器壁に厚みを持たせ、口縁は薄い。5～7、9は口縁端部を丸めており、8は外面を面取りする。6～9は口径約8～9cm、器高1.7～2cmを測る。遺物はいずれも12世紀後半に帰属する。

その他の遺物（第51図、図版43）

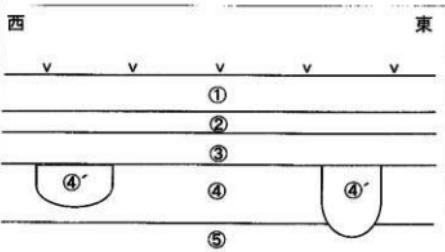
10は須恵器、底の口縁部か。体部が大きく屈曲し、口縁を大きく外反させている。11は越中瀬戸・壺である。12は珠洲焼・すり鉢の片口部である。（佐藤型子）

6 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡3地区の概要

（1）地形と基本層序（第9図）

本調査区は、山田川左岸河岸段丘上、遺跡の南部端に位置する。地形は、両側から北側に向けて緩やかに傾斜する。標高は約84.70～84.80mを測る。

基本層序は、①耕作土、②黒褐色土やや粘質（床土）、③黒褐色土疊混じり（盛土）、④黒色土（中世以前の堆積層）、⑤黄褐色粘質土（地山）である。③、④の層は調査区



第9図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡3地区の基本層序

内北側に存在するものの、本調査区では遺物出土量は極めて少ない。⑤の中世遺構は、調査区北側では③の層から掘り込んでおり、南側では上面を後世に削平され耕土直下で確認できる。昭和30年代に実施されたは場整備等で削平された箇所が多く、調査区内南側では②、③、④の層がなく、⑤の地山層が耕土直下で広範囲に確認できる。

(2) 遺構の概要（第36・37図、図版26）

本地區では、中世から近世の小溝5条、上坑約5基、その他小穴等を確認した。

SK01（第36図、図版26）

調査区の中央部、X 7～8、Y 4.5～5.5に位置する長軸が南北方向に3.0m、短軸が東西方向に2.5m、深さ0.8mを測る。遺構の軸方向は、ほぼ真北である。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は凹凸がある。埋土はやや粘質の黒褐色土である。出土遺物は無い。

SK02・03（第36図、図版26）

調査区東側中央部、X 4.5～7、Y 8.5～10に位置する。SK02は長軸が東西方向に1.8m以上、短軸が南北方向に1.1m、深さ0.2m、SK03は長軸が南北方向に1.3m、短軸が東西方向に1.1m、深さ0.18mを測る。SK02は遺構の東側が調査区外東へ伸びている。遺構の軸方向は、SK02がほぼ真北、SK03がN-55°-Wである。壁面の立ち上がりはやや急で、床面は凹凸がある。埋土はSK02が黒色土に黄褐色土が少量混じり、SK03が黒褐色土に黄褐色土が少量混じる。出土遺物は無い。

SD01（第36図、図版26）

調査区北東側、X 13～13.5、Y 7～9に位置する。溝は調査区外北側から南に伸び、東へクランクする。幅0.3m、深さ0.5mを測る。断面形は方形を呈する。埋土は黒色土に黄褐色土が少量混じる。出土遺物は無い。

SD02・03（第36図、図版26）

調査区北東側、X 12～13.5、Y 9～9.5に位置する。SD02は幅0.45m、深さ0.15mを測り、SD03は幅、深さとも0.2mを測る。断面形はSD02が台形状、SD03が方形を呈する。埋土はSD02が暗オリーブ褐色土、SD03が黒色土に黄褐色土が少量混じる。出土遺物は無い。

SD05（第36図、図版26）

調査区東側中央部、X 6.5～7、Y 9.5～10に位置する。幅0.3m、深さ0.08mを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は黒色土に黄褐色土が少量混じる。SK02に付属する。出土遺物は無い。

(3) 遺物の概要（第51図、図版43）

中世、近世の遺物が整理箱で1箱出土した。いずれも包含層等からの出土である。図化したもの以外の遺物には、ふいごの羽口らしき上製品がある。以下、図化したものについて記述する。

13は越中漬戸・奥付である。（佐藤型子）

7 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の概要

(1) 地形と基本層序（第10図）

宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡は山田川扇状地の中央部に位置する。海拔は84.3m～84.8mを測り、南から北に向かって地山が低くなる地形である。

調査区東側では旧河川（砂礫土）が検出された。旧河川は地山を削って形成されており旧河川埋土を掘り込んで溝などの遺構が確認される。旧河川埋土中から遺物は検出されなかったため、旧河川の形成時期

は不明である。旧河川上に構築された溝や、その他の遺構が中世に属すると考えられることから旧河川は古代以前には埋没していたものと考えられる。

基本土層は上位から耕作土(Ⅰ層)、盛土(Ⅱ層土)、包含層(黒色シルトⅢ層土)、漸移層(Ⅲ'層)地山(黄褐色シルトⅣ層土)の順に堆積している。なおここでは宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1区の基本層序との対応を優先し、包含層と地山シルト層との間層に位置付けられる漸移層をⅢ'層とする。

地表から地山までの深さは、調査区北側では0.7~0.8m、南側では0.2~0.3mである。調査区北側では包含層・漸移層が一部遺存しているが、調査区中央以南ではそのほとんどが削平されており、表土、盛土、地山ないし旧河川埋土という層序となる。

遺構は包含層上位から構築されていると考えられるが、包含層上面の搅乱が著しく遺構検出が困難であったため、地山まで掘り下げて遺構検出を行った。

(2) 遺構の概要

本調査区において検出された遺構は、溝14条、土坑11基、ピット26基である。遺構密度はやや希薄であるが、方形に廻る溝S D01、S D02は住居に伴う区画溝の可能性がある。また中世土師器・皿が埋納されたS K01、S K06は祭祀的な遺構である可能性があり、方形の土坑S K08、S K11は土坑墓の可能性がある。ここでは主要遺構について述べる。なお、P 20・S K03は欠番となる。

S D01 (第38図、図版28・29)

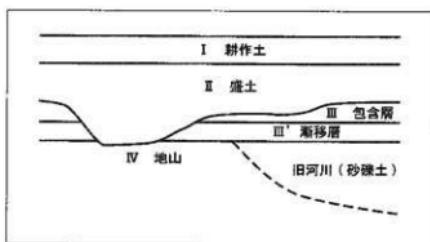
調査区中央X 9~13、Y 6~9に位置する方形に廻る溝である。北辺は長さ6.22m、幅0.70m、深さ0.30mを測り、東辺は長さ6.98m、幅1.05m、深さ0.54mを測り、南辺は長さ6.26m、幅0.76m、深さ0.64mを測り、西辺は長さ7.47m、幅0.42m、深さ0.20mを測る。東辺はS D02の西辺と重複し、S D02に切られる。また南東角でS D10を切る。主軸はN-4°-Wである。いずれの辺も底部は平坦で、側壁は直線的に開きながら立ち上がる。北・西辺に比べ東・南辺がやや深いが、遺構面が北西側ほど深く削平されているためと考えられる。また東辺の幅がやや広いのは、S D02により再開削されたためと考えられる。埋土は黒色土を基調とし4層に細分される。溝内部の寸法は、南北約7.1m、東西約6.1mでありやや南北方向に長い。

S D02 (第38図、図版28・29)

調査区中央X 9~14、Y 9~14に位置する方形に廻る溝である。北辺は長さ8.03m、幅1.02m、深さ0.07mを測り、東辺は長さ8.18m、幅1.31m、深さ0.23mを測り、南辺は長さ8.41m、幅1.06m、深さ0.17mを測り、西辺は長さ8.51m、幅1.05m、深さ0.20mを測る。西辺はS D01の東辺と重複し、S D01を切る。主軸はN-3°-Wである。いずれの辺も底部は平坦で、側壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色土を基調とし5層に細分され、埋土から土師器・壺の体部片(1)と中世土師器・皿(2)が出土した。溝内部の寸法は、南北約7.3m、東西約7.3mであり、ほぼ正方形である。

S D10 (第39図)

調査区中央X 6~9、Y 9~11に位置するL字状の溝である。東西辺は長さ4.07m、幅0.73m、深さ0.25



第10図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の基本層序

mを測り、主軸はN-87°-Eである。南北辺は長さ5.66m、幅0.49m、深さ0.11mを測り、主軸はN-4°-Wである。北側でSD01に切られる。埋土は黒色土の単層である。東西辺の底部は平坦で、側壁は直線的に開きながら立ち上がる。南北辺の底部は丸みを帯び、側壁は緩やかに立ち上がる。

SD03・04・05・06 (第40図、図版30)

調査区東側X4~19、Y20~24に位置する。SD03は残存長28.42m、幅1.39m、深さ0.35mを測る。主軸はN-3°-Wで南北に延びるが、北側は調査区外に続き、南側は削平されているため全容は不明である。底部は平坦で、北側では側壁が直線的に開きながら立ち上がるが、南側では側壁が緩やかに立ち上がる。北側でSD04を切るが、SD05・06との切り合い関係は認められない。埋土は黒褐色土と褐灰色土の2層に細分され、埋土から珠洲焼(3)が出土した。SD04は残存長4.17m、幅2.07m、深さ0.33mを測る。主軸はN-88°-Eで東西に延びるが、東側は調査区外へ続く。底部は平坦で、側壁は直線的に開きながら立ち上がる。西側をSD03に切られる。埋土は褐灰色土を基調として5層に細分され、円窓や木片などを多量に含む。SD05は残存長4.90m、幅1.02m、深さ0.07mを測る。主軸はN-87°-Eで東西に延びるが、東側は調査区外へ続く。底部は丸みを帯び、側壁は緩やかに立ち上がる。西側はSD03と合流する。埋土は黒褐色土の単層である。SD06は残存長6.03m、幅0.61m、深さ0.14mを測る。主軸はN-84°-Eで東西に延びるが、東側は調査区外へ続く。底部は丸みを帯び、側壁は緩やかに立ち上がる。西側はSD03と合流する。埋土は黒褐色土の単層である。SD05・06間の距離は約7.3mである。

SD08 (第40図、図版30)

調査区北側X18、Y16に位置する。残存長1.44m、幅0.37m、深さ0.32mを測る。主軸はN-3°-Eで南北に延びるが、北側が調査区外に続いたため全容は不明である。底部は平坦で、側壁は直線的に開きながら立ち上がる。埋土は黒褐色シルト質土を基調とした2層に細分される。

SD09 (第40図、図版30)

調査区北東側X15~16、Y17~18に位置するL字状の溝である。長さ2.84m、幅0.55m、深さ0.36mを測る。上軸は東西辺ではN-75°-E、南北辺ではN-5°-Eとなる。底部は丸みを帯び、北側および西側の側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南側および東側の側壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色土の単層である。

SE01 (第41図、図版31)

調査区南側X1~2、Y9~10に位置する。掘方は長軸2.53m、幅1.70m、深さ2.25mを測る隅丸長方形の井戸である。主軸はN-88°-Wである。底部はやや傾斜し、側壁は垂直に立ち上がる。湧水層である橙色砂疊層まで掘られており、埋土は12層に細分される。底部から垂直方向に堆積する③層から、井戸枠が存在していたものと考えられるが、井戸枠部材等は出土しなかった。交互に堆積する③~⑫層は黒褐色土や橙色砂等などからなり、井戸枠の表込め土と考えられる。

SK01 (第41図、図版31)

調査区北西X17、Y7に位置する。南側を削平されているため全容は不明であるが、残存長軸0.75m、短軸0.47m、深さ0.08mを測る。底部は平坦で、側壁は直線的に開きながら立ち上がる。埋土は黒褐色ないし暗灰黄色を基調とした4層に細分されるが、①層中から中世土師器・皿(4~9)が出土した。(5・6・8・9)は中央やや東寄りの①層中に並べられた状態で出土した。

SK02 (第42図、図版31)

調査区北西X14、Y8~9に位置する。長軸1.41m、短軸0.82m、深さ0.11mを測る隅丸長方形の土坑である。底部は平坦で側壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色土の単層である。

SK04 (第42図、図版31)

調査区中央X 7、Y13に位置する。長軸1.04m、短軸0.90m、深さ0.23mを測る方形の土坑である。底部は平坦で、側壁は急に立ち上がる。埋土は褐色の単層である。

SK05 (第42図、図版32)

調査区南側X 2～3、Y15～16に位置する。長軸1.72m、短軸0.95m、深さ0.25mを測る不整形の土坑である。底部は平坦で、側壁は急に立ち上がる。埋土は黒褐色土と褐色の2層に細分される。

SK06 (第41図、図版31)

調査区北側X 16、Y14～15に位置する。長軸1.10m、短軸0.68m、深さ0.17mを測る隅丸長方形の土坑である。底部は平坦で、側壁は直線的に開きながら立ち上がる。埋土は黒色土の単層であり、埋土中から中世土師器・皿(10～15)が出土した。(10・11・12・15)は北東側の埋土中に並べられた状態で出土した。

SK08・P16 (第42図、図版32)

SK08は調査区北側X 16～17、Y 10～11に位置する。長軸2.32m、短軸0.62m、深さ0.23mを測る長方形の土坑である。主軸はN-1°-Wである。底部はほぼ平坦だが、北側に段を有しやや深くなる。これは根茎等の搅乱である可能性が考えられ、そのため平面形においても北側が不整形となるものと考えられる。側壁はやや丸みを帯びながら急に立ち上がる。埋土は黒色土と浅黄色土の2層に細分される。中央西側をP16に切られる。P16はX 17、Y 11に位置し、長軸0.20m、短軸0.19m、深さ0.08mを測る円形のピットである。底部は丸みを帯び、側壁は丸みを帯びて急に立ち上がる。埋土は黒色土の単層である。

SK09 (第42図、図版32)

調査区北側X 16～17、Y 14に位置する。長軸1.40m、短軸0.50m、深さ0.13mを測る隅丸長方形の土坑である。主軸はN-6°-Eである。底部はやや丸みを帯び、側壁は直線的に開きながら立ち上がる。埋土は黒色土の単層である。

SK11 (第42図、図版32)

調査区北側X 16～17、Y 10に位置する。長軸2.17m、短軸0.60m、深さ0.39mを測る長方形の土坑である。主軸はN-5°-Wである。底部は平坦で、側壁は垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色ないし褐色を基調として3層に細分される。

P02 (第43図、図版33)

調査区北東X 16、Y 21に位置する。長軸0.50m、短軸0.42m、深さ0.10mを測る隅丸方形のピットである。底部は平坦で側壁は急に立ち上がる。埋土は褐色土の単層である。

P03 (第43図、図版33)

調査区北側X 17、Y 15に位置する。長軸0.27m、短軸0.22m、深さ0.15mを測る円形のピットである。底部はほぼ平坦で側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒色土の単層である。

P04 (第43図、図版33)

調査区北側X 15、Y 11に位置する。長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.16mを測る円形のピットである。底部は丸みを帯び、側壁は急に立ち上がる。埋土は黒色土とぶい黄橙色土の2層である。

P05 (第43図、図版33)

調査区北側X 16、Y 11に位置する。長軸0.25m、短軸0.21m、深さ0.23mを測る円形のピットである。底部は狭く尖底状を呈し、側壁は急に立ち上がる。埋土は黒色土の単層である。

P08 (第43図、図版33)

調査区北側X 17、Y 12に位置する。長軸0.31m、短軸0.18m、深さ0.16mを測る楕円形のピットである。

底部は丸みを帯び、側壁は急に立ち上がる。埋土は黒色土と褐灰色土の2層である。

P10 (第43図、図版33)

調査区北側X18、Y12に位置する。長軸0.44m、短軸0.39m、深さ0.17mを測る隅丸方形のピットである。底部は平坦だが中央に段を有する。側壁は急に立ち上がる。埋土はオリーブ黒色土の単層である。

P12 (第43図、図版33)

調査区北側X16、Y14に位置する。長軸0.21m、短軸0.16m、深さ0.13mを測る不整形のピットである。底部は狭く尖底状を呈し、側壁は急に立ち上がる。埋土は黒色土の単層である。

P13 (第43図、図版33)

調査区北側X18、Y14に位置する。北側が調査区外へ続くため全容は不明であるが、残存長軸0.41m、短軸0.40m、深さ0.21mを測るピットである。底部は丸みを帯び、側壁は緩やかに立ち上がる。埋土は褐灰色シルト質土の単層である。

P14 (第43図、図版34)

調査区北東X18、Y15に位置する。北側が調査区外へ続くため全容は不明であるが、残存長軸0.31m、短軸0.26m、深さ0.25mを測るピットである。底部は平坦で側壁は直立に立ち上がる。埋土は褐灰色シルト質土の単層である。

P15 (第43図、図版34)

調査区中央西寄りX12、Y9に位置する。長軸0.26m、短軸0.22m、深さ0.10mを測る円形のピットである。底部は丸みを帯び、側壁は緩やかに立ち上がる。埋土は明黄橙色土の単層である。

P17 (第43図、図版34)

調査区中央西寄りX8、Y9に位置する。長軸0.70m、短軸0.50m、深さ0.17mを測る隅丸方形のピットである。底部は丸みを帯び、側壁は緩やかに立ち上がる。埋土は褐灰色土を基調とし2層に細分される。

P22 (第43図、図版34)

調査区北側X15～16、Y10に位置する。長軸0.33m、短軸0.28m、深さ0.11mを測る楕円形のピットである。底部は丸みを帯び、側壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層である。

P23 (第43図、図版34)

調査区中央北寄りX14、Y10に位置する。長軸0.29m、短軸0.21m、深さ0.15mを測る不整形のピットである。底部は平坦で側壁は急に立ち上がる。埋土は黒褐色土の単層である。

P25 (第43図、図版34)

調査区北側X18、Y12に位置する。長軸0.25m、短軸0.15m、深さ0.15mを測る円形のピットである。底部は丸みを帯び、側壁は急に立ち上がる。埋土は褐灰色土の単層である。

P26 (第43図、図版34)

調査区中央X13～14、Y12～13に位置する。長軸0.26m、短軸0.24m、深さ0.25mを測る隅丸方形のピットである。底部は狭く尖底状を呈し、側壁は急に立ち上がる。埋土は褐灰色土の単層である。

P27 (第43図、図版34)

調査区中央東寄りX10、Y18に位置する。長軸0.41m、短軸0.37m、深さ0.11mを測る隅丸方形のピットである。底部は丸みを帯び、側壁は緩やかに立ち上がる。埋土は褐灰色シルト質土を基調とし2層に細分される。埋土中から繩文土器片(16)が出土した。

(3) 遺物の概要

出土遺物には、土師器・須恵器・中世土師器・皿、珠洲焼・近世陶磁器などがある。遺物は整理箱に2箱ほど出土し、遺物の年代は、中世を中心とする。遺物はできる限り帰属時期を特定し、それを各文末に記した。遺物の帰属時期について、中世土師器・皿は越前編年（越前 1996）に基づき比定した。中世土師器・皿は12世紀後半～13世紀前半に位置付けられる。

S D02 (第52図、図版44)

1は土師器・甕の体部片である。体部内外面はナデが施されている。

2は非クロコ成形の中世土師器・皿の口縁部片である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部は先細りする。口縁部は短く内湾して立ち上がり、器壁は薄い。(N D II類)

S D03 (第52図、図版44)

3は珠洲焼・壺の底部片である。体部はやや開いて立ち上がり、底部は平底を呈する。底部外面はヘラ切り後ナデが施されている。

S K01 (第52図、図版44)

4は非クロコ成形の中世土師器・皿の口縁部片である。口縁部は二段ナデが施され、口縁端部はやや先細りする。上段をつまみあけるように撫で、上段撫では若干面を持ち、二段の境界は若干稜をもつ。(N D I類)

5・6・7は非クロコ成形の中世土師器・皿である。口縁部は二段ナデが施され、口縁端部は丸く収まる。体部中位には下段のナデにより明瞭な稜をもち、二段の境界はやや弱い稜をもつ。底部は丸底を呈し、浅身である。(N D I類)

8・9は非クロコ成形の中世土師器・大皿である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部はやや先細りする。口縁端部は面取りし断面は三角形を呈する。体部中位には下段のナデにより明瞭な稜をもつ。底部は平底を呈し、深身である。(N B I類)

S K06 (第52図、図版44)

10・11は非クロコ成形の中世土師器・皿である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部は丸く収まる。口縁部は直角に立ち上がり、底部は平底を呈する。内面見込み部分には強いナデによる稜をもつ。11は体部下半から底部縁辺にかけて器壁が厚くなる。(N G類)

12は非クロコ成形の中世土師器・皿である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部はやや丸く収まる。口縁部は短く垂直気味に立ち上がり、底部は平底を呈する。器壁は薄く若干浅身である。(N D II類)

13は非クロコ成形の中世土師器・皿である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部は丸く収まる。口縁部は短く立ち上がり、底部は丸底を呈する。器壁は厚く若干深身である。(N D II類)

14・15は非クロコ成形の中世土師器・皿である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部はやや先細りする。体部中位は強いナデにより窪みができる。口縁部は短く垂直気味に立ち上がり、底部は平底を呈する。器壁は厚く若干深身である。(N D II類)

P27 (第52図、図版44)

16は縄文土器である。縄文原体RLの回転方向を変え羽状縄文が施される。

包含層(III層) (第52図、図版44)

17は非クロコ成形の中世土師器・皿の口縁部片である。口縁部は一段ナデが施される。口縁端部は面取りしているがやや弱く、邊部はやや丸く収まる。(N D II類)

18は珠洲焼・すり鉢の口縁部片である。口縁端部は方形を呈し、やや幅の狭い面をもつ。体部は直線的

に立ち上がり、体部内面には10条1單位の御目が間隔をもって施されている。器壁はやや薄い。15世紀前半（V期）に比定される。

盛土（II層）（第52図、図版44）

19は非クロコロ成形の中世土師器・大皿の口縁部片である。口縁部は一段ナデが施され、口縁端部はやや先細りする。口縁端部は面取りし断面はやや丸みを帯びた三角形を呈する。体部中位には下段のナデにより稜をもつ。底部は平底を呈し、深身である。（N B I類）

20はクロコロ成形の中世土師器・皿である。底部から口縁部にかけて直線的に開いて立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。器壁はやや厚い。底部には糸切り痕が認められる。（R B類）

21は越中瀬戸焼・秉燭の体部片である。受部および受部内部の芯立ては欠損している。受部内面および体部上半は鉄釉が施釉されており、体部下半から底部は露胎である。体部はロクロナデ、底部には糸切り痕が残る。

22は伊万里・碗の口縁部片である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は先細りする。全体に若干青味のある透明釉を施釉する。外面には呉須により草花文、口縁部内面には團線が描かれている。

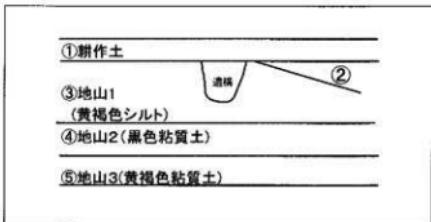
23は伊万里・碗の口縁部片である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は先細りする。全体に透明釉を施釉する。外面には呉須により詳細不明の文様が、口縁部内面には四方擗文が描かれている。

（久保浩一郎）

8 梅原胡摩堂遺跡27地区の概要

（1）地形と基本層序（第11図）

本調査区は、山田川左岸河岸段丘上の突端、遺跡の南東部端に位置する。地形は、西側から東側に向けて緩やかに傾斜する。標高は約80.80m～80.90mを測る。基本層序は、①耕作土、②黒色砂礫土（中世以前の遺物包含層）、③黄褐色砂礫土（地山1）、④黒色砂礫土（地山2）、⑤黄褐色砂質土（地山3）である。②の層は削平を受けており、調査区内では東側にのみ遺存している。南側では後世に削平され、耕土直下で確認できる。



第11図 梅原胡摩堂遺跡27地区の基本層序

（2）遺構の概要（第19～30図、図版1～8）

本地区では、小溝1条、土坑約9基、その他小穴等を確認した。遺構の帰属時期は、概ね中世以降と思われる。

SKO1（第45図、図版37）

調査区の北西側、X10～11、Y1～2に位置する。長軸が南北方向に1.5m、短軸が東西方向に1m、深さ0.24mを測る。遺構の西側でP43を切る。壁面の立ち上がりは緩やかで、埋土は黒褐色土に地山上がブロック状に混じる。出土遺物はない。

SKO2（第45図、図版37）

調査区北側、X5～6、Y0～1に位置する。土坑の西側は調査区外に伸びており、遺構の全容は不明であるが、直径約2mの円形の土坑であると思われる。深さ1.2mを測り、壁面はやや急に立ち上がる。埋土は黒色土を中心に2層に分けられる。遺物は出土していない。北東端でP20と、南東端でP29と接する。

SK03 (第45図、図版37)

調査区の北東側、X 9～10、Y 6～7に位置する。土坑の東側は調査区外に伸びるため、遺構の全容は定かでないが、南北方向、東西方向ともに1mの不整形な平面形状を呈す。深さは0.1～0.2mを測り、埋土は黒色土を中心にして2層に分けられる。遺物は出土していない。

SK04 (第45図、図版37)

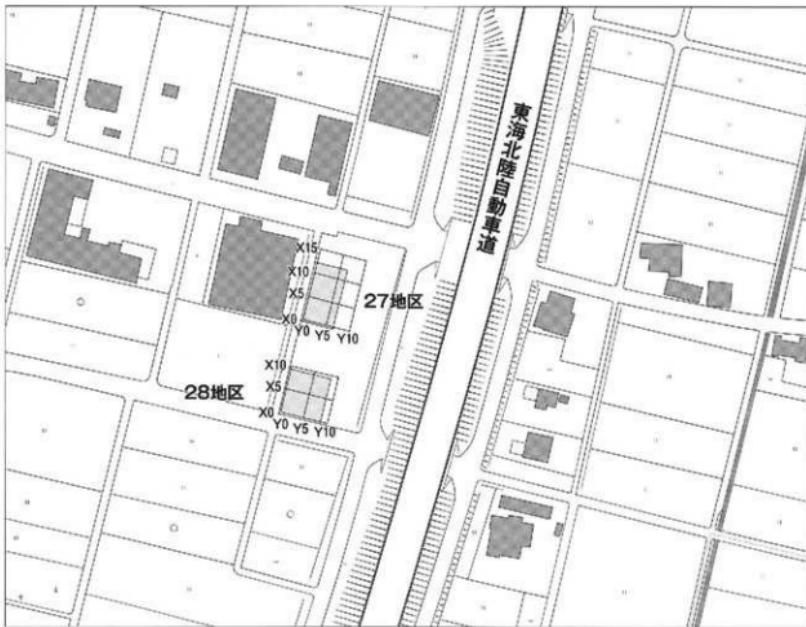
調査区中央からやや北側、X 7～8、Y 5～6付近に位置する。長軸が南北方向に2.2m、短軸が東西方向に0.9mの長方形の土坑である。深さは0.2mを測り、埋土は黒色土と黒褐色土に地山が混じる。遺物は出土していない。

SK05 (第45図、図版37)

調査区中央からやや北側、X 7～8、Y 5付近に位置する。南北方向が0.9m、東西方向が1.1mの不整形の土坑である。深さは0.2mを測り、埋土は黒色土に粗砂が混じる。遺物は出土していない。

SK06 (第45図、図版37)

調査区中央やや南西側、X 3～4、Y 2～3に位置する。南北方向約2.0m、東西方向約2.7mの不整形の土坑である。深さ0.1mを測り、埋土は黒色土を中心にして3層に分けられる。出土遺物はない。P14に切られる。



第12図 梅原胡摩堂遺跡の調査区割 (S = 1:2,000)

SK07 (第45図、図版37)

調査区やや南西側、X 1～2、Y 2～3に位置する。北東から南西方向に長軸5.5m以上、北西から南東方向に短軸4.4m以上、深さ0.14mを測る。平面形は不整形である。壁面の立ち上がりは急で、床面は平坦である。埋土は黒褐色土に暗オリーブ褐色土、鉄分が混じる。出土遺物には、須恵器・甕・杯、土師器・壺・瓶がある。

SD01 (第45図、図版37)

調査区南側中央から西側中央、X 8、Y 6～7付近に位置する。東側は調査区外に延びており、造構の全容は不明である。幅約0.7m、深さ約0.1m、埋土は黒色粘質土と地山粘質土を中心に2層に細分できる。

(3) 遺物の概要 (第53図、図版45)

P48

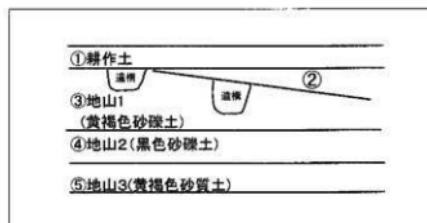
1は鉄製品である。鋸部分が多いが、中心部に厚み約2mmの湾曲した製品が見られる。詳細は不明である。(片田亞紀)

9 梅原胡摩堂遺跡28地区の概要

(1) 地形と基本層序 (第13図)

本調査区は、山田川左岸河岸段丘上の尖端、遺跡の南東部端に位置する。地形は、西側から東側に向けて緩やかに傾斜する。標高は約81.00～81.10mを測る。

基本層序は、①耕作土、②黒色粘土（中世以前の遺物包含層 調査区北東側にわずかに残っている）、③黄褐色粘質土（地山1）、④黒色粘質土（地山2）⑤黄褐色砂質土（地山3）である。遺物包含層、地山ともに著しく削平を受けている。遺物包含層は調査区内の北東の隅に堆積している。



第13図 梅原胡摩堂遺跡28地区の基本層序

(2) 造構の概要

本地区では、溝2条、上坑約1基、その他小穴等を確認した。造構の帰属時期は概ね中世以降と思われる。

SK01 (第47図、図版38)

調査区の中央からやや東側、X 5～6、Y 6～7付近に位置する。南北方向1.5m、東西方向2.5mの隅丸方形の土坑である。深さは約0.3～0.4m、堆土は暗褐色シルトと黒色シルトと地山シルトが混じり、3層に細分できる。出土遺物は無い。

SD01 (第47図、図版38)

調査区の北東側、X 8～9、Y 7～8付近に位置する。幅約0.8m、深さ0.2m、堆土は黒色シルト、黒褐色シルト、暗褐色シルトの3層に細分できる。北側に向けて幅が狭くなり、先は調査区外に延びており、全容は不明である。出土遺物は無い。

SD02 (第47図、図版38)

調査区の北側の中央部、X 7～8、Y 4～6付近に位置する。幅約0.4mの溝である。削平が激しく、深さは0.1m以下であり、溝自体も1mほどの検出にとどまる。埋土は黒色粘質土に地山が混じり、単層である。出土遺物は無い。

(3) 遺物の概要 (第53図、図版45)

遺物包含層から、鉄釉陶器が出土している。口径は約13cmの壺である。(片田亜紀)

IVまとめ

宗守Ⅲ遺跡1地区

宗守Ⅲ遺跡は、試掘調査により古代、中世を主体とする集落遺跡であると想定していたが、今回の調査区では、中世から近世、近代(13世紀から19世紀まで)の集落跡の一端を確認した。

調査区の西側を大溝が走り、調査区北側を横断する細い溝がその大溝に合流し、区画を形成している。比較的大型の土坑がこの溝の近辺に集中していることから、周辺の遺跡での検出例同様、土坑は倉庫もしくは作業場として使用され、調査区西側の大溝は物資の運搬に利用されたのではないだろうか。

宗守Ⅲ遺跡2地区

本調査区において検出された遺構は約130基を数え、全体的に遺構は希薄である。調査区西側で中世の区画溝が検出された以外は、ほとんどの遺構が比較的新しく近世以降のものであった。

中世の区画溝は川土遺物から15世紀のものと考えられ、この溝には比較的大型の土坑が1基付随している。この遺構配置は、梅原胡摩堂遺跡や宗守Ⅱ遺跡など周辺の遺跡でよく確認されており、宗守Ⅲ遺跡1地区でも見られている。1地区と同様、土坑は倉庫もしくは作業場、溝は物資運搬用として利用していたものと考えられる。

宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区

1、本調査区において検出された遺構は約130基を数える。調査区北側においては旧河川(砂礫土)が確認された。旧河川上に遺構が確認されなかったことや、遺構検出面(地山)を削って構築されていることから、本来は調査区北側にも遺跡が展開していたが、この旧河川により削平を受けたものと考えられる。

2、調査区南西側に堅穴住居(S I 01)が検出された。平面形は南北に若干長い方形を呈し、堅穴住居内の南西端からはカマド跡が検出された。カマド跡は焼土粒・炭化物を多含し、土師器・端片・小瓦片などが出土した。また、埋土からは円碟が1点出土した。この円碟は比熱していないことから、カマド(石組)に使用されたものではなく、カマド廃絶時に入り込んだものである可能性がある。堅穴住居は遺物の帰属時期から8世紀後半に位置付けられる。

3、調査区南端と東側から掘立柱建物跡2棟が検出された。南端のS B 01は2間×2間以上になる総柱建物、東側のS B 02は2間×3間の総柱建物である。

4、調査区内から長方形を呈する土坑が6基(S K 02・03・10・11・14・17)検出された。長軸1.14m～2.20m、短軸0.60m～0.93m、深さ0.26～0.62mを測る。いずれの土坑も平面形が長方形を呈し形状が類似することや、土層の堆積状況が類似することなどから、これらの土坑は同じ性格のものであることがいえる。さらに、埋土が地山ブロックを多含することや、断面観察などからみる堆積状況などから、

自然堆積というよりは人為的に埋めたことが窺える。また、SK02からはほぼ完形の中世土師器・皿が、SK10・14からはほぼ完形の中世土師器・皿が丁寧に配置されて、いずれも最下層からそれぞれ出土した。これらの出土遺物は埋葬品と考えられる。それ以外に遺構の形状や埋土・土層堆積状況などから、これらの土坑は土坑墓であると考えられる。土坑墓は遺物の帰属時期から12世紀後半～13世紀前半に位置付けられる。

- 5、SK02・10・11・14・17の最下層の土壤をサンプルとした土壤分析を行ない、土坑内におけるリン酸およびカルシウム量を計測した。また、本遺跡の土壤に含まれるリン酸およびカルシウムの標準量と比較するため、SK14下部の地山、遺構検出面直上の包含層を対照試料とした。リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素である。土坑に含まれるリン酸・カルシウム量を測ることで、土坑墓である可能性を見出そうと試みた。しかしながら土壤分析では、各土坑に含まれるリン酸・カルシウム量は比較的多い数値が出たにもかかわらず、土坑墓として遺体が埋葬されたという決定的な値とはならなかった。それは、対照試料である包含層に含まれるリン・カルシウム量が比較的多いため、遺構直上に堆積した包含層の影響により各遺構の含有量の数値が大きくなつた可能性も示唆されるからである。しかしそのまでも、SK14は他の土坑や包含層よりもリンが僅かながら高い値を示した。遺構・遺物の状況からは土坑墓の可能性は高いが、土壤分析においては土坑墓である可能性はあるものの、決定的な結果とはならなかった。
- 6、土坑墓の長軸はN-2°～14°-Wを指し、掘立柱建物はSB01がN-11°-W、SB02がN-1°-Wを指す。いずれも、多少の差異はあるものの主軸はほぼ北側を指す。このことから、これらの土坑墓と掘立柱建物は同時期に並存していた可能性がある。

宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区

宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡は、試掘調査により古代、中世を主体とする集落遺跡、寺院跡であると想定していたが、今回の調査では、中世（12世紀から13世紀にかけて・鎌倉時代）の寺院跡の一端を確認した。

2地区では、調査区北側にて完形の中世土師器皿を4枚配置した方形の土坑を1基確認した。この他に、同様の規模で中世土師器が出土した土坑1基、出土遺物が無い土坑を3基確認している。規模、埋土の状況、意図的に配置された中世土師器等同様の土坑は、隣接する1地区においても4基確認している。また、本遺跡の北西約1kmに位置する梅原胡摩堂遺跡においても同時期同様の土坑を1基確認しており、墓坑とみられることから、本地区及び1地区で確認した土坑も墓坑であり、周辺一帯が墓域であったと考えられる。また、調査区南西側で検出した区画溝は、この墓域を区画していたものと考えられる。

宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡3地区

宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡は、試掘調査により古代、中世を主体とする集落遺跡、寺院跡であると想定していたが、3地区では、調査区北端で中世の区画溝を1基検出した。調査区中央から南側は倒木痕等が多く、また近代以降に削平された部分も多い。また出土遺物数も僅少であることから、この区画溝が遺跡の南端と考えられる。

宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区

- 1、本調査区において、ピット・土坑・溝・井戸が計52基検出された。これらの遺構は地山である明黄褐色シルト層上面において検出された。本来の遺構構築面は地山上部の黒色シルト層より上位にあったと考えられるが、その大部分がほ場整備等による削平を受けており、生活面は遺存していないと考えられる。
- 2、調査区東側では、明黄褐色シルトの地山が検出されず、砂礫層が検出された。土層断面から砂礫層が

黄褐色シルト層を掘り込んでいることが確認できたため、この砂礫層は旧河川埋土であると考えられる。調査区東側の遺構は、旧河川埋土上の砂礫層を掘り込んで構築されているため、旧河川は遺構構築以前に埋没していたと判断され、旧河川埋土も遺構の基盤層と捉えることができる。

3、ピットは26基検出された。柱穴状に整列するものは認められなかった。また遺物を作わないため、個々の帰属時期や性格は不明である。P27から縄文土器片が1点出土したが、流れ込みと考えられる。

4、土坑は11基検出された。SK01・06では、埋土中に中世土師器・皿が並べられた状態で出土した。一部は削平を受けていると考えられるが、それぞれ6枚以上の皿が置かれていたものと考えられる。これらの遺物はいずれも12世紀後半～13世紀前半に位置付けられると考えられ、遺構も当該期に属すると考えられる。

S K06埋土の土壤分析を行った結果、天然賦存量の上限を上回る量のリン酸が認められた。これは動物由来のリン酸である可能性があり、土坑墓の可能性を示唆するものである。

また、調査区北側では長方形を呈する土坑SK08・09・11が検出された。これらは長軸1.40m～2.32m、短軸0.50m～0.62m、深さ0.13m～0.39mを測り、主軸がほぼ南北方向に一致する。SK11埋土の土壤分析結果では、土坑墓と断定し得るだけのリン酸は認められなかった。しかし、平成22年度に発掘調査が実施された宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区においても同様の土坑が検出されており、中世土師器・皿や青白磁・合子が埋納された状態で出土していることから、土坑墓の可能性が指摘されている。本調査区においては遺物が伴ってはいないが、平面形状や規模などから、同様の性格が想定し得る。

5、溝は14条検出された。調査区中央では方形に掘る溝SD01・02およびL字状の溝SD10が検出された。切り合い関係からSD10、SD01、SD02という変遷が想定される。建物等に伴う区画溝の可能性が考えられるが、溝内部からは建物に伴うと考えられる遺構は検出されなかった。SD02埋土から中世土師器・皿が出土していることから、中世に位置付けられるものと考えられる。

6、調査区東側では東西・南北方向に直線的に延びる溝SD03・04・05・06が検出された。切り合い関係からSD04、SD03・05・06という変遷が想定される。SD01・02と主軸が一致することから、区画溝の可能性が考えられる。

7、井戸は1基が検出された。湧水層である疊層まで掘り込まれており、土層断面から井戸枠が存在していたものと考えられる。埋土の花粉分析・種実遺体分析を行った結果、周辺環境は開けた草地であったと考えられる。

8、本調査区では、遺構に伴う遺物が希薄であるため個々の遺構の時期を判断するのが困難である。しかし主要な遺構は主軸が一致しており、同一時期のものである可能性が高い。宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区において検出された遺構とも形状や主軸が一致しており、SK01・06の中世土師器・皿と1地区で出土した遺物の年代が一致することからも、同一の遺構群として捉え得ると考えられる。

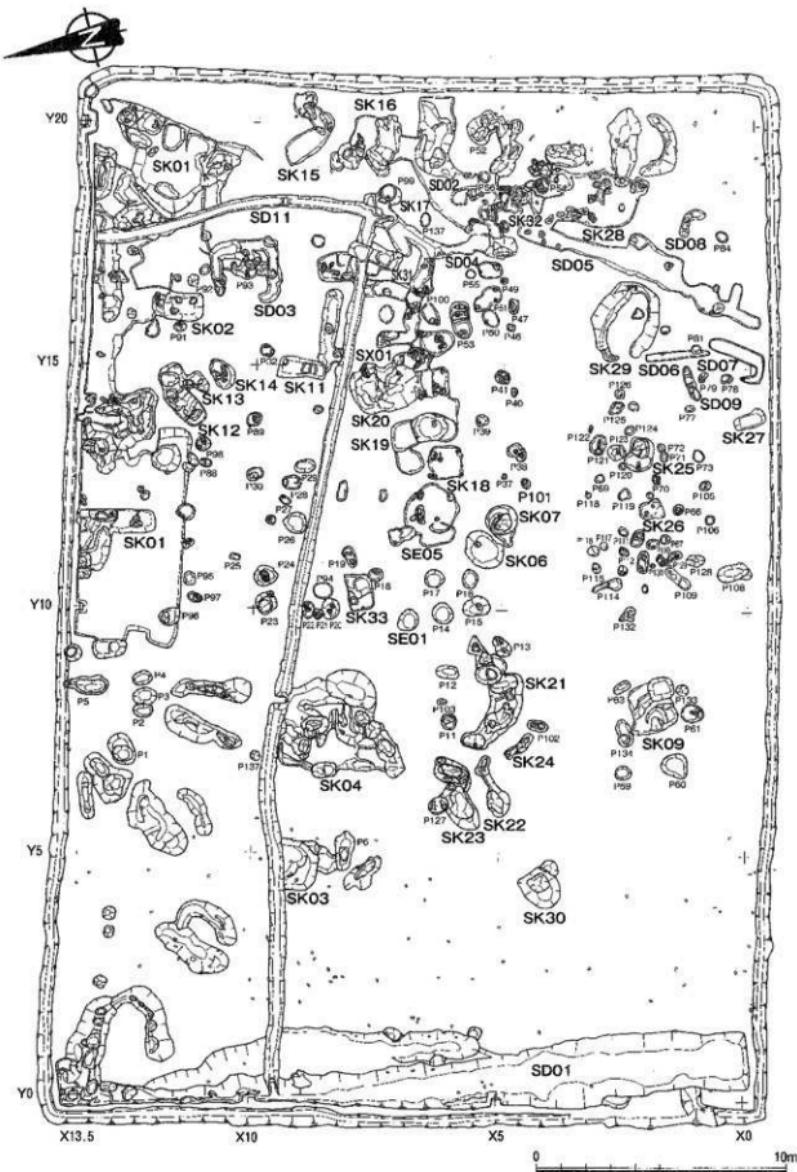
梅原胡摩堂遺跡27地区・28地区

梅原胡摩堂遺跡は昭和57年に発見され、平成元年から東海北陸自動車道建設に伴って大規模な調査が始まった。その後もは場整備事業や県道改良事業で度々調査され、これまでの成果で縄文時代から江戸時代までの複合遺跡であることが分かっている。検出した遺構には、古代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物、井戸、区画溝などが見つかっている。出土遺物も、縄文土器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲焼、越中漬戸、青磁、白磁、木製品、石製品など多種にわたっている。遺跡内の変遷は古代には北側に、中世には南側に中心を移しながら大集落を築いていたことが分かっている。

今回の調査区は、ほ場整備事業に伴って平成22年に試掘調査した結果、遺構を検出したため本調査対象となった。しかし、調査箇所は遺跡の南端であり、当初想定よりも検出遺構、遺物出土量が少なかった。中世において、集落の端の部分に当たる場所であったと思われ、建物跡と考えられるような柱穴の並びも見つからず、柱穴と溝や土坑を数基検出したのみである。

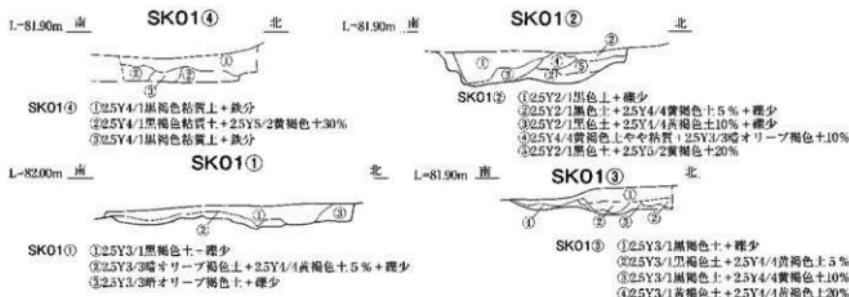
参考文献

- 齊藤孝正・後藤健一1995『須恵器集成図録 第3巻 東日本編Ⅰ』雄山閣
珠洲市立珠洲焼資料館1989『珠洲の名陶』
鈴木次郎1995『石鏡』『縄文文化の研究 7 道具と技術』雄山閣
富山県文化振興財团1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』
南砺市教育委員会2001『在房遺跡』
南砺市教育委員会2006『東殿遺跡 徳成Ⅱ遺跡』
南砺市教育委員会2007『富山県南砺市宗守遺跡Ⅰ 久戸遺跡Ⅰ 梅原胡摩堂遺跡Ⅰ 神成遺跡Ⅳ』
南砺市教育委員会2007『富山県南砺市院林遺跡Ⅰ』
福光町教育委員会1991『うずら山遺跡緊急発掘調査概要』
福光町教育委員会1996『梅原落戸遺跡群Ⅲ』
福光町教育委員会2004『神成遺跡Ⅰ 久戸Ⅱ遺跡Ⅱ』
福光町史編纂室2011『福光町史』
北陸中世土器研究会編1997『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房
吉岡康輔1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



第14図 宗守Ⅲ遺跡1地区平面図 (S = 1:200)

SK01



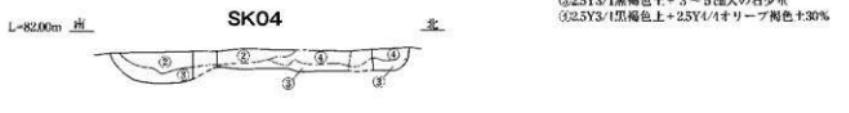
SK01⑤



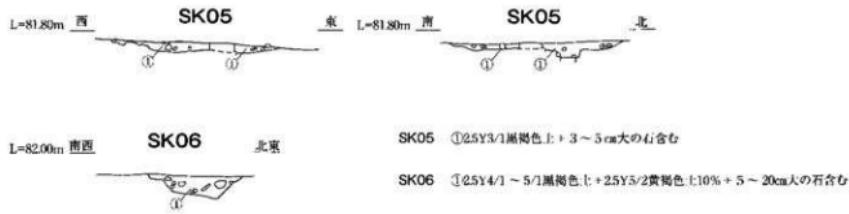
SK02



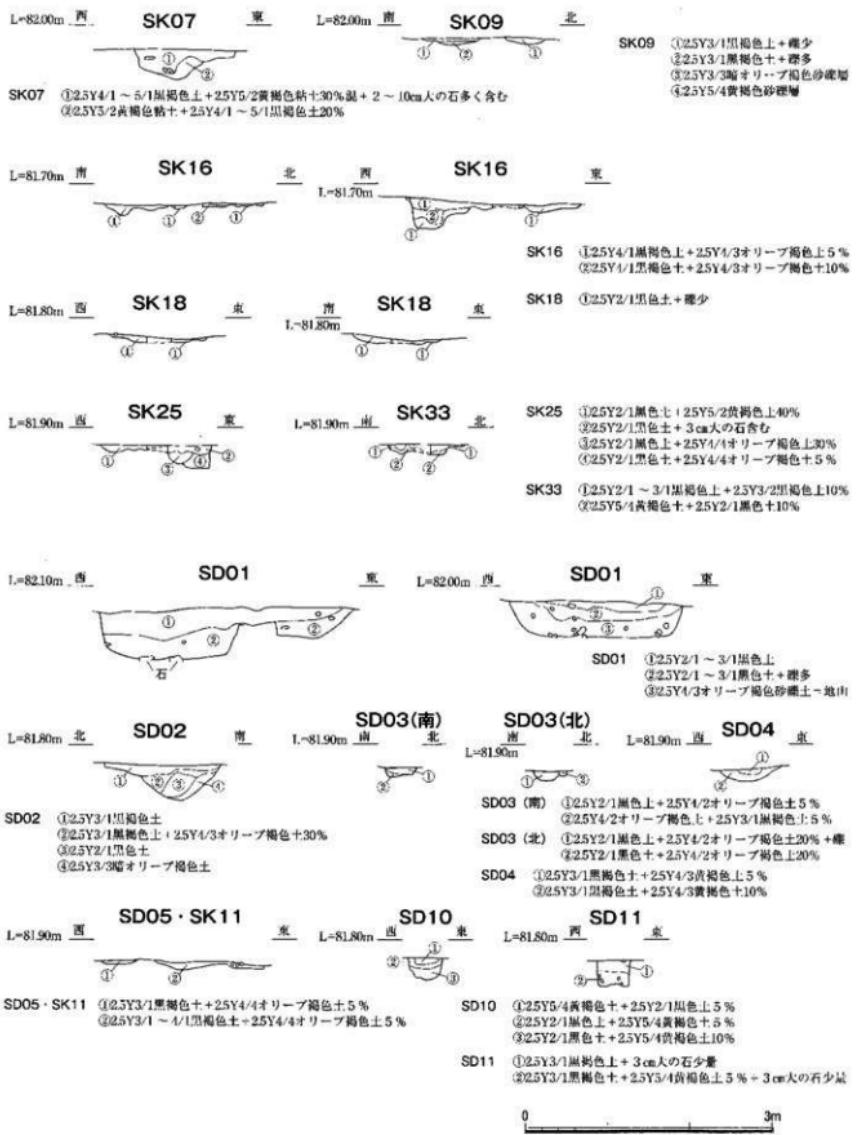
SK04



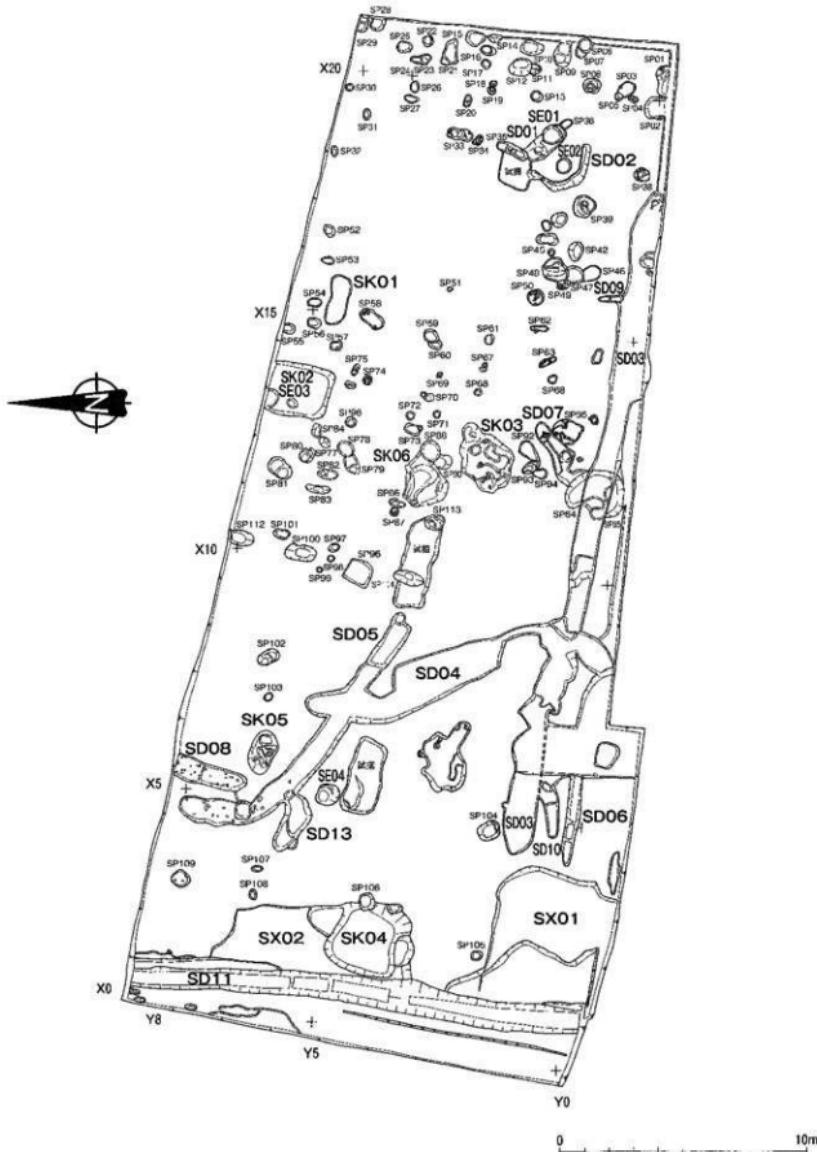
SK05



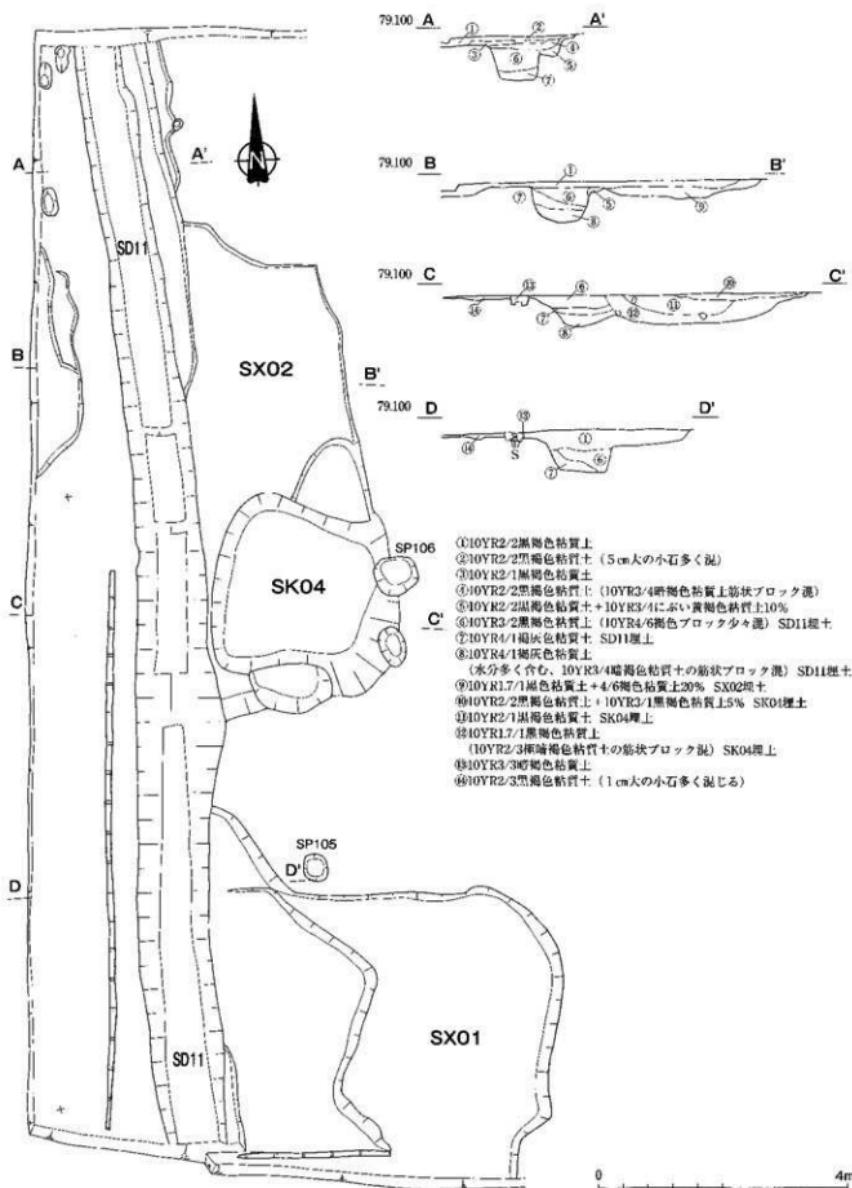
第15図 宗守Ⅲ遺跡1地区の遺構 (1) (S = 1 : 60)



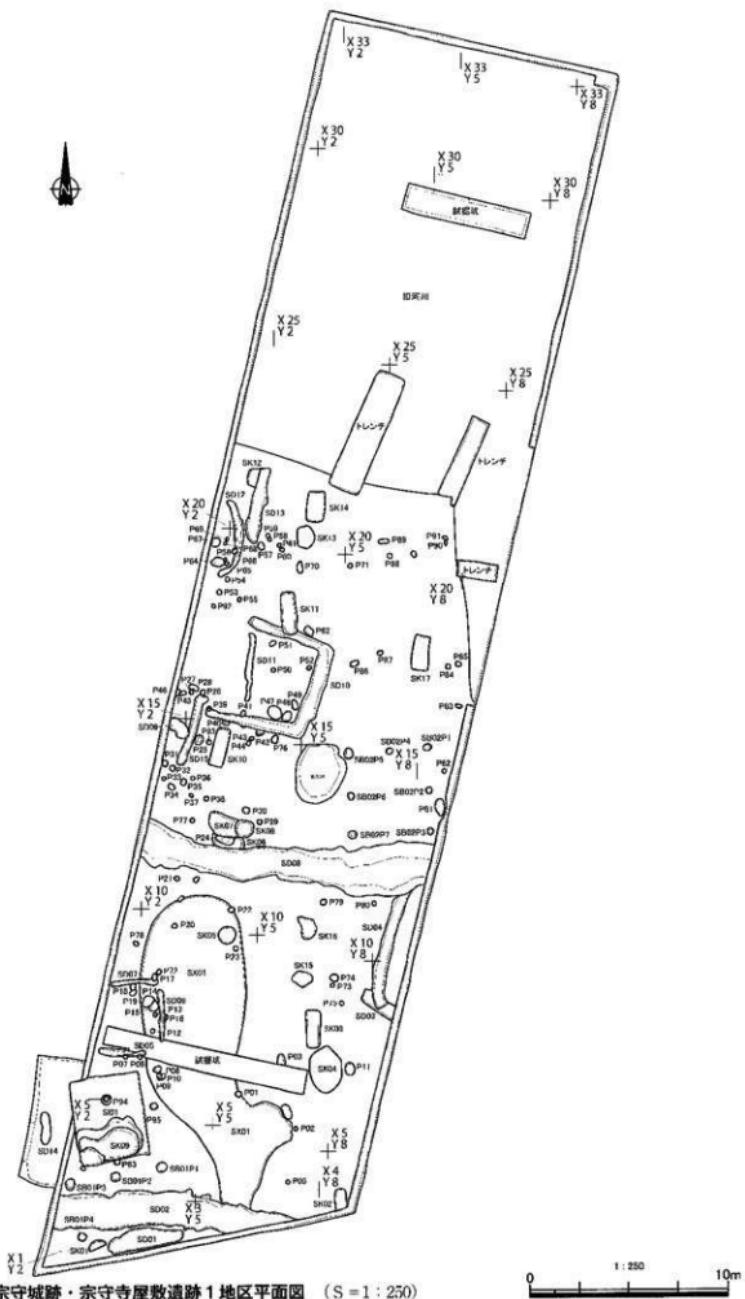
第16図 宗守Ⅲ遺跡1地区の遺構（2）（S=1:60）



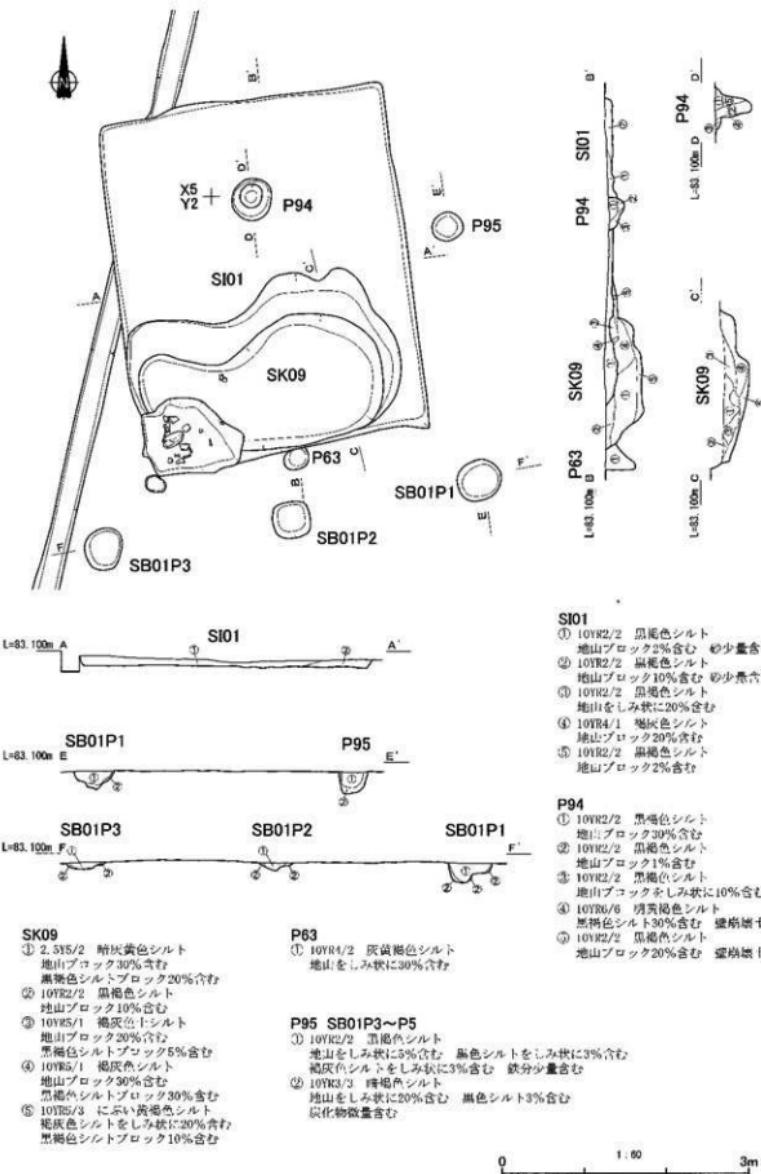
第17図 东守Ⅲ遺跡2地区平面図 (S = 1 : 200)



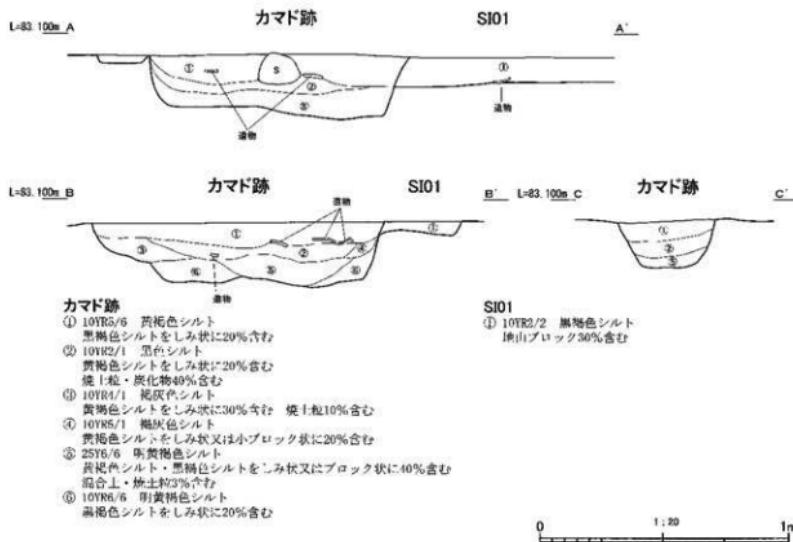
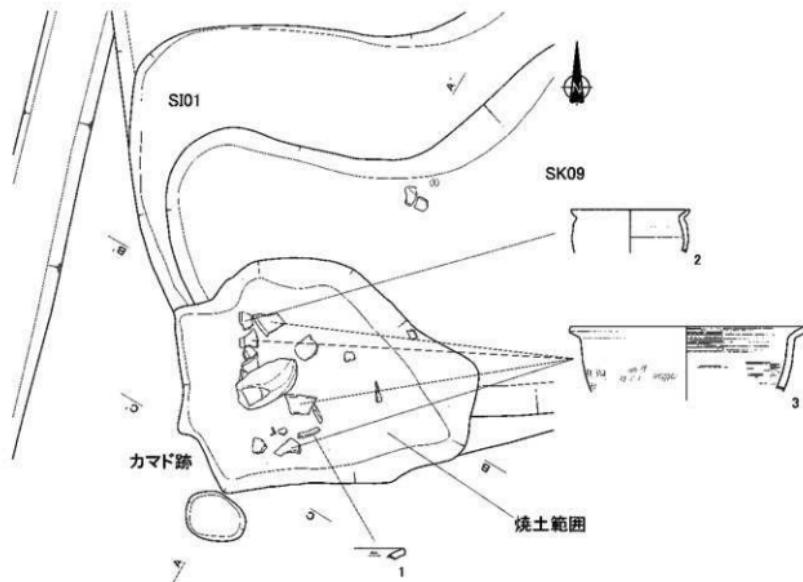
第18図 宗守III遺跡2地区の構造 (S = 1:80)



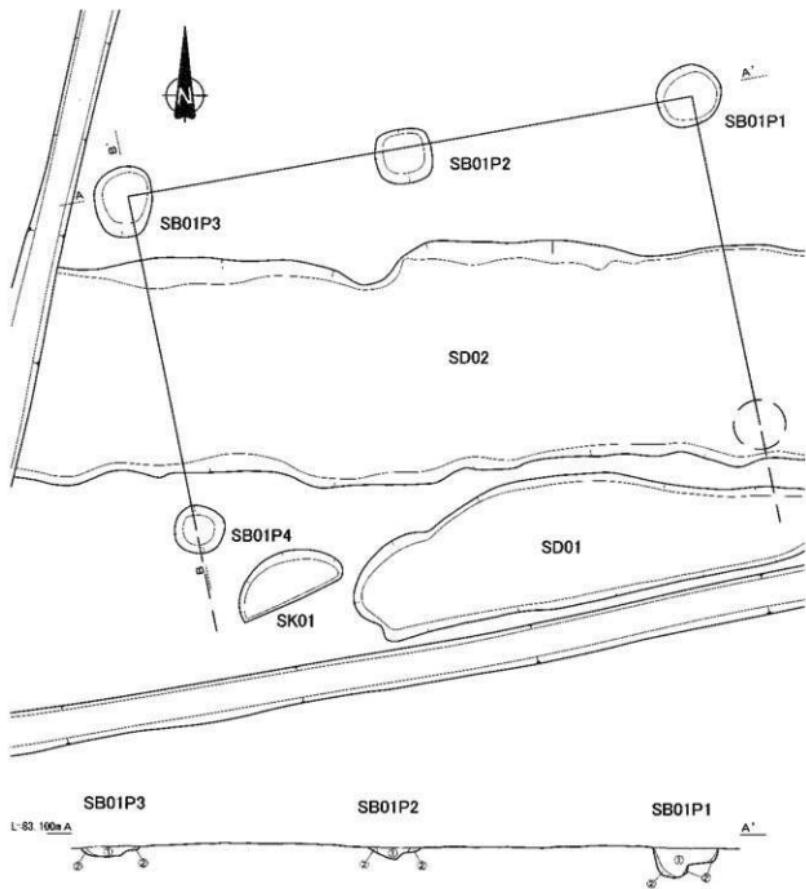
第19図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区平面図 (S = 1:250)



第20図 宗守城跡・宗守寺廻敷遺跡1地区の遺構(1) (S=1:60)



第21図 宗守城跡・宗守寺廻敷遺跡1地区の遺構 (2) (S=1:20)

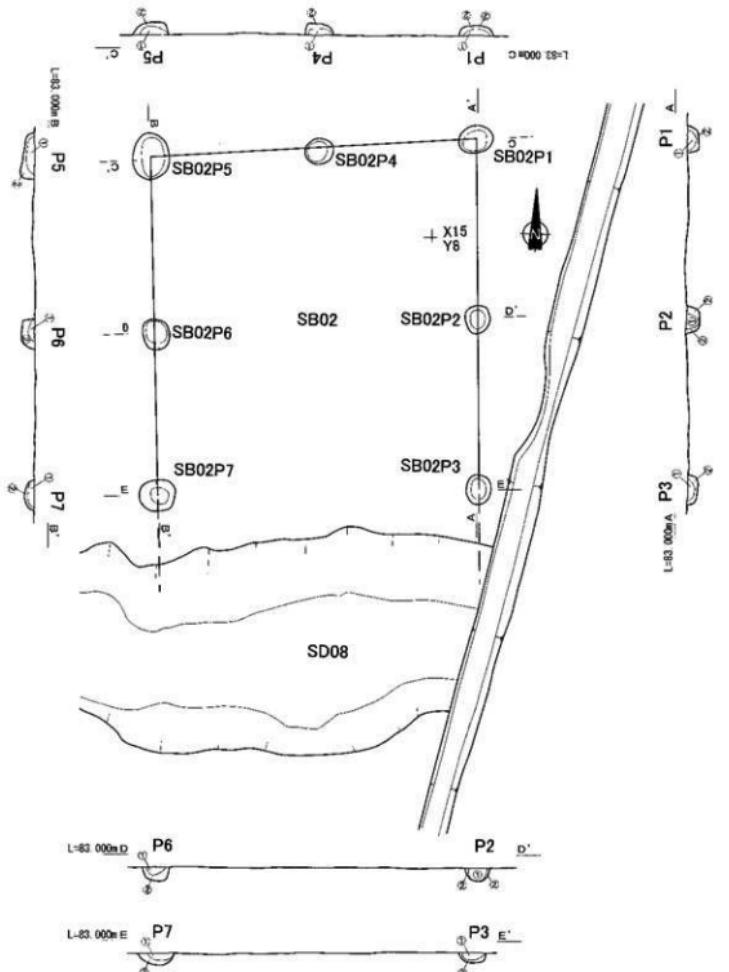


SB01 P1~P4

- ① 10YR2/2 黒褐色シルト
塊山をしみ状に5%含む 黑色シルトをしみ状に3%含む
褐色シルトをしみ状に3%含む 鉄分少量含む
- ② 10YR3/3 暗褐色シルト
塊山をしみ状に20%含む 黑色シルト3%含む
炭化物微量含む

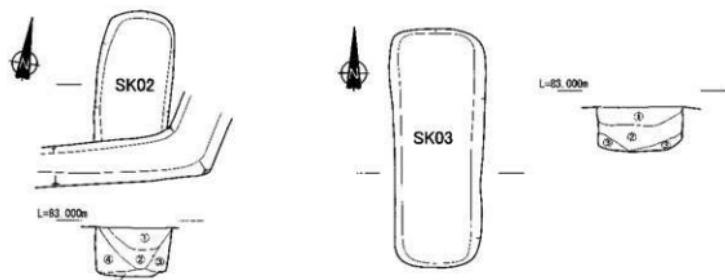
0 1 40 2m

第22図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構（3）（S=1:40）



0 1:60 3m

第23図 宮守城跡・宮守寺廻敷遺跡1地区の遺構(4) (S=1:60)

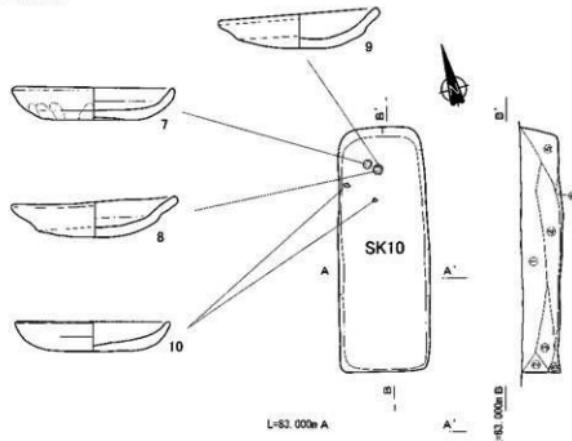


SK02

- ① 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色シルトブロック10%含む φ1~2mm粒の褐色粒多量に含む
- ② 10YR2/1 黒色土シルト
φ3cm前後の黄褐色シルトブロック10%含む
- ③ 10YR4/8 褐色シルト
黒褐色シルトブロック10%含む
- ④ 10YR2/3 黄褐色シルト
φ3cm前後の黄褐色シルトブロック10%含む
φ1~2mm粒の褐色粒多量に含む
- ⑤ 10YR5/6 黄褐色シルト
黑色シルトブロック5%含む

SK03

- ① 10YR2/2 黒褐色シルト
黒色・黄褐色シルトブロック10%含む
φ3mm粒の褐色粒多量に含む φ1mm前後の褐色粒少量含む
- ② 10YR2/2 黑褐色シルト
褐色シルトブロック2%含む
φ3mm粒の褐色粒多量に含む φ1mm前後の褐色粒少量含む
- ③ 10YR1/3 に多い黄褐色シルト
黑色シルトブロック5%含む φ2mm粒の褐色粒多量に含む

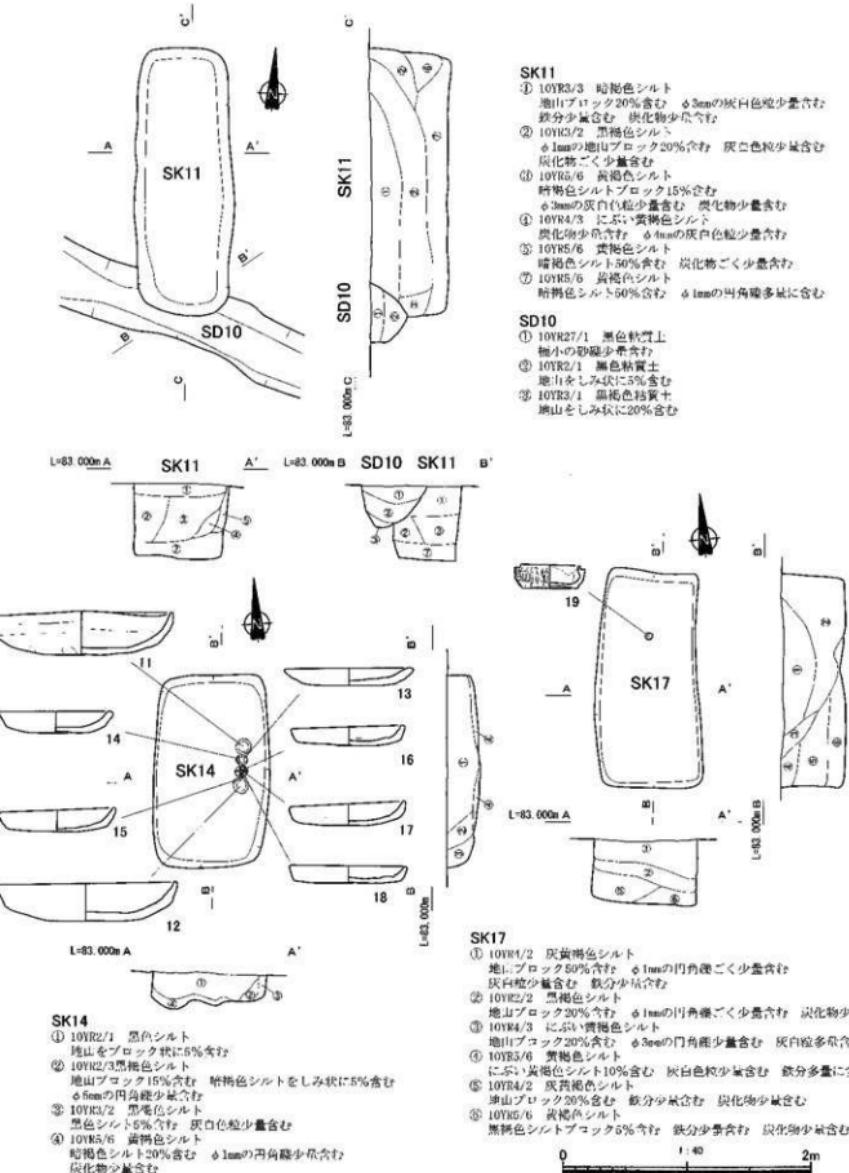


SK10

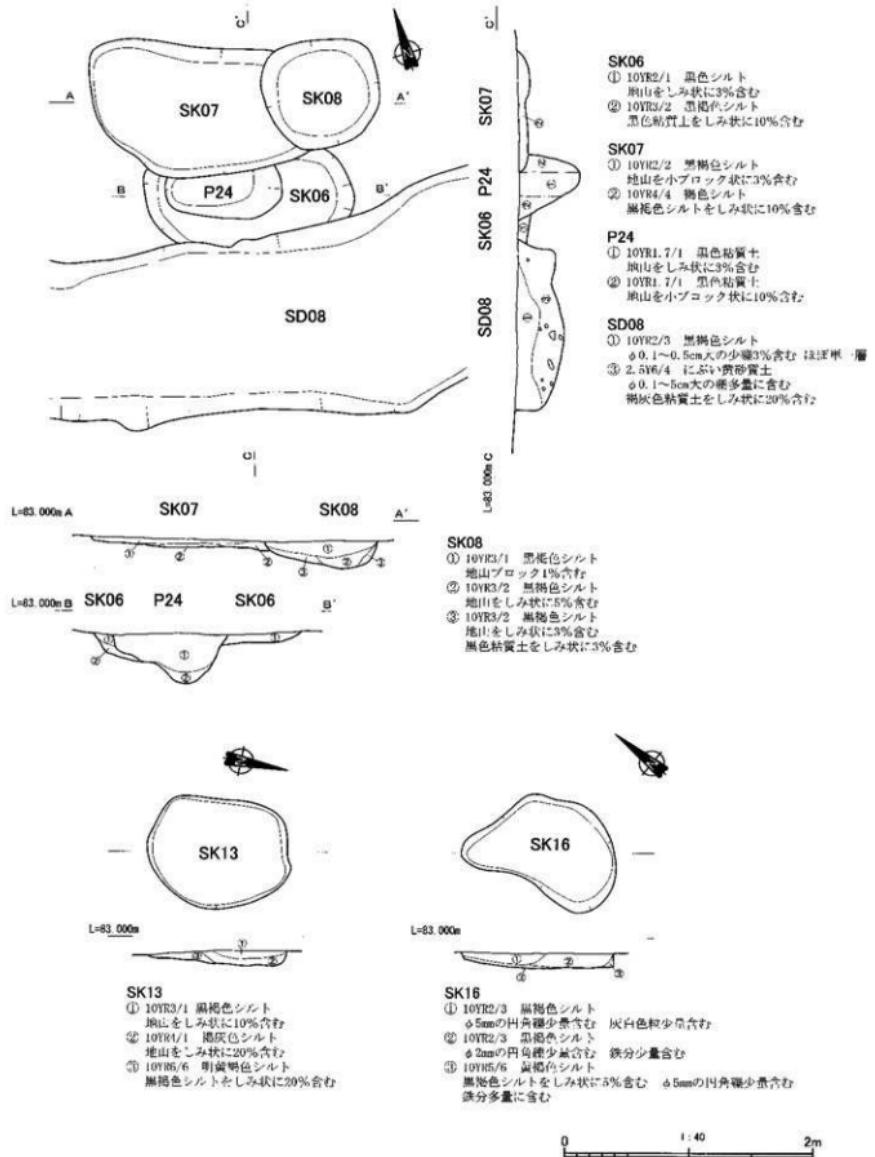
- ① 10YR3/2 黄褐色シルト
黄褐色シルトブロック30%含む
φ1mmの褐色粒多量に含む φ1mmの円角砾少量含む
- ② 10YR3/3 に多い黄褐色シルト
黑色シルトブロック5%含む 灰化物少量含む
- ③ 10YR3/1 黑褐色シルト
灰褐色シルトブロック10%含む φ1mmの橙色粒少量含む
- ④ 10YR4/3 に多い黄褐色シルト
黄褐色シルトブロック10%含む φ1mmの橙色粒少量含む
- ⑤ 10YR4/1 灰褐色シルト
φ2mmの黄褐色シルトブロック多量に含む φ0.5mmの灰白色粒少量含む



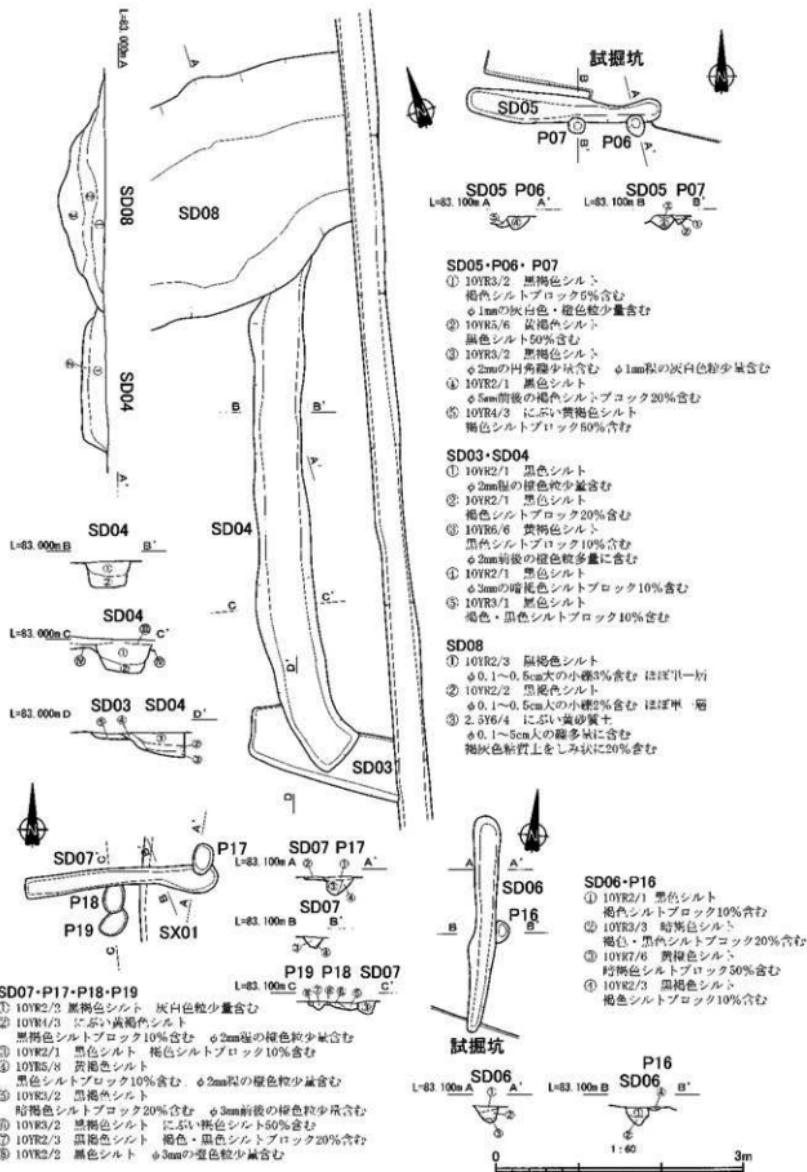
第24図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構(5) (S=1:40)



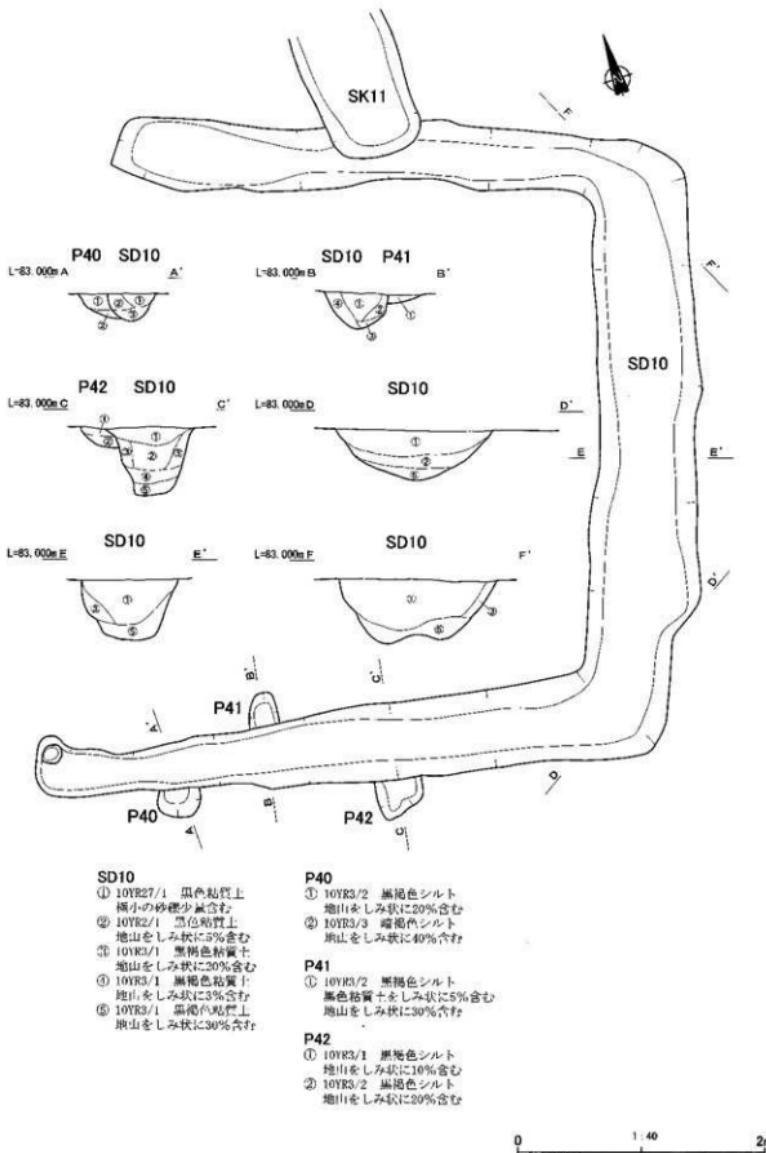
第25図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構(6) (S=1:40)



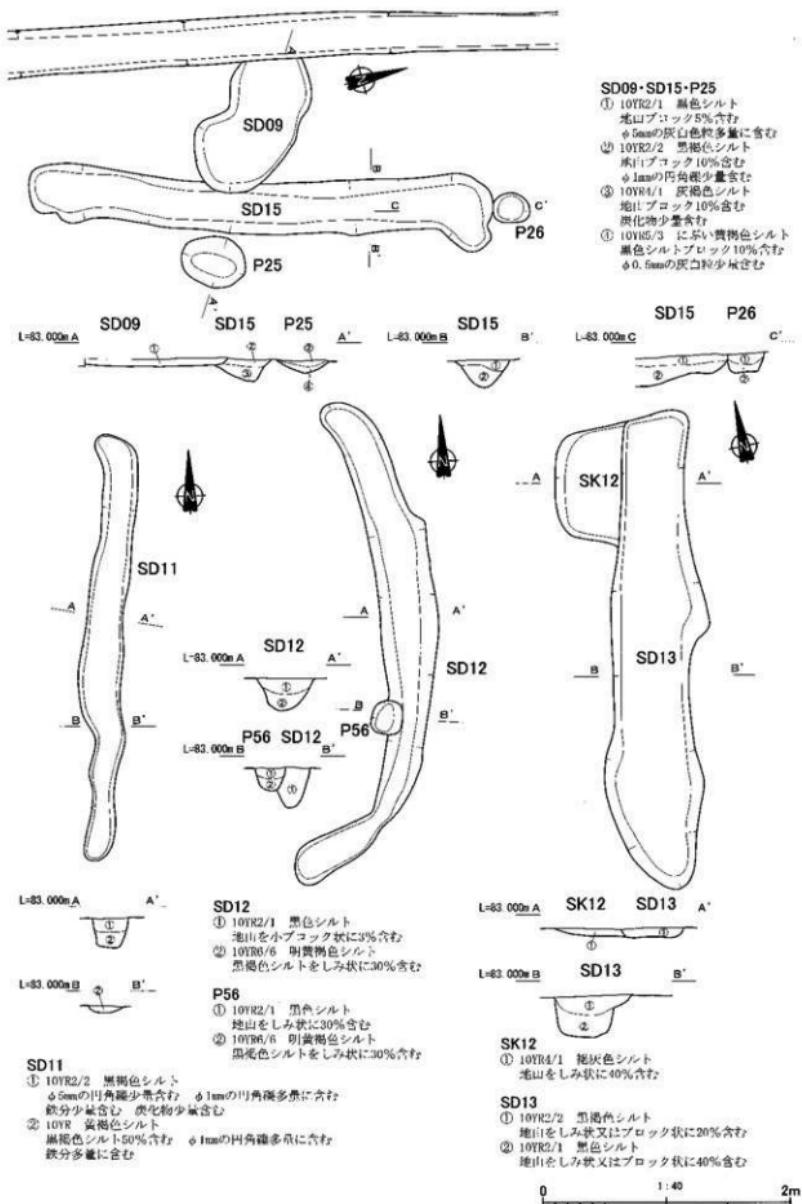
第26図 宗守城跡・宗守寺敷遺跡1地区の遺構(7) (S=1:40)



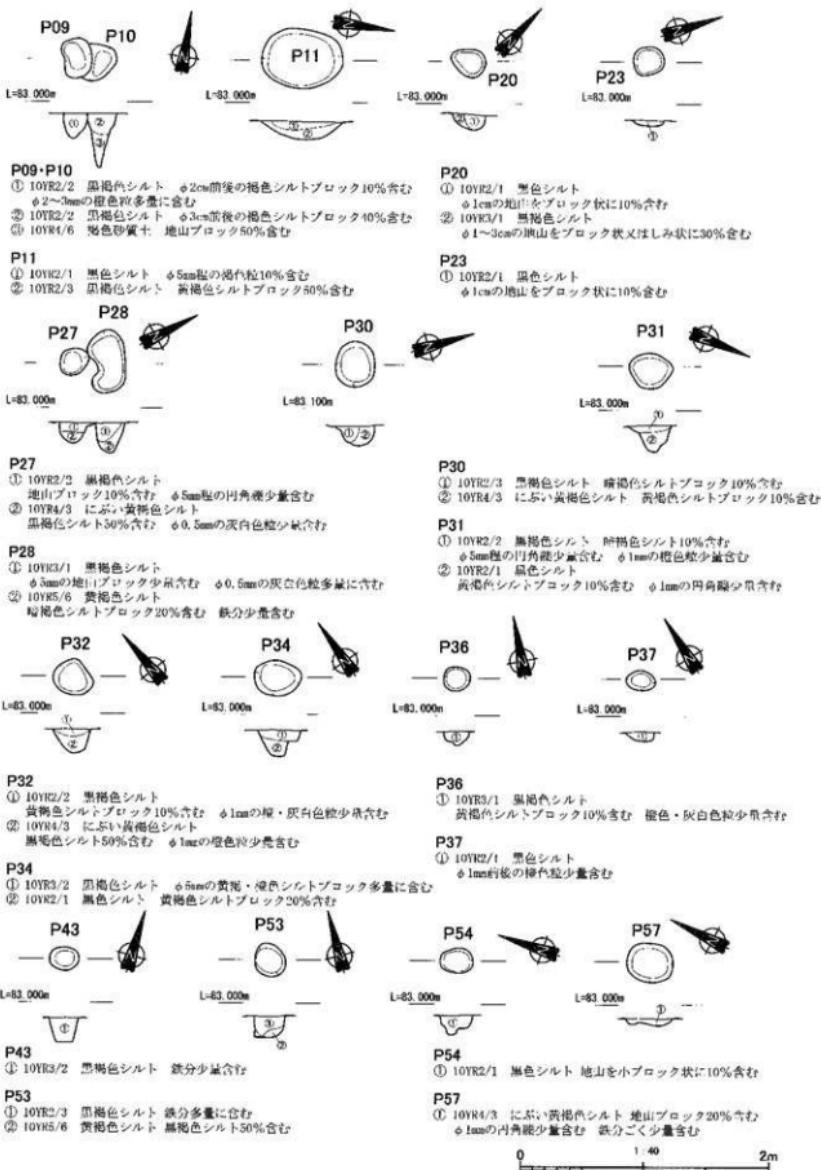
第27図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構(8) (S=1:60)



第28図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構(9) (S=1:40)



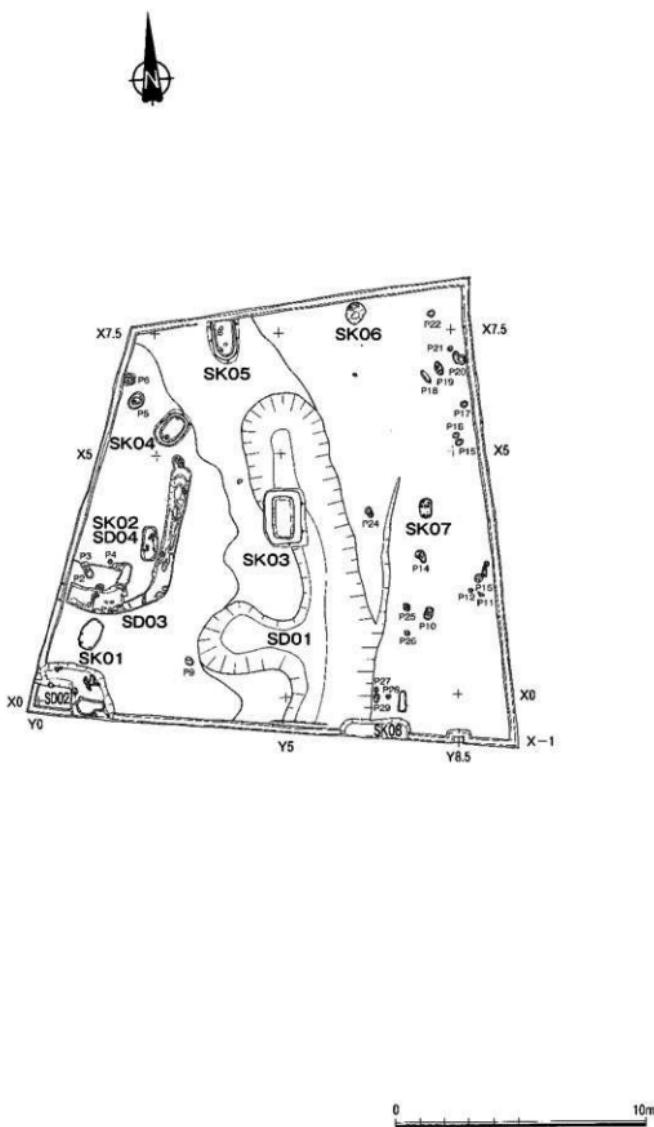
第29図 宗守城跡・宗守守屋敷遺跡1地区の遺構(10) (S=1:40)



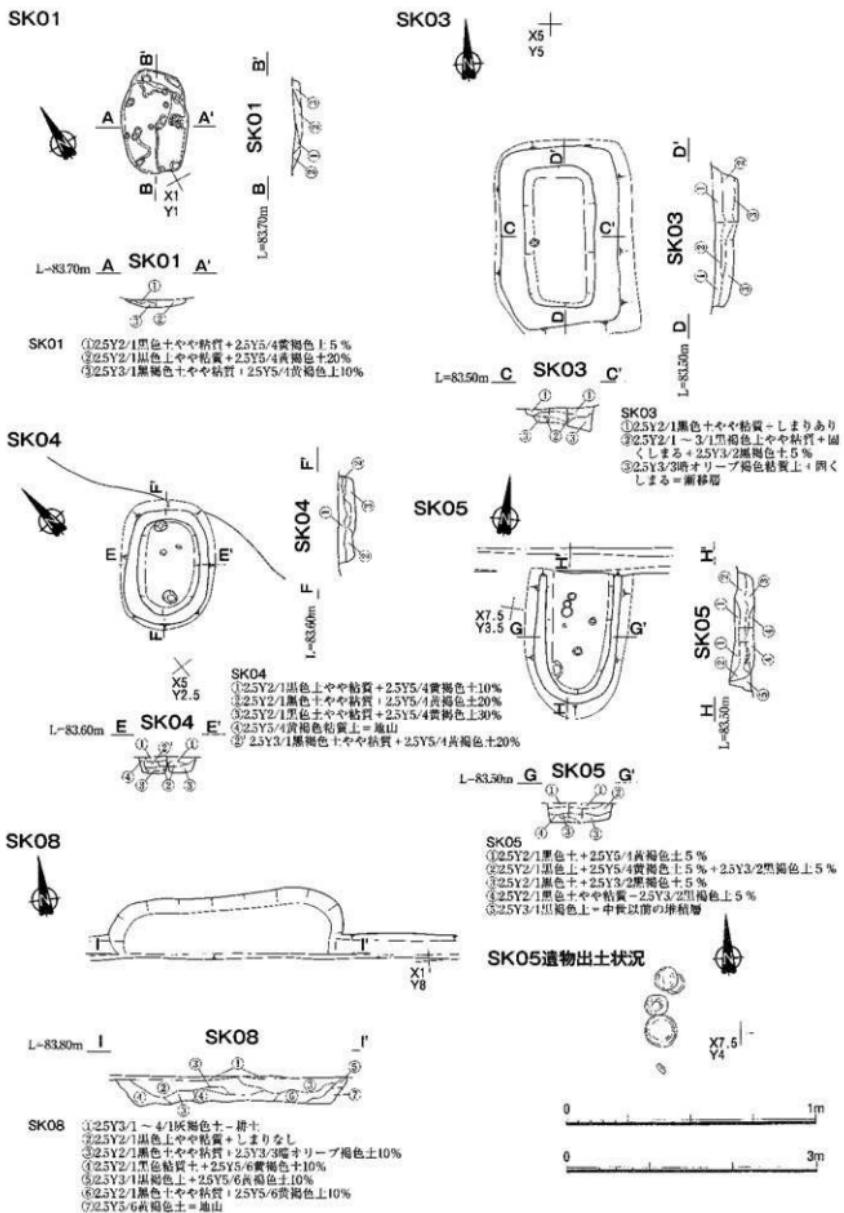
第30図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構(11) (S=1:40)



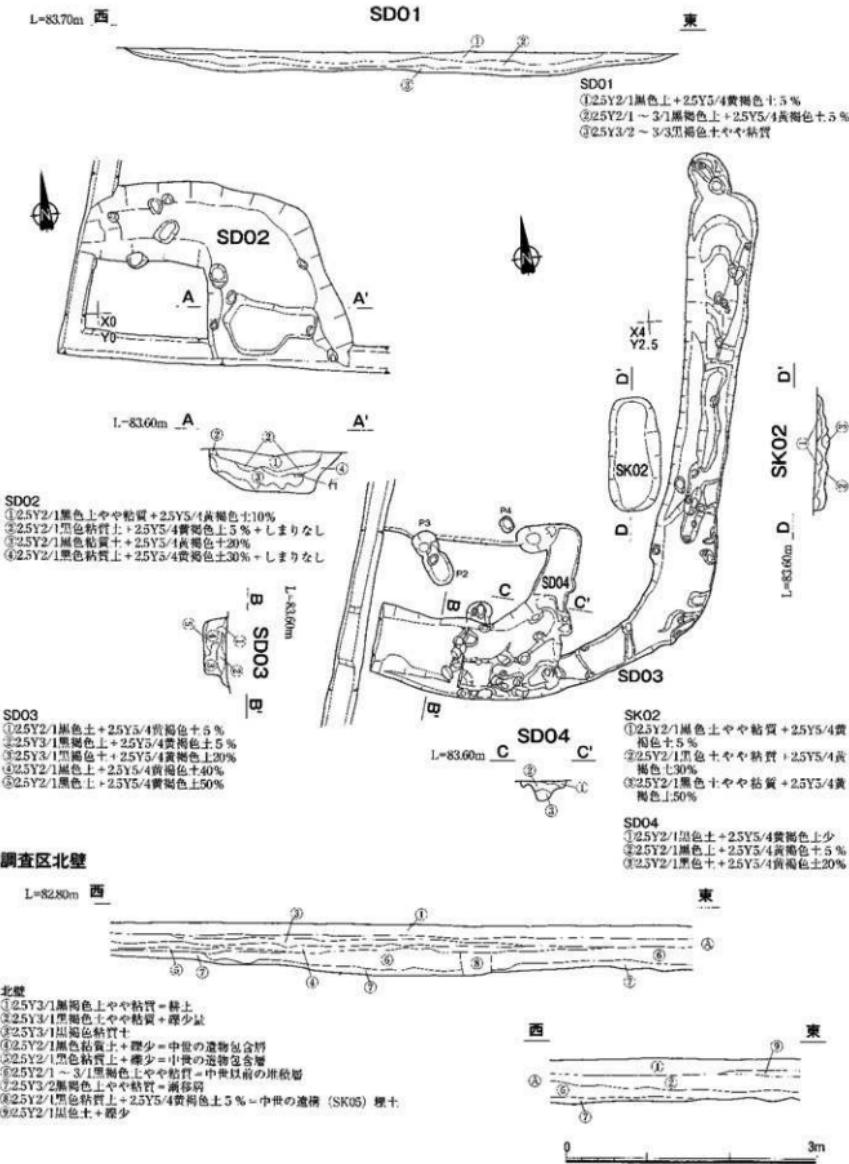
第31図 宗守城跡・宗守寺廬敷遺跡1地区の遺構(12) (S=1:40)



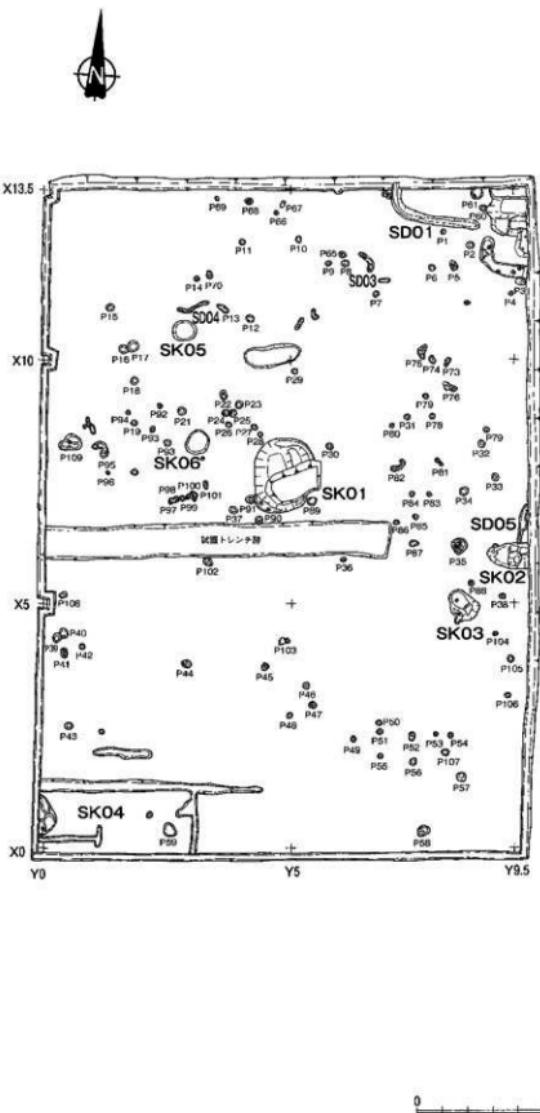
第32図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区平面図 (S = 1 : 200)



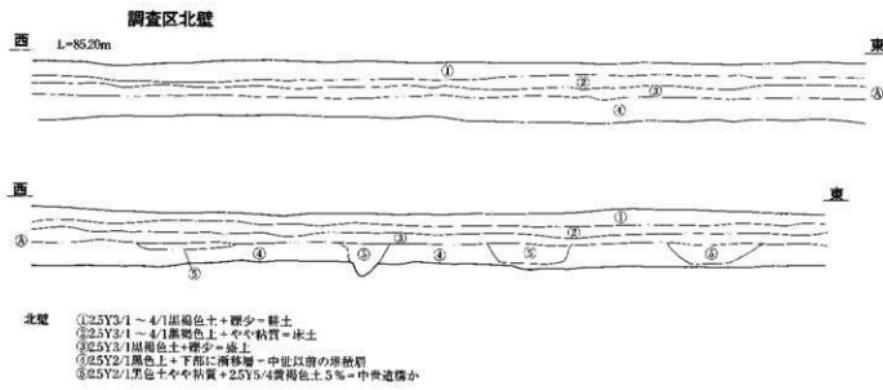
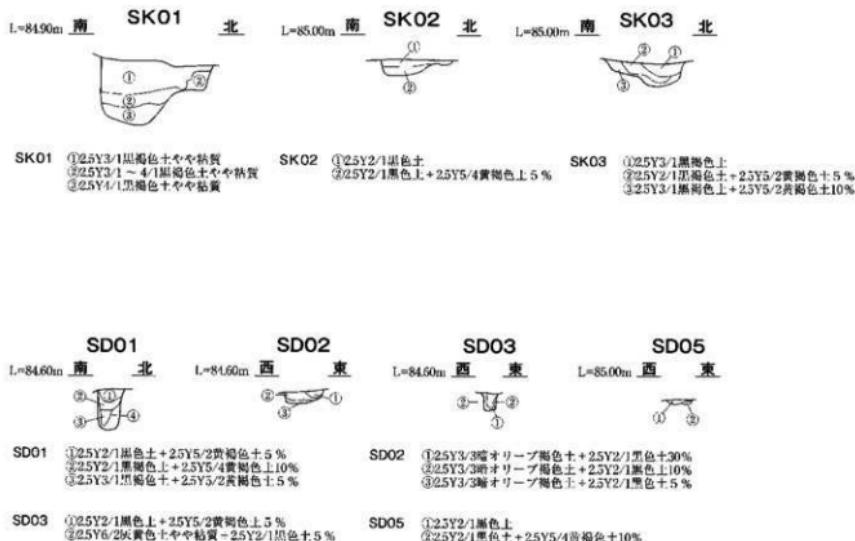
第33図 京守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区の遺構 (1) (S=1:60, S=1:30)



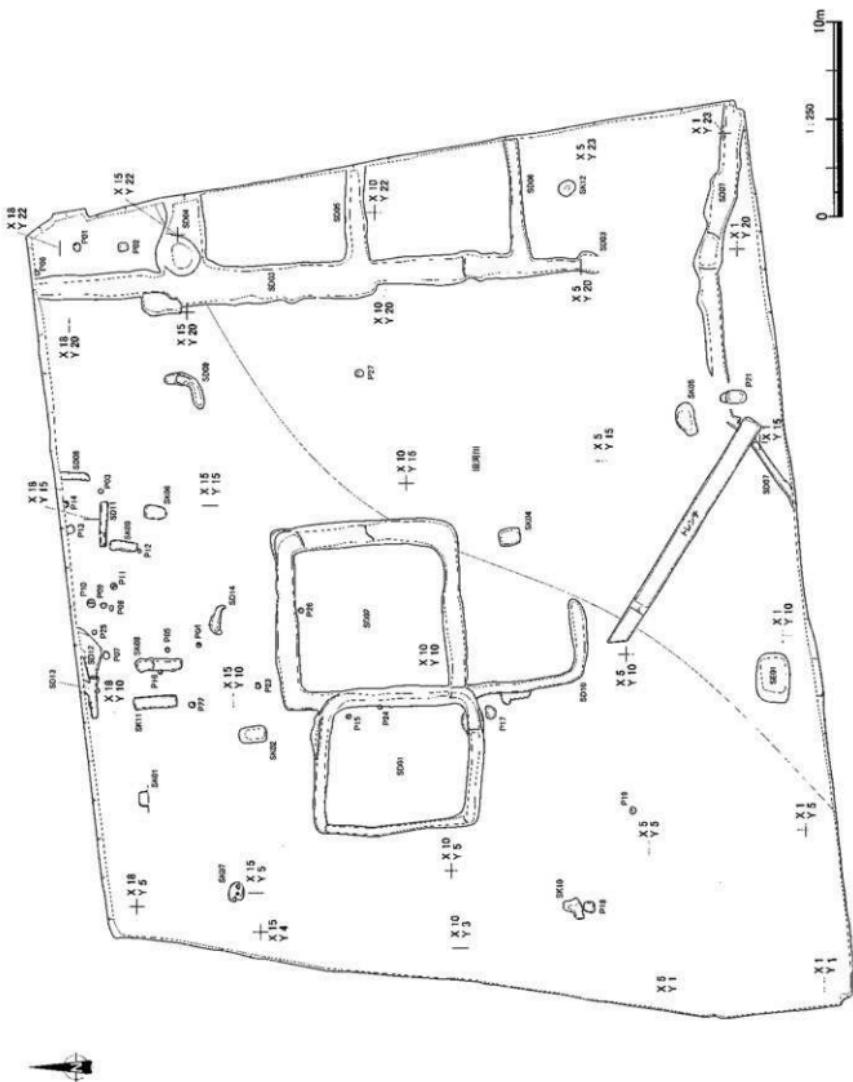
第34図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区の遺構(2) (S=1:60)



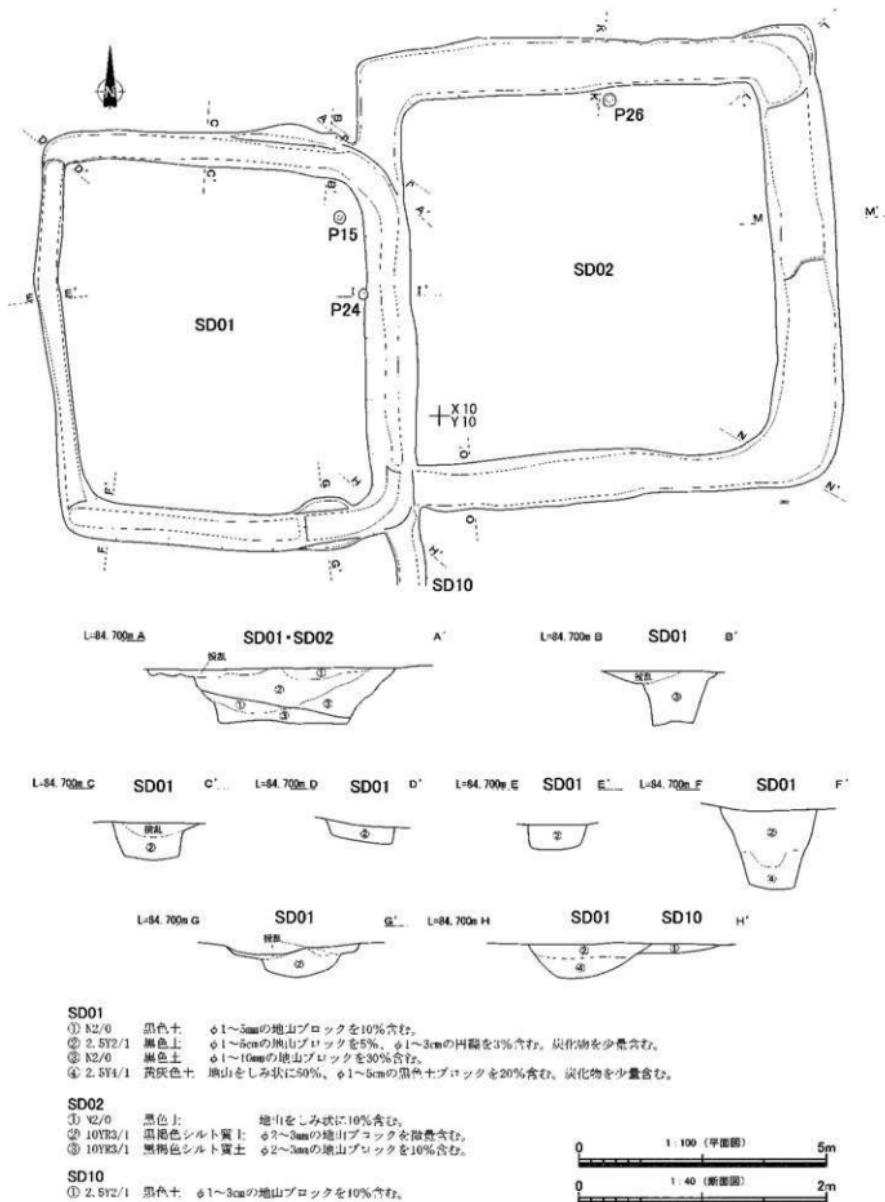
第35図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡3地区平面図 (S = 1 : 200)



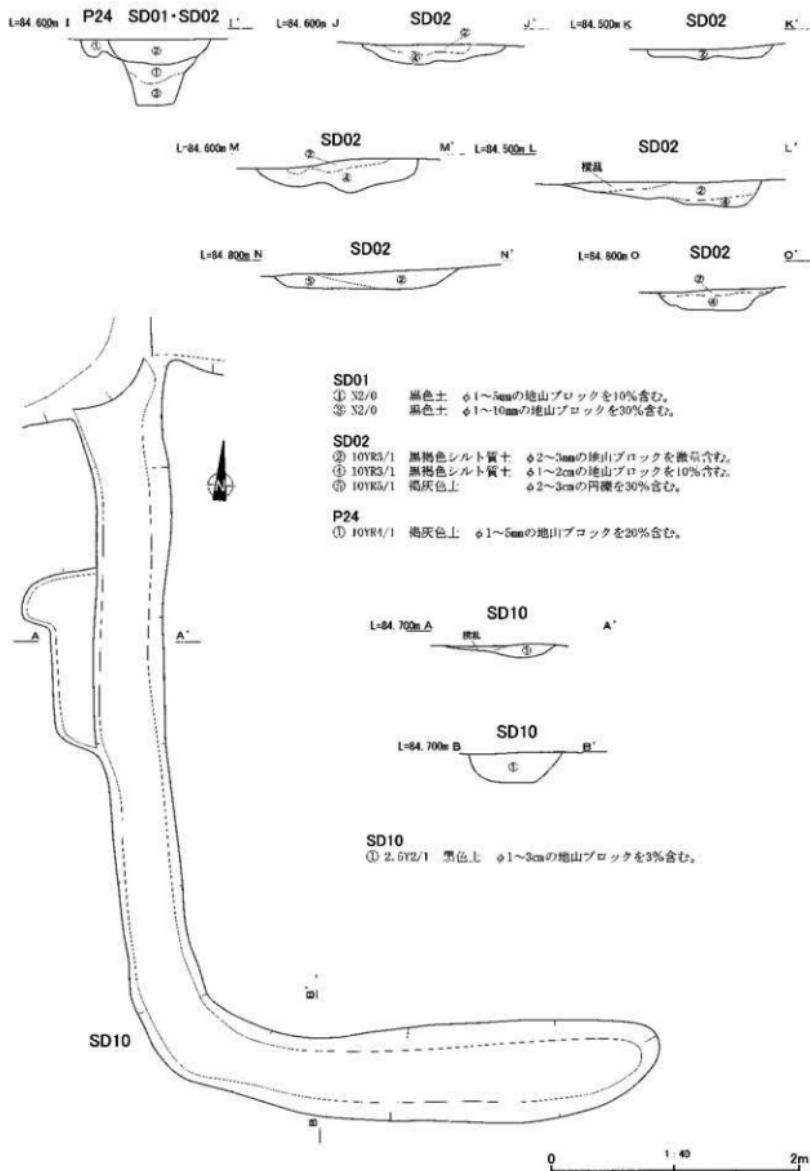
第36図 宗守城跡・宗守寺敷造跡3地区の造構 (S = 1 : 60)



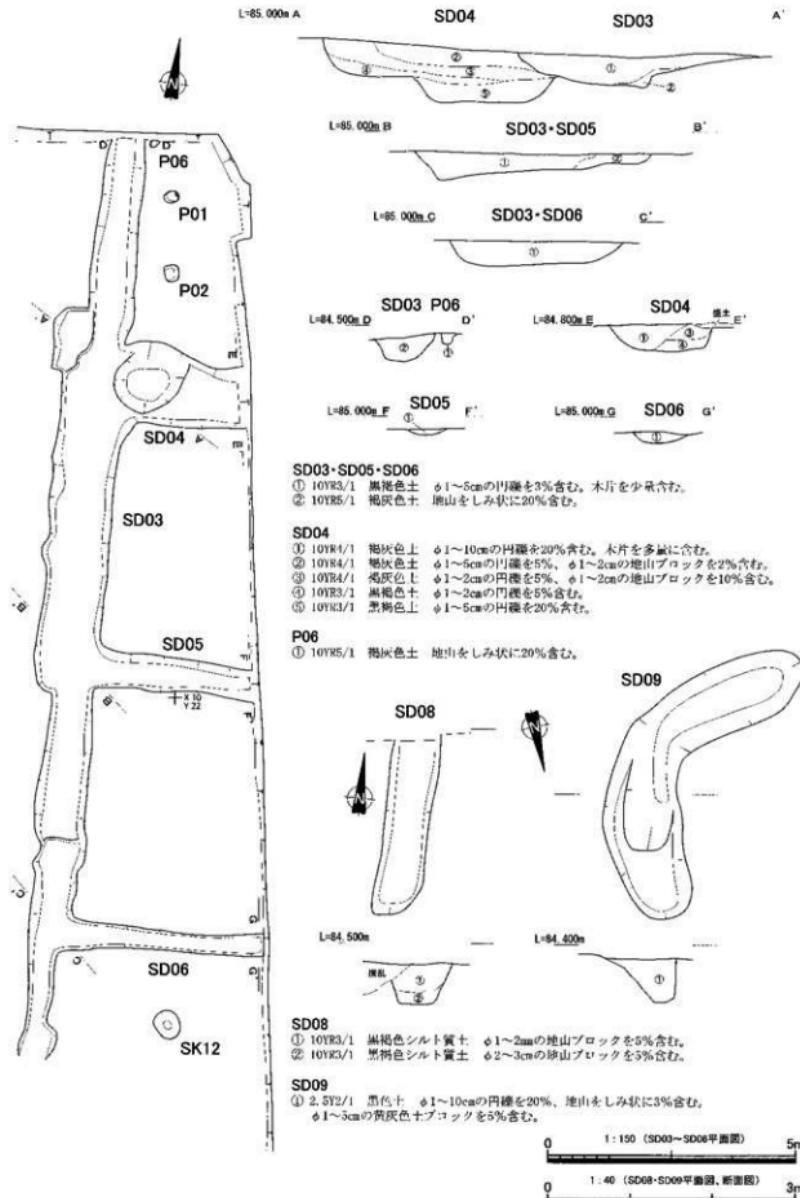
第37図 东守城跡・東守寺敷地跡4地区平面図



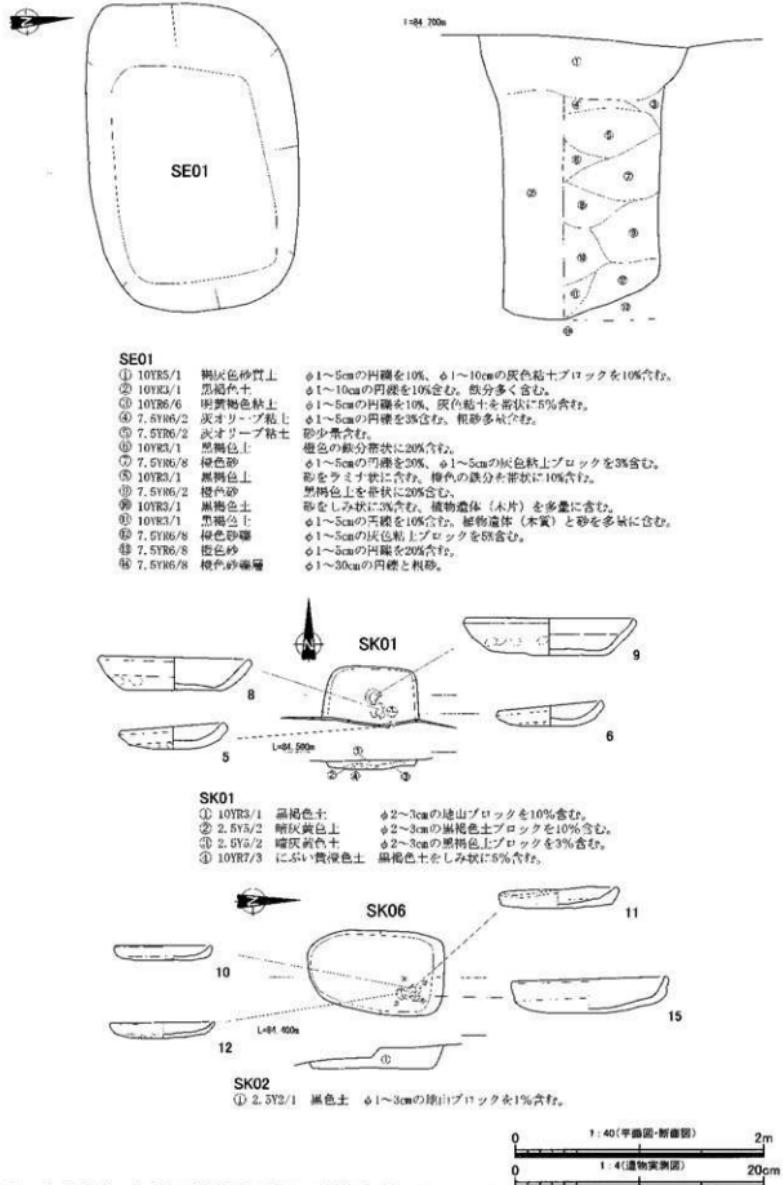
第38図 宗守城跡・宗守寺敷遺跡4地区の遺構(1) (S=1:100, 1:40)



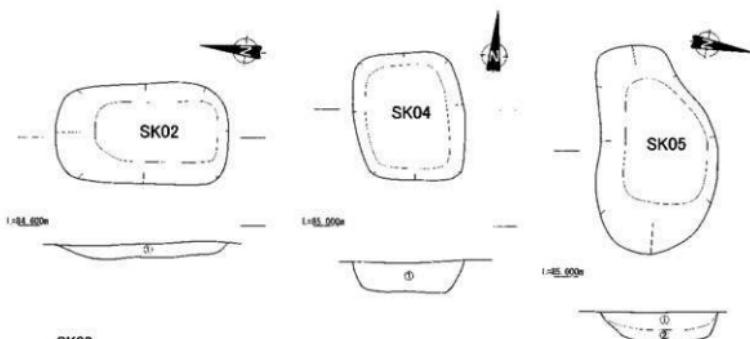
第39図 宗守城跡・宗守寺敷遺跡4地区の遺構(2) (S=1:40)



第40図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺構(3) (S=1:40)



第41図 宗守城跡・宗守寺敷遺跡4地区の遺構(4) (S=1:40)



SK02

① 2.5Y2/1 黒色土 ϕ 1~5cmの地山ブロックを5%含む。

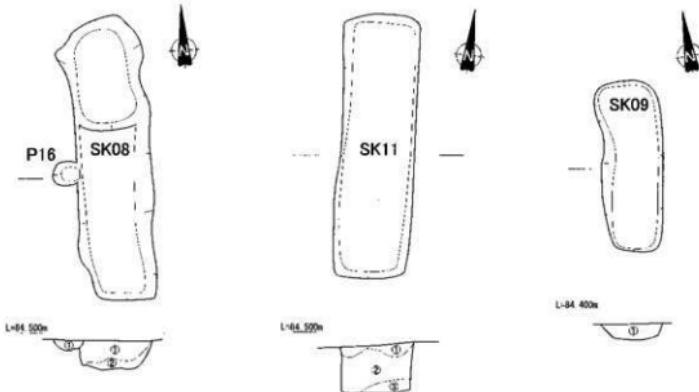
SK04

① 10Y4/1 暗灰色土 ϕ 2~3cmの円錐を20%含む。

SK05

① 10Y3/1 黒褐色土上 ϕ 1~5cmの円錐を20%含む。

② 7.5Y4/3 深灰色質土 ϕ 1~5cmの円錐を20%含む。



P16

① X2/ 黒色土 ϕ 1~5cmの地山ブロックを1%含む。

SK08

① N2/ 暗灰色土 ϕ 1~3cmの地山ブロックを3%, ϕ 1~10cmの暗灰色土ブロックを3%含む。
② 2.5Y7/1 浅黄色土 ϕ 1~10cmの黄褐色土ブロックを20%含む。

SK11

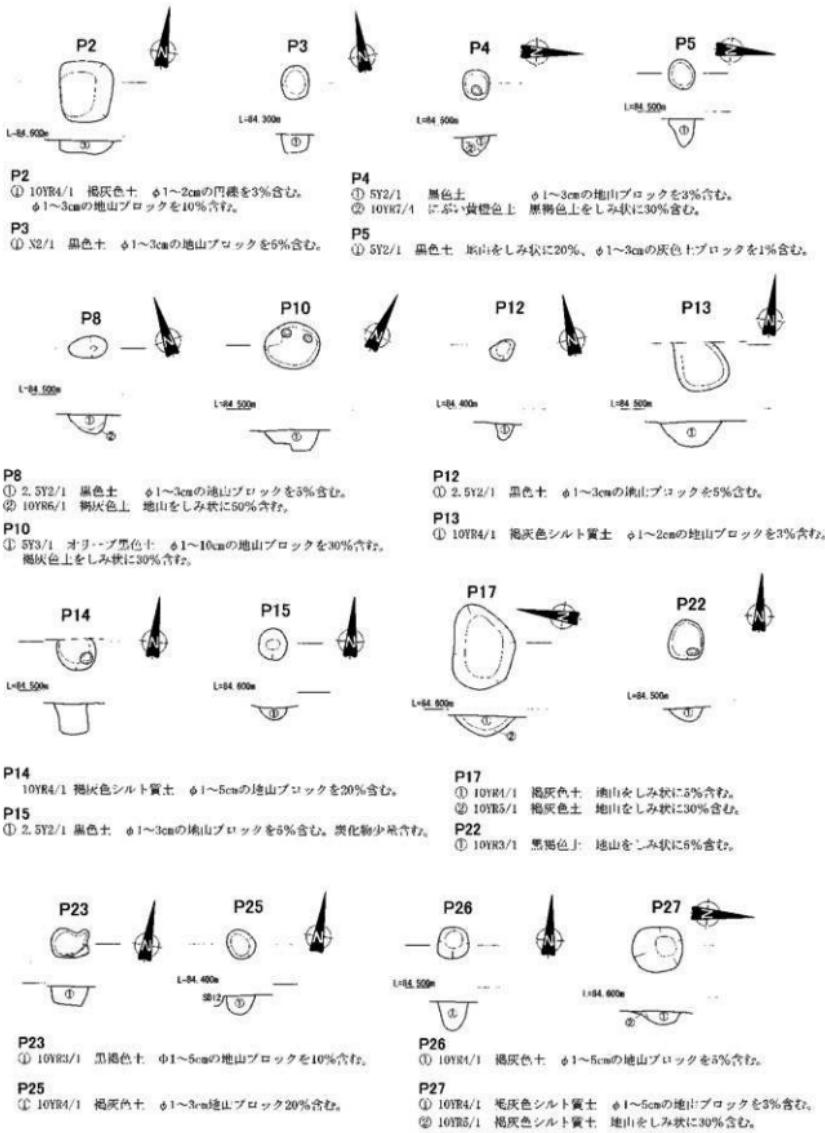
① 10Y3/1 黑褐色土 ϕ 1~10mmの地山ブロックを5%含む。
② 10Y5/1 暗灰色土 ϕ 1~10mmの地山ブロックを20%, 黑褐色土をしみ状に3%含む。
③ 10Y5/1 暗灰色シルト ϕ 1~5cmの地山ブロックを30%含む。

SK09

① 2.5Y2/1 黑色土 ϕ 1~10cmの地山ブロックを10%含む。

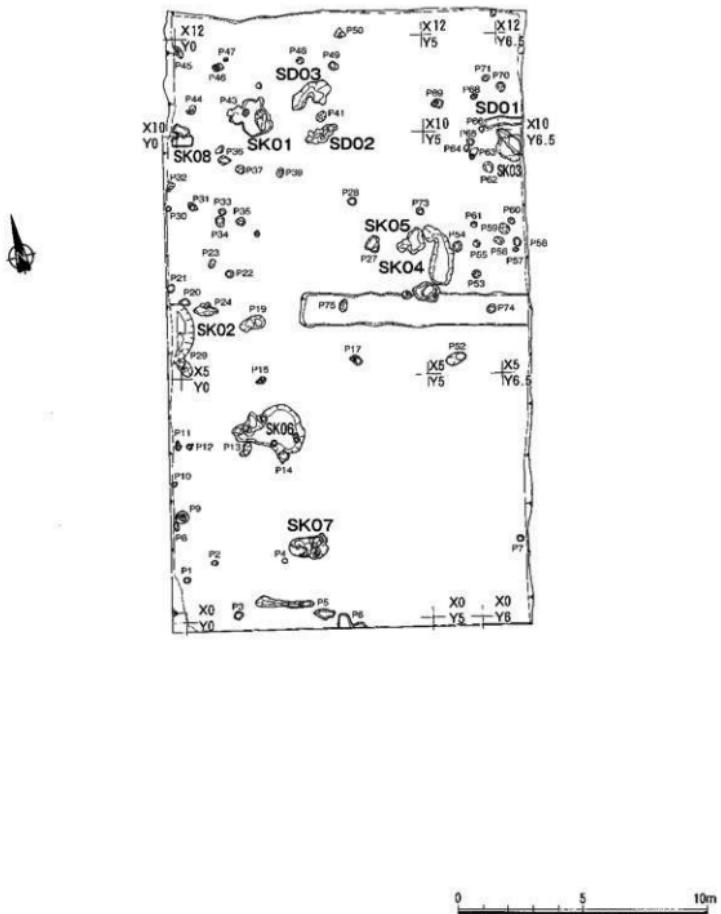


第42図 宗守城跡・宗守寺敷遺跡4地区の遺構(5) (S=1:40)

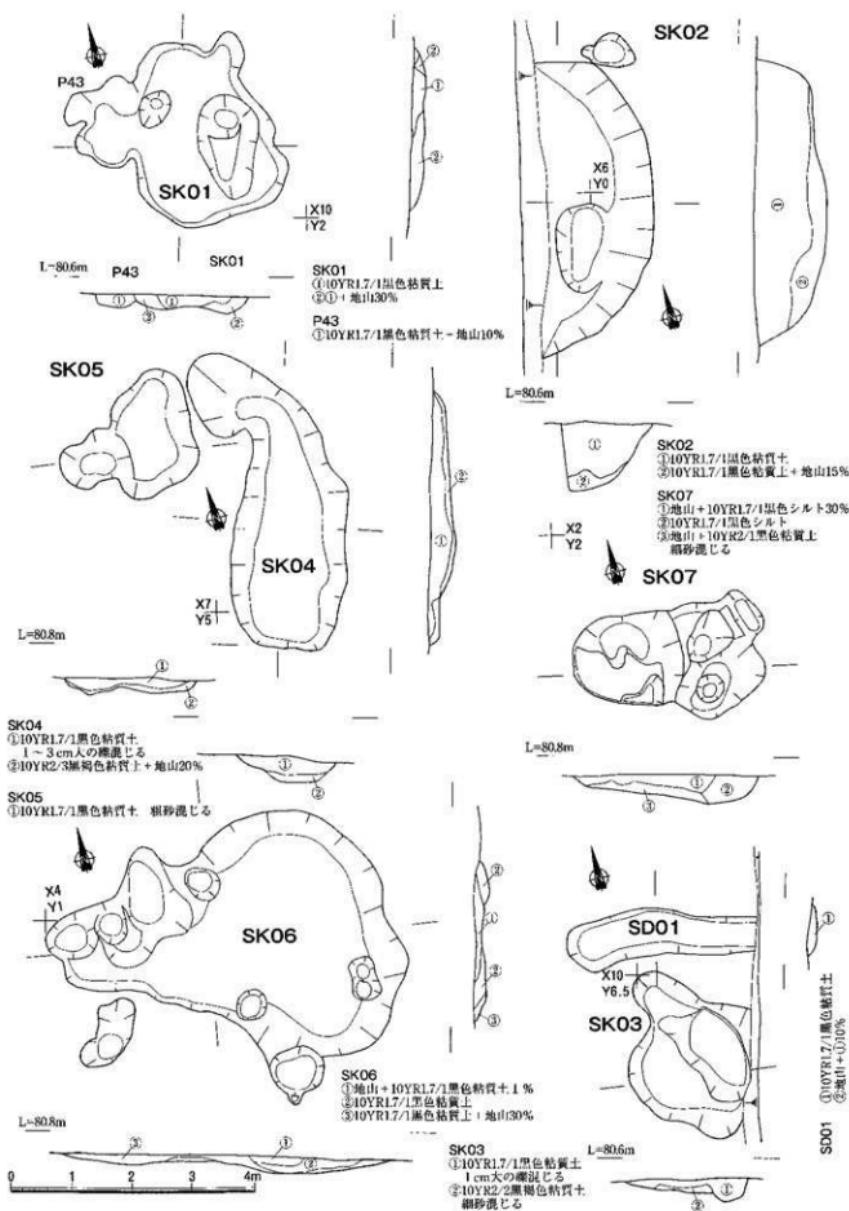


0 1.40 2m

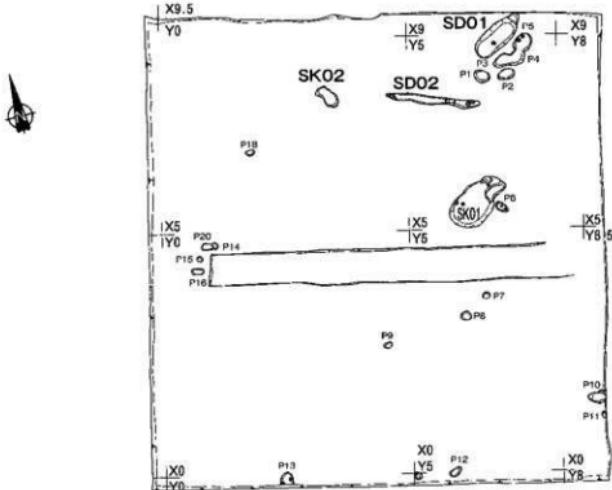
第43図 宗守城跡・宗守寺敷遺跡4地区の遺構(6) (S=1:40)



第44図 梅原胡摩堂遺跡27地区平面図 (S = 1 : 200)



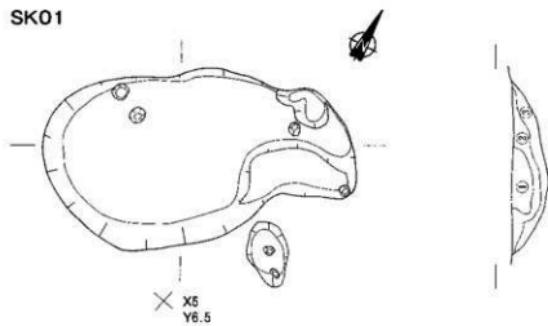
第45図 梅原胡摩堂遺跡27地区の遺構 (S = 1 : 40)



0 1 5 10m

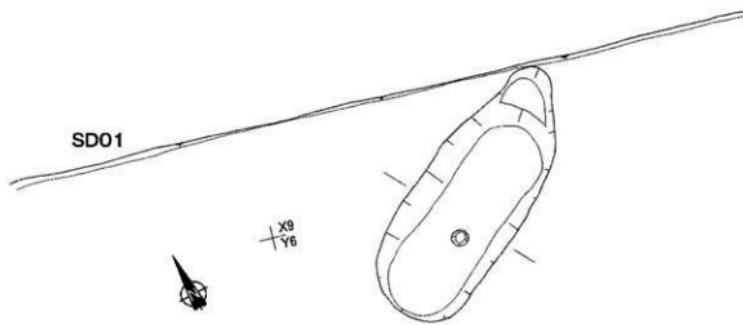
第46図 梅原胡摩堂遺跡28地区平面図 (S = 1 : 200)

SK01



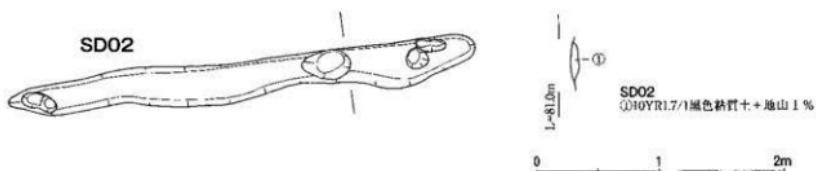
SK01 ①10YR3/3暗褐色シルト+10YR2/2褐褐色シルト30%
②10YR1.7/1黒色シルト+地山10%
③10YR3/3暗褐色シルト

SD01



SD01 ①10YR1.7/1黒色シルト
②10YR2/2褐褐色シルト
③10YR3/3暗褐色シルト

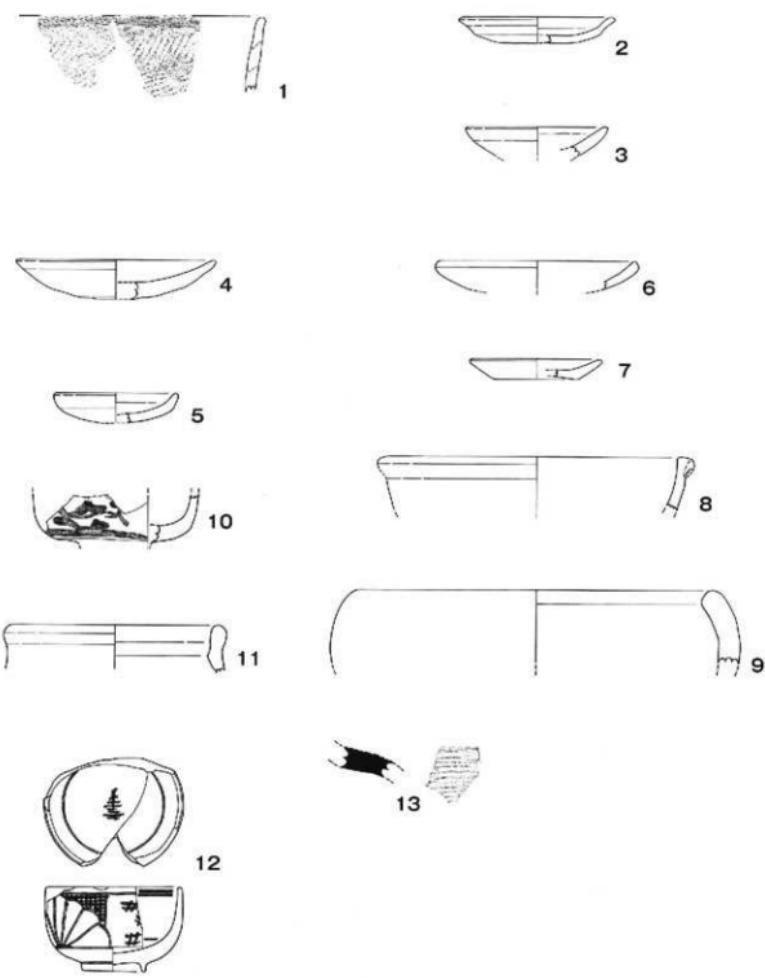
SD02



SD02 ①10YR1.7/1黒色粘質土+地山 1%

0 1 2m

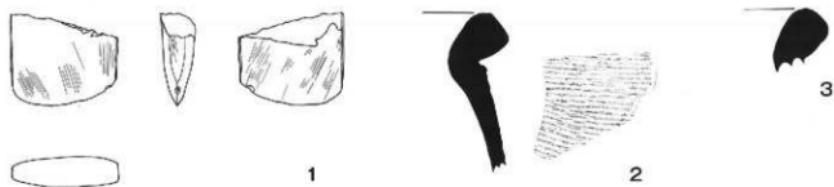
第47図 梅原胡摩堂遺跡28地区の遺構 (S=1:40)



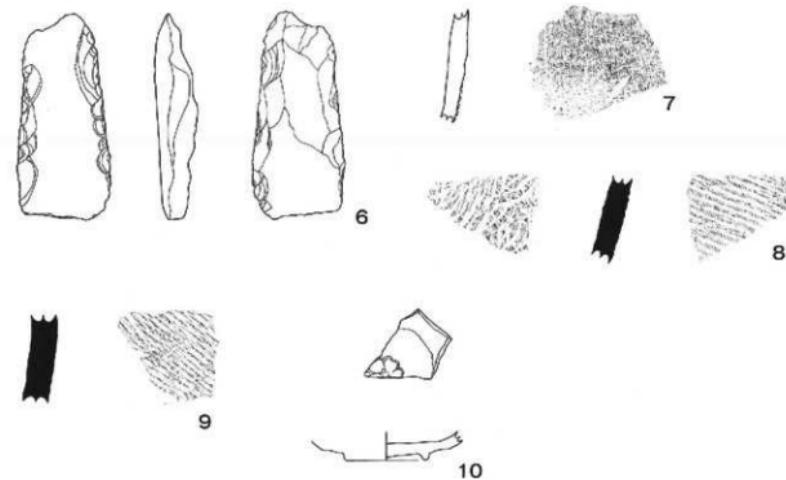
0 5 10 15 cm

第48図 宗守III遺跡1地区の遺物 (S=1:3)

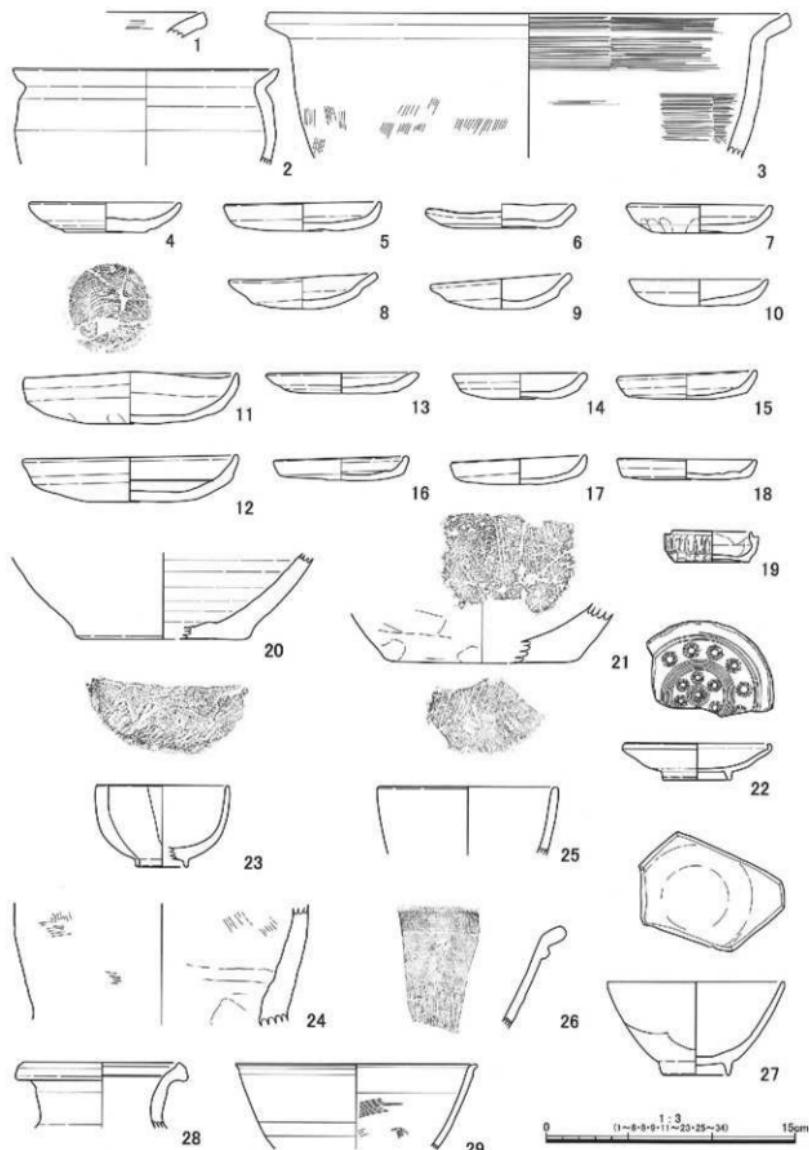
SD11



包含層



第49図 宮守Ⅲ遺跡2地区の遺物 (S=1:3)



第50図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺物 (S=1:3)

宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区

SK04



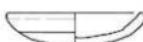
1



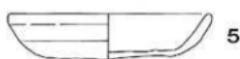
2



3



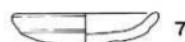
4



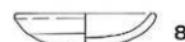
5



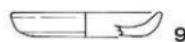
6



7

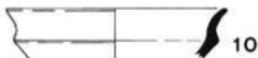


8



9

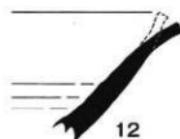
包含層



10



11



12

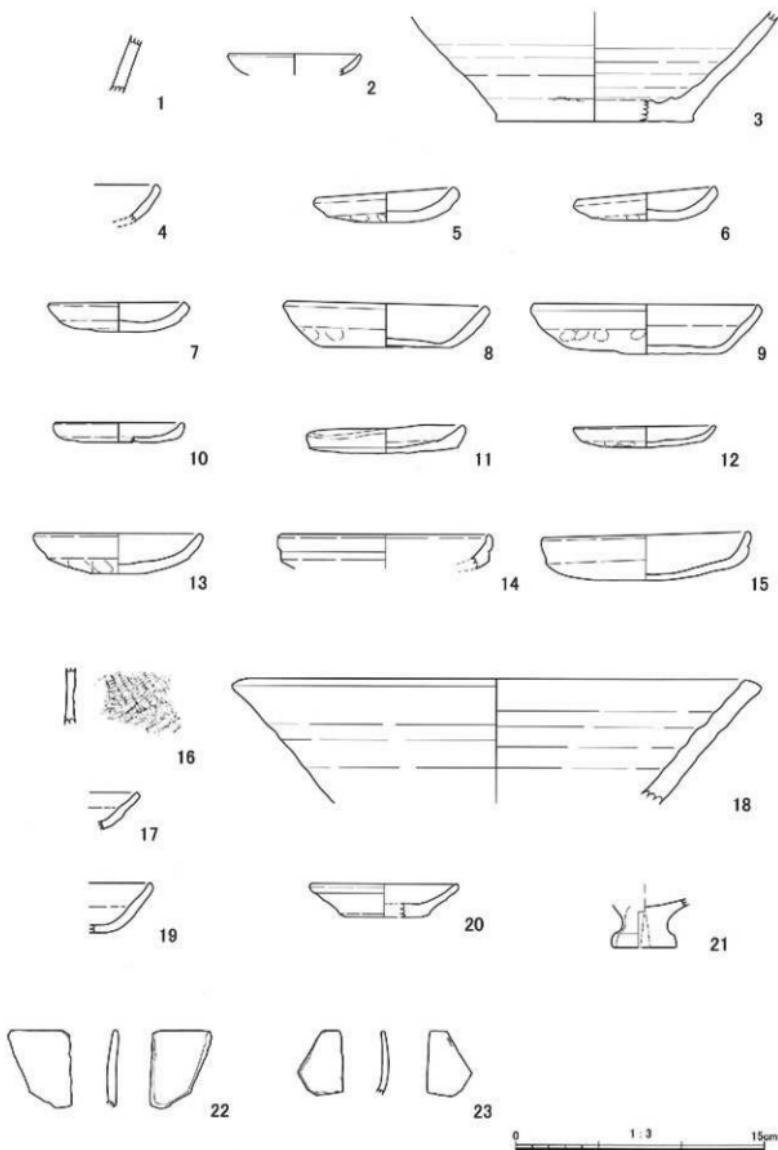
宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡3地区



13

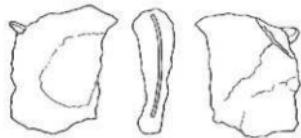


第51図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2・3地区の遺物 (S=1:3)

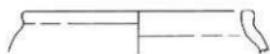


第52図 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺物 (S = 1:3)

27地区 P48



28地区 包含層



第53図 梅原胡摩堂遺跡27・28地区の遺物



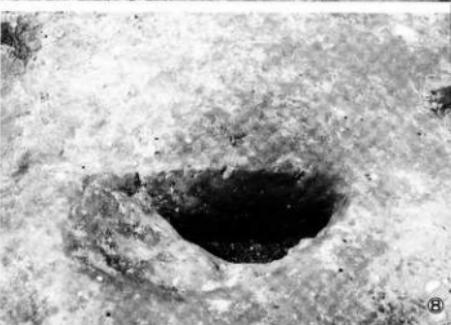
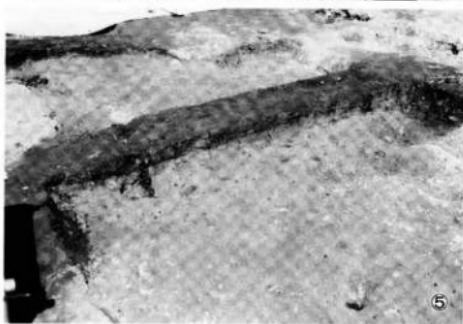
図版1 宗守Ⅲ遺跡1地区の造構（1）

①調査区遠景（北東から） ②調査区全景（南から）



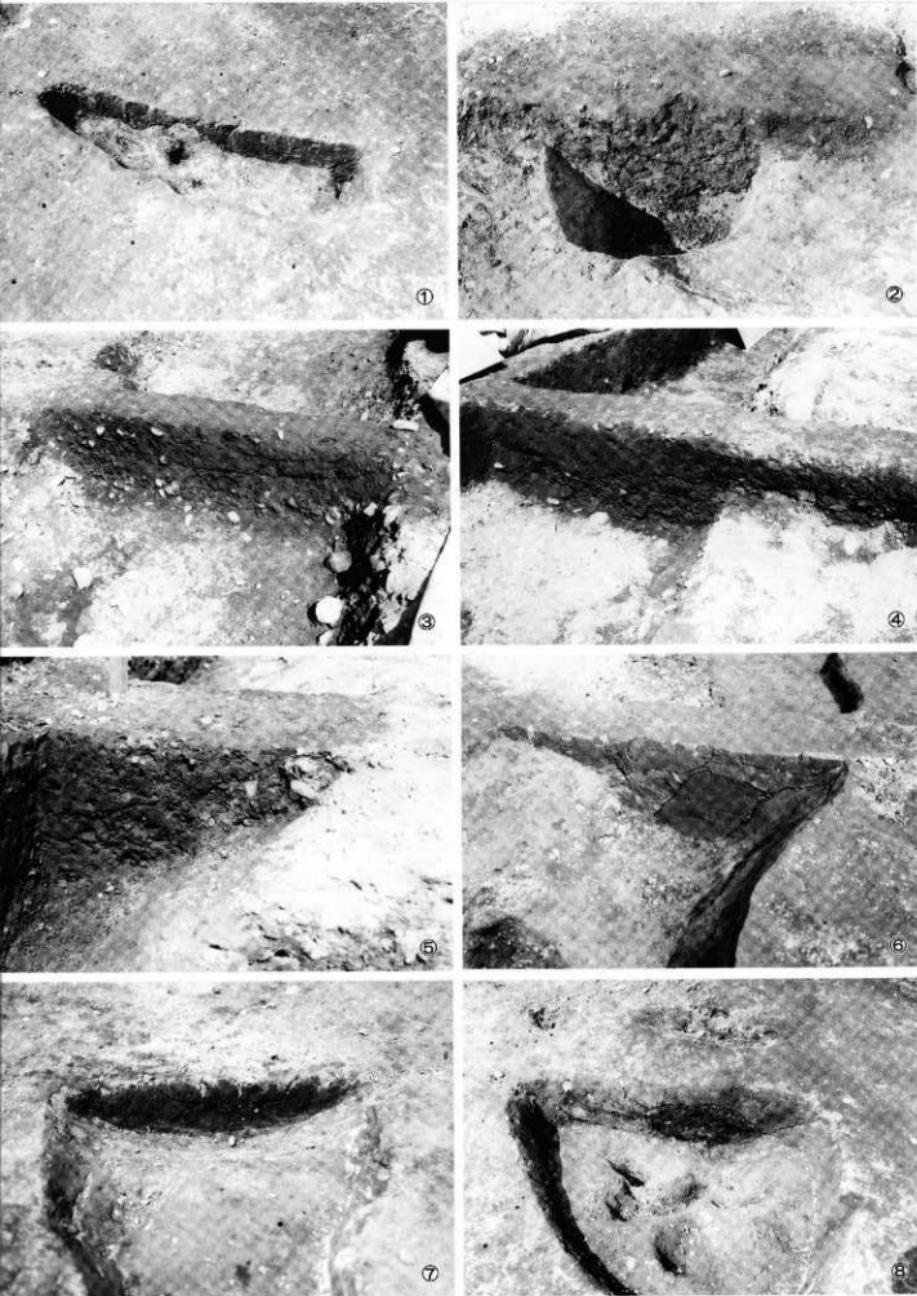
図版2 宗守III遺跡1地区の遺構(2)

- ①SK01土層(南東から) ②・③SK01土層(東から) ④SK02土層(南から)
⑤SK03(南から) ⑥SK04土層(南から) ⑦SK05土層(東から) ⑧SK11土層(南から)



図版3 宗守Ⅲ遺跡1地区の遺構（3）

- ①SK12土層（西から） ②SK16土層（東から） ③SK17土層（南西から） ④SK18土層（東から）
⑤SK28土層（南から） ⑥SK33土層（南から） ⑦P17土層（南から） ⑧P99土層（南から）



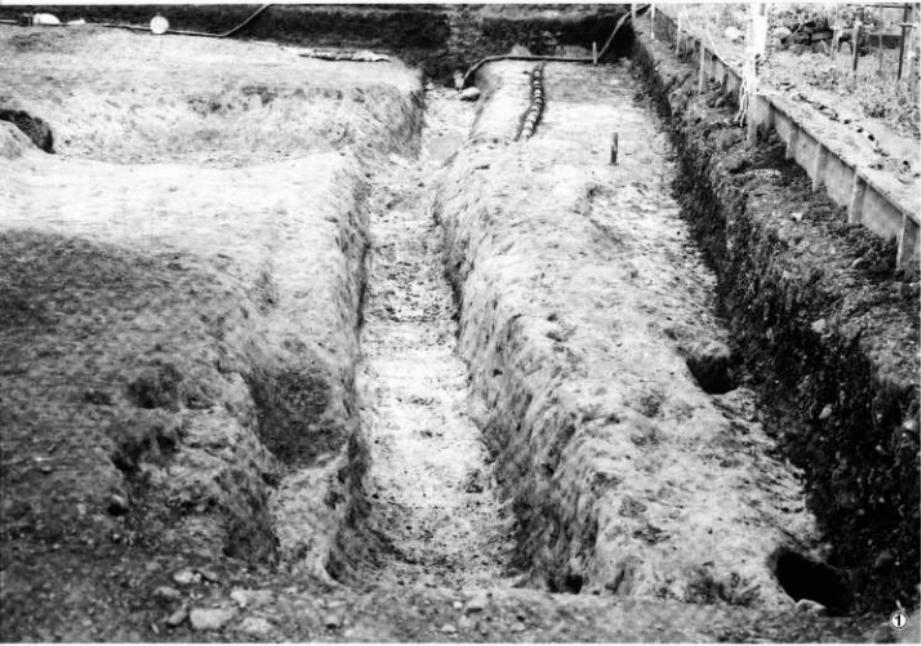
図版4 宗守Ⅲ遺跡1地区の遺構(4)

①P100土層(南から) ②P104土層(南から) ③・④・⑤SD01土層(南から)
⑥SD02土層(西から) ⑦SD04土層(南から) ⑧SX01土層(南から)



図版5 宗守Ⅲ遺跡2地区の造構（1）

①調査区全景（真上から） ②調査区遠景（北東から）



①



②

図版6 宗守Ⅲ遺跡2地区の遺構（2）

①SD11発掘状況（北から） ②SD11土層（南から）



図版7 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区全景

①調査区遠景（北から） ②調査区全景（南から）



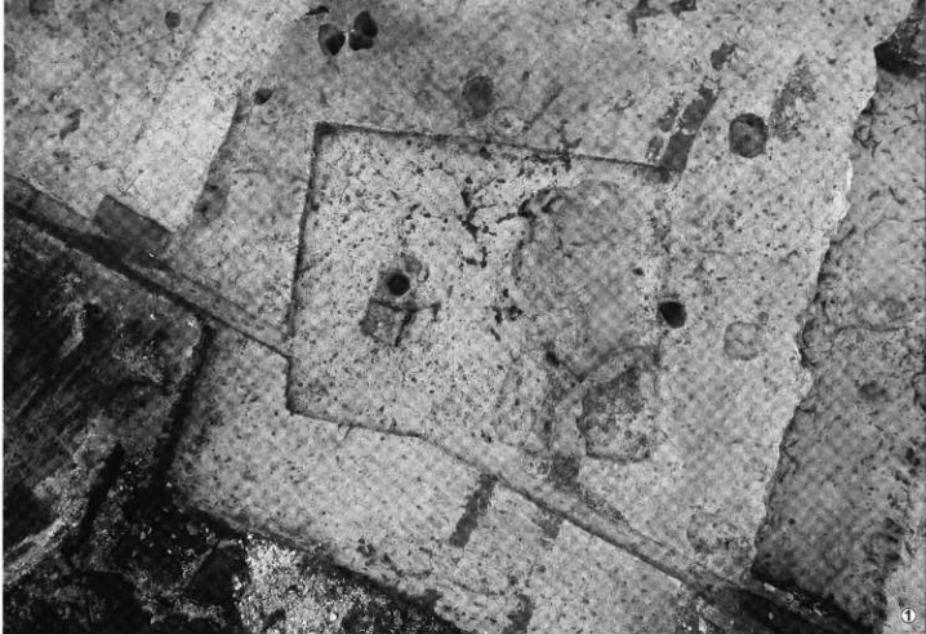
①



②

図版8 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区全景

①調査区全景（真上から） ②調査区近景（南から）



①



②



③



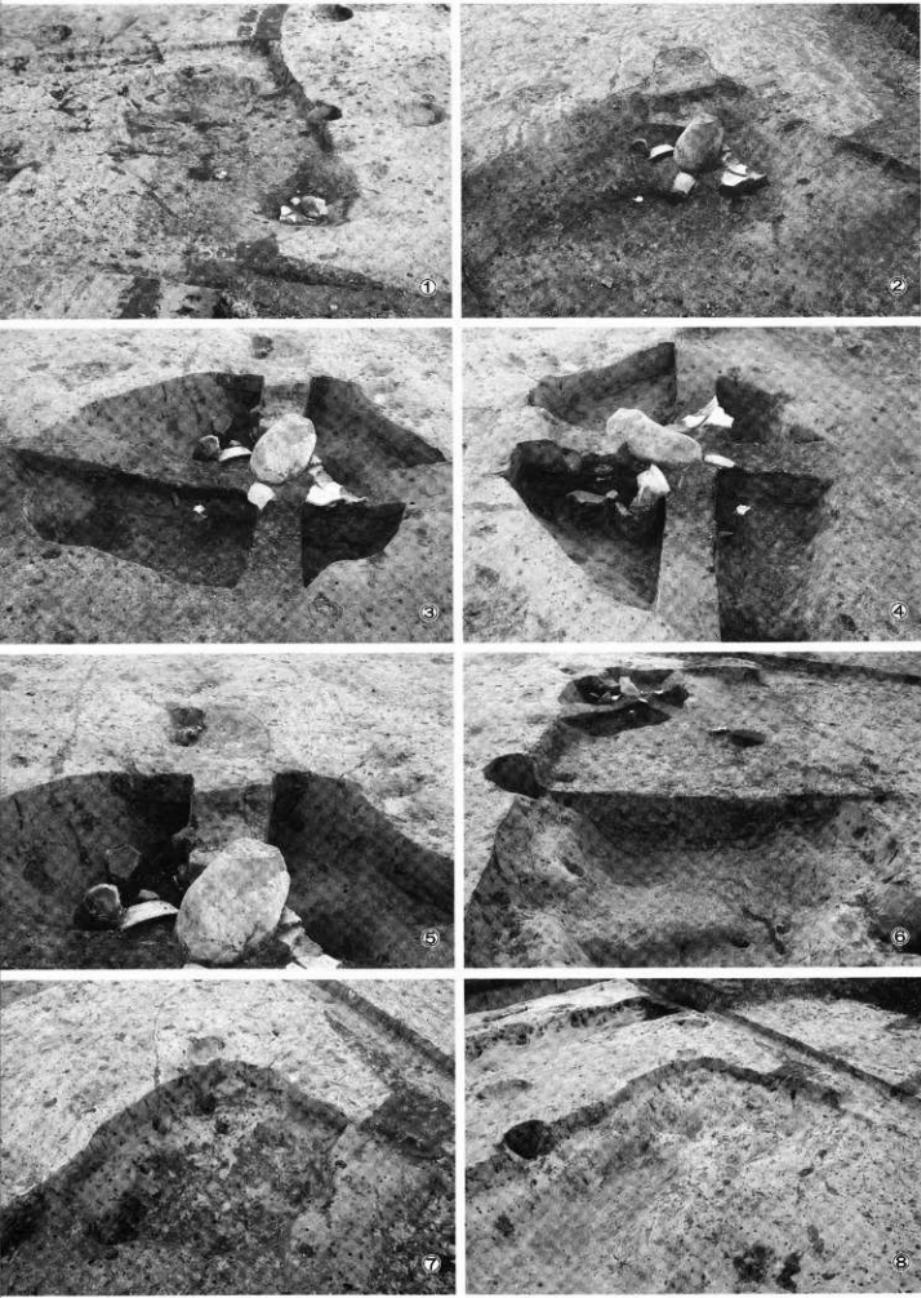
④



⑤

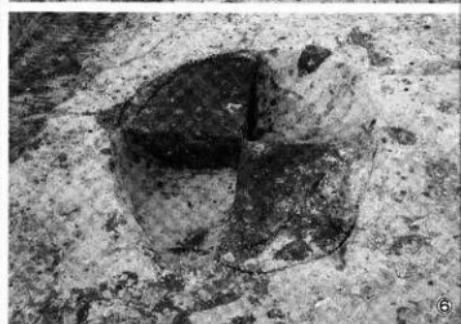
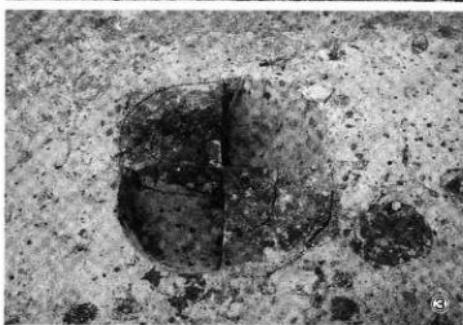
図版9 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構（1）

- ①SI01完掘（真上から） ②SI01完掘（西から） ③SI01・カマド跡・SK09 完掘（西から）
- ④SI01(南から) ⑤SI01 (東から)



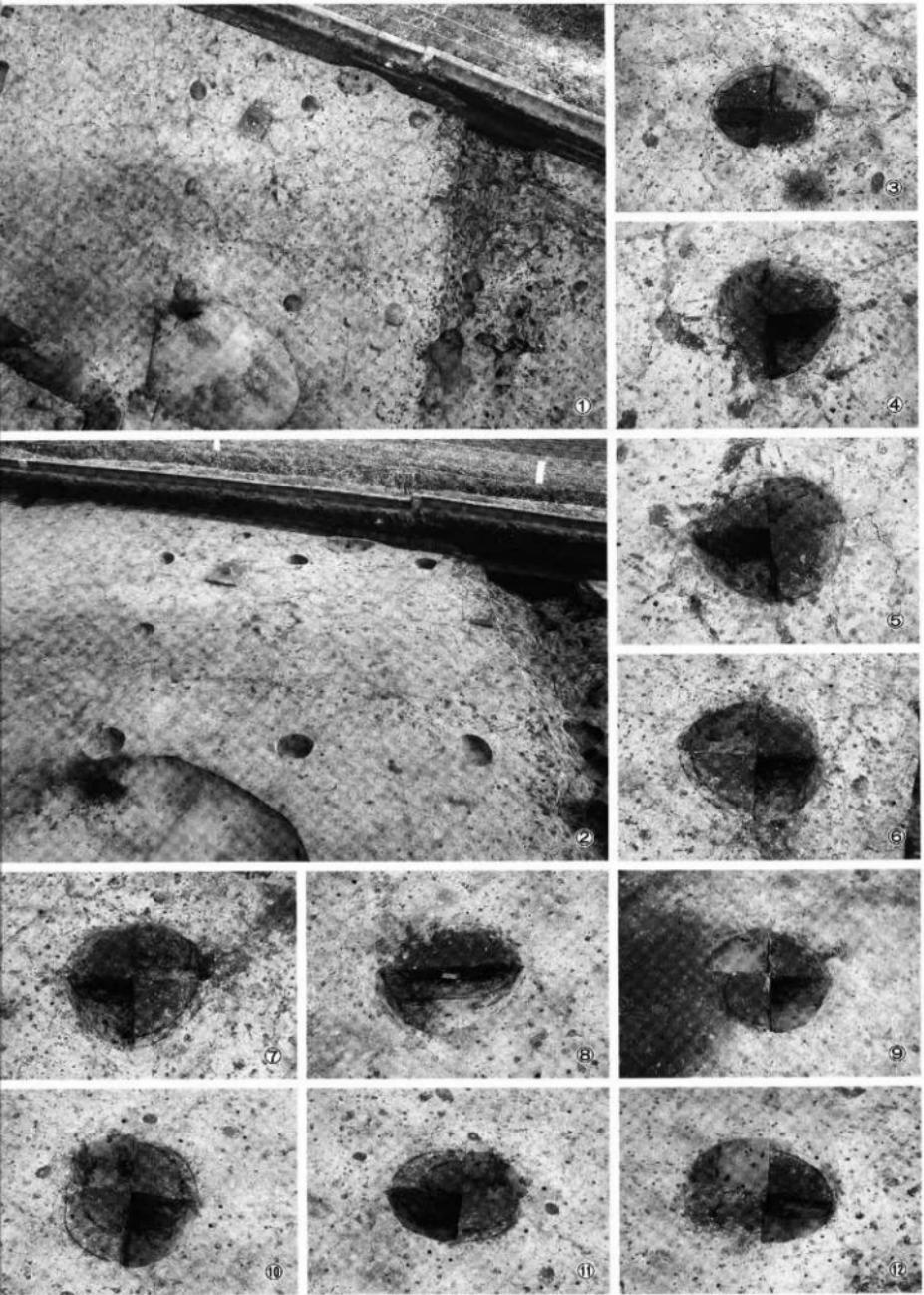
図版10 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構（2）

- ①S I 01カマド跡・SK09検出状況（西から）
- ②S I 01カマド跡検出状況（北から）
- ③S I 01カマド跡（北から）
- ④S I 01カマド跡（東から）
- ⑤S I 01カマド跡南壁（北から）
- ⑥SK09（東から）
- ⑦S I 01カマド跡完掘（北から）
- ⑧S I 01カマド跡・SK09完掘（北から）



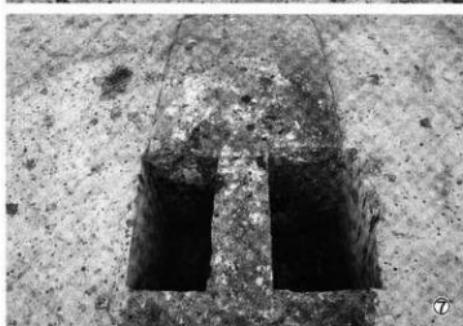
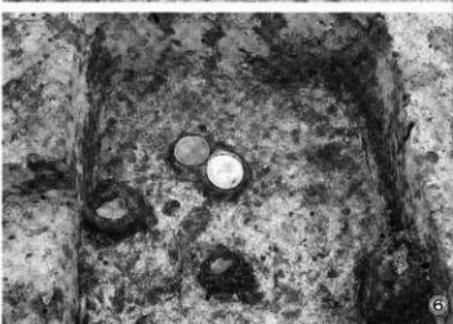
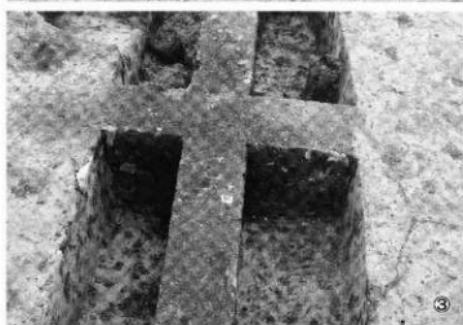
図版11 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の造構(3)

- ①SB01P3(南から) ②SB01P3(東から) ③SB01P4(南から) ④SB01P4(東から)
⑤SB01P4(北から) ⑥SB01P5(南から) ⑦SB01P5(東から) ⑧SB01P6(東から)



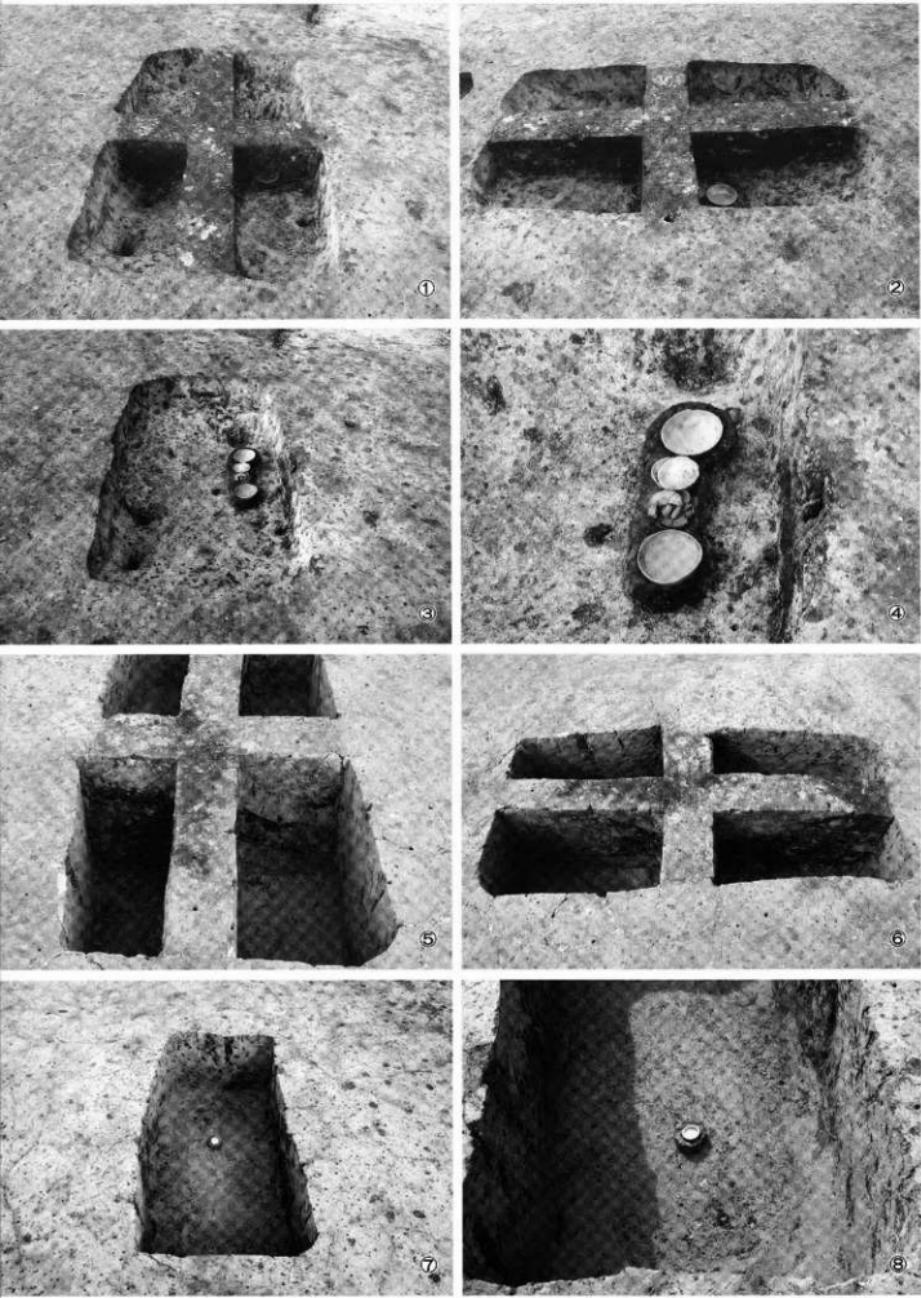
図版12 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構(4)

- ①SB01完掘(真上から) ②SB01完掘(西から) ③SB02 P1(南から) ④SB02 P2(南から)
- ⑤SB02 P2(東から) ⑥SB02 P3(南から) ⑦SB02 P3(西から) ⑧SB02 P4(南から)
- ⑨SB02 P5(南から) ⑩SB02 P6(南から) ⑪SB02 P6(東から) ⑫SB02 P7(南から)



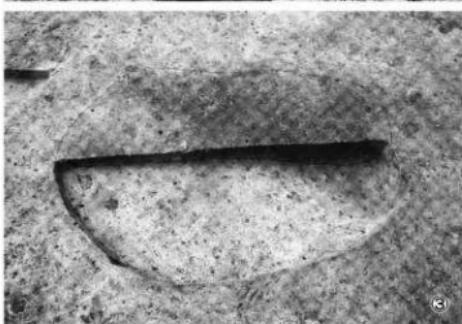
図版13 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構（5）

①SK02（北から） ②SK03（南から） ③SK10（南から） ④SK10（東から）
⑤SK10壳掘（南から） ⑥SK10遺物出土状況（南から） ⑦SK11（南から） ⑧SK11（東から）



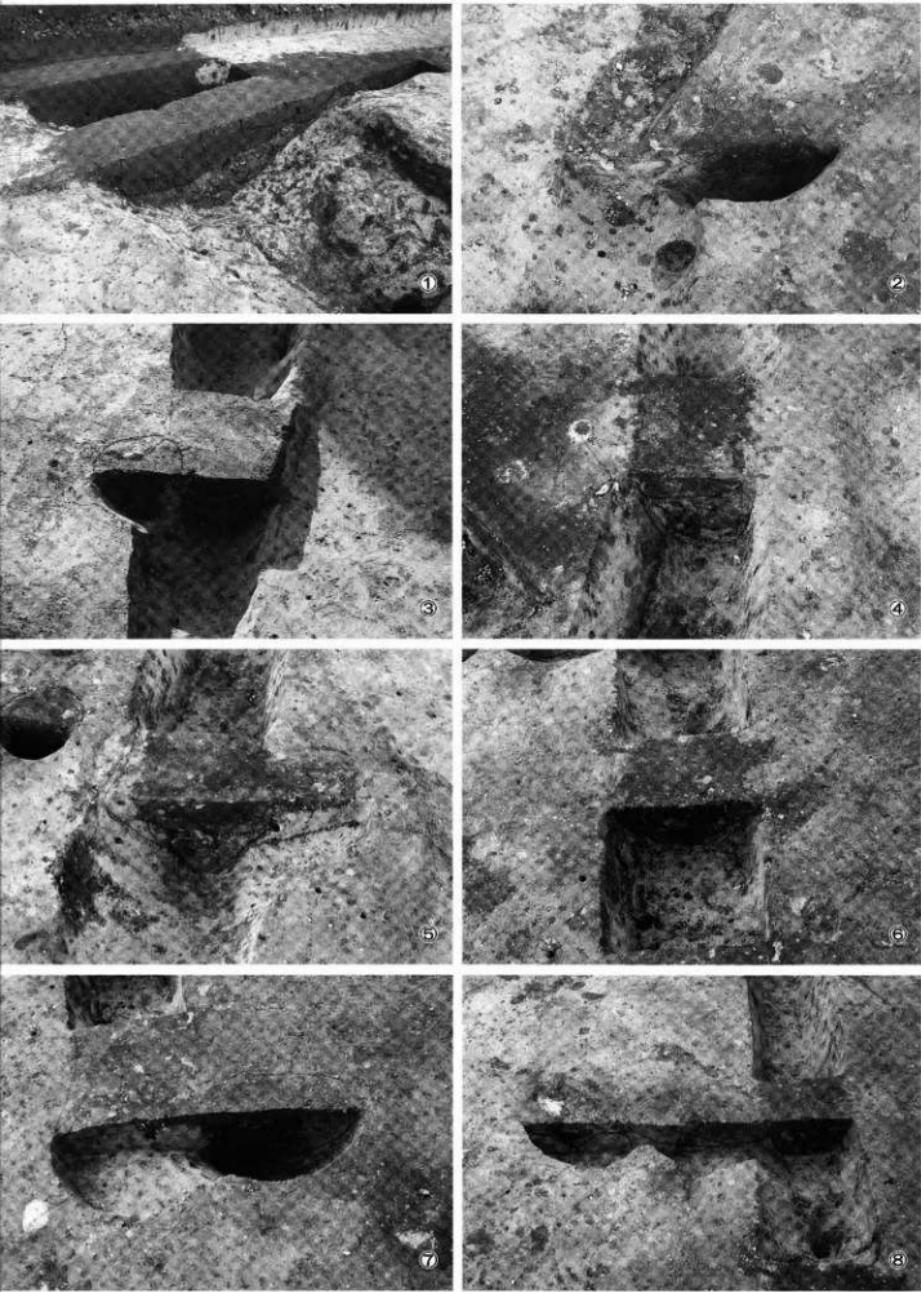
図版14 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構（6）

- ①SK14（南から） ②SK14（東から） ③SK14完掘（南から） ④SK14遺物出土状況（南から）
⑤SK17（南から） ⑥SK17（東から） ⑦SK17完掘（南から） ⑧SK17遺物出土状況（南から）



図版15 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構（7）

- ①SK06・07・08、P24（南から） ②SK06・07、SD08、P24（東から） ③SK13（東から） ④SK16（南から）
⑤SD03（西から） ⑥SD03・04（東から） ⑦SD04（南から） ⑧SD04（南から）



図版16 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構（8）

- ①SD04・08（西から） ②SD05・P06（南から） ③SD05・P07（東から） ④SD06（南から）
⑤SD06・P16（南から） ⑥SD07（東から） ⑦SD07・P17（東から） ⑧SD07・P18・19（東から）



①



②



③



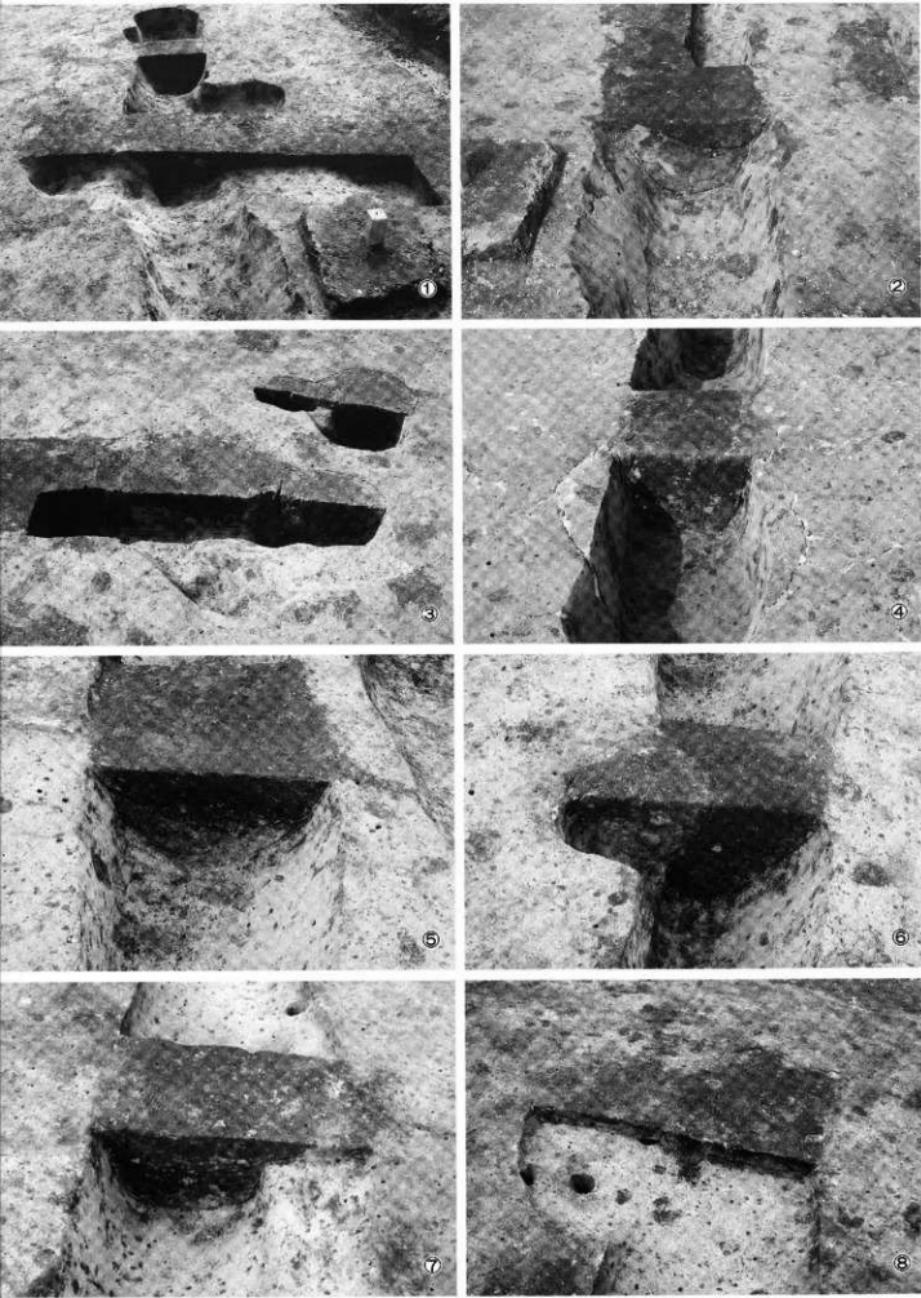
④



⑤

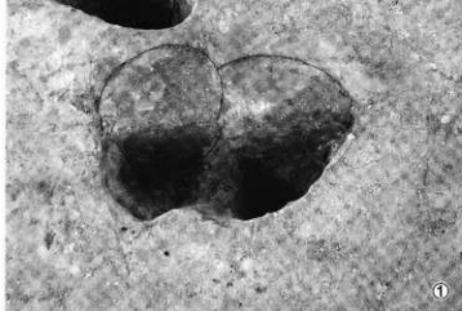
図版17 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構(9)

- ①SD10(直上から) ②SD10(南から) ③SD10・P40(東から) ④SD10・P41(西から)
⑤SD10・P42(東から)



図版18 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構 (10)

- ①SD09・15・P25 (北から) ②SD15 (南から) ③SD15・P26 (東から) ④SD11 (南から)
⑤SD12 (南から) ⑥SD12・P56 (南から) ⑦SD13 (南から) ⑧SD13・SK12 (南から)



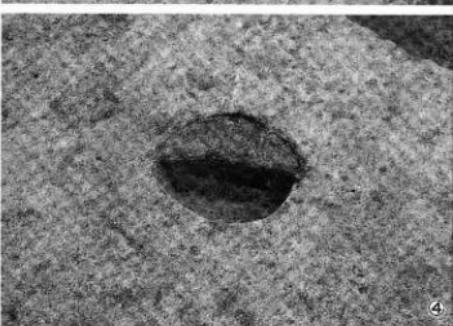
①



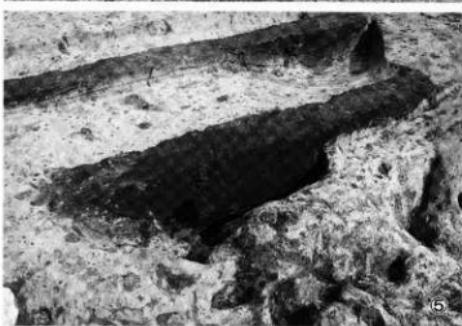
②



③



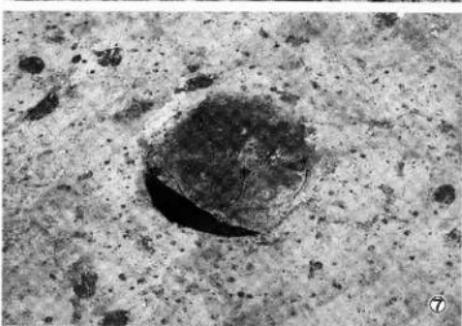
④



⑤



⑥



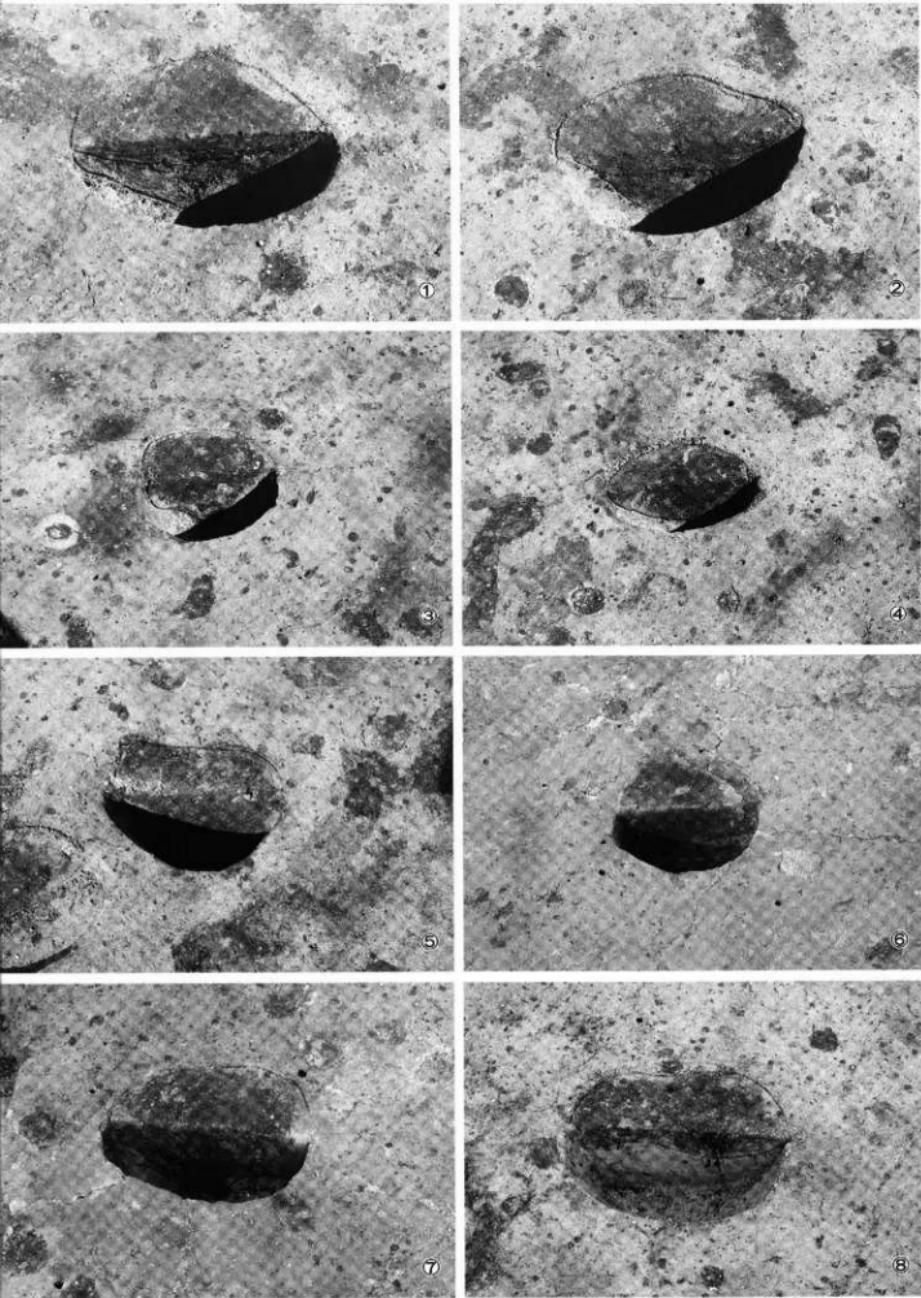
⑦



⑧

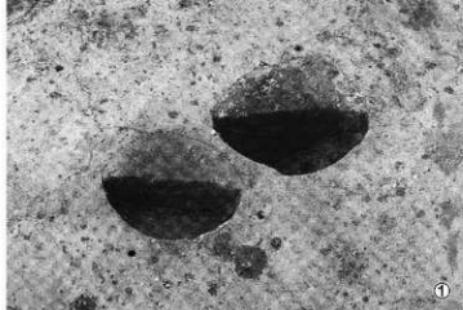
図版19 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構 (11)

- ①P09・10(南から) ②P11(東から) ③P20(南から) ④P23(東から)
⑤P24(南から) ⑥P27・28(東から) ⑦P30(東から) ⑧P31(北から)



図版20 宗守城跡・宗守寺慶敷遺跡1地区の遺構 (12)

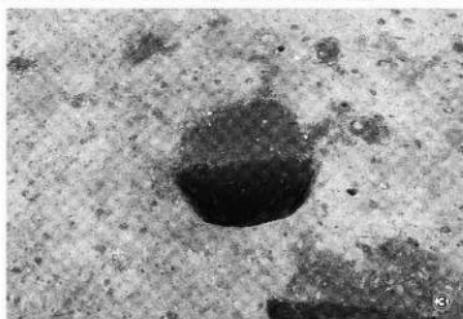
- ①P32 (南から) ②P34 (南から) ③P36 (南から) ④P37 (南から)
⑤P43 (東から) ⑥P53 (南から) ⑦P54 (南から) ⑧P57 (南から)



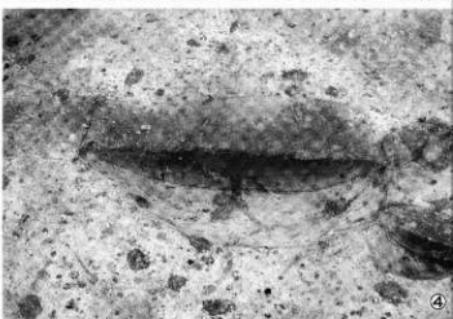
①



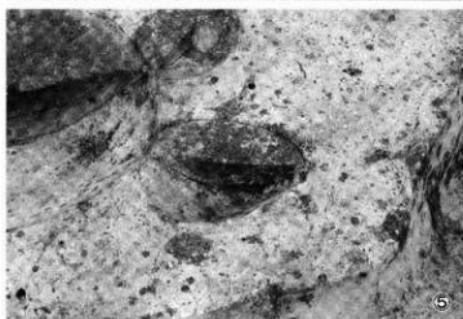
②



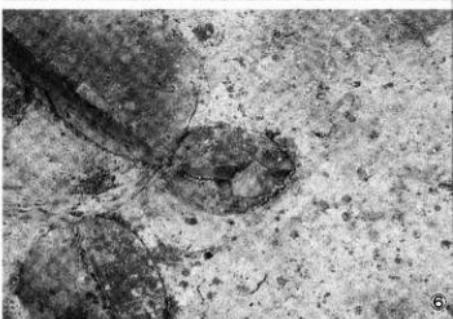
③



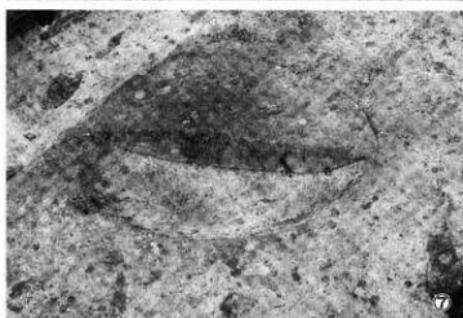
④



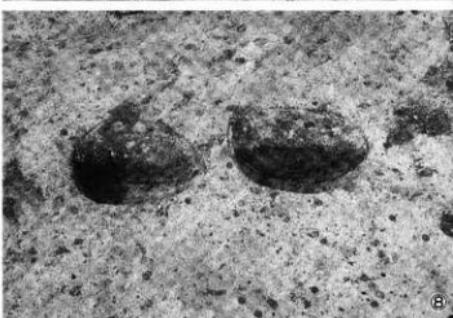
⑤



⑥



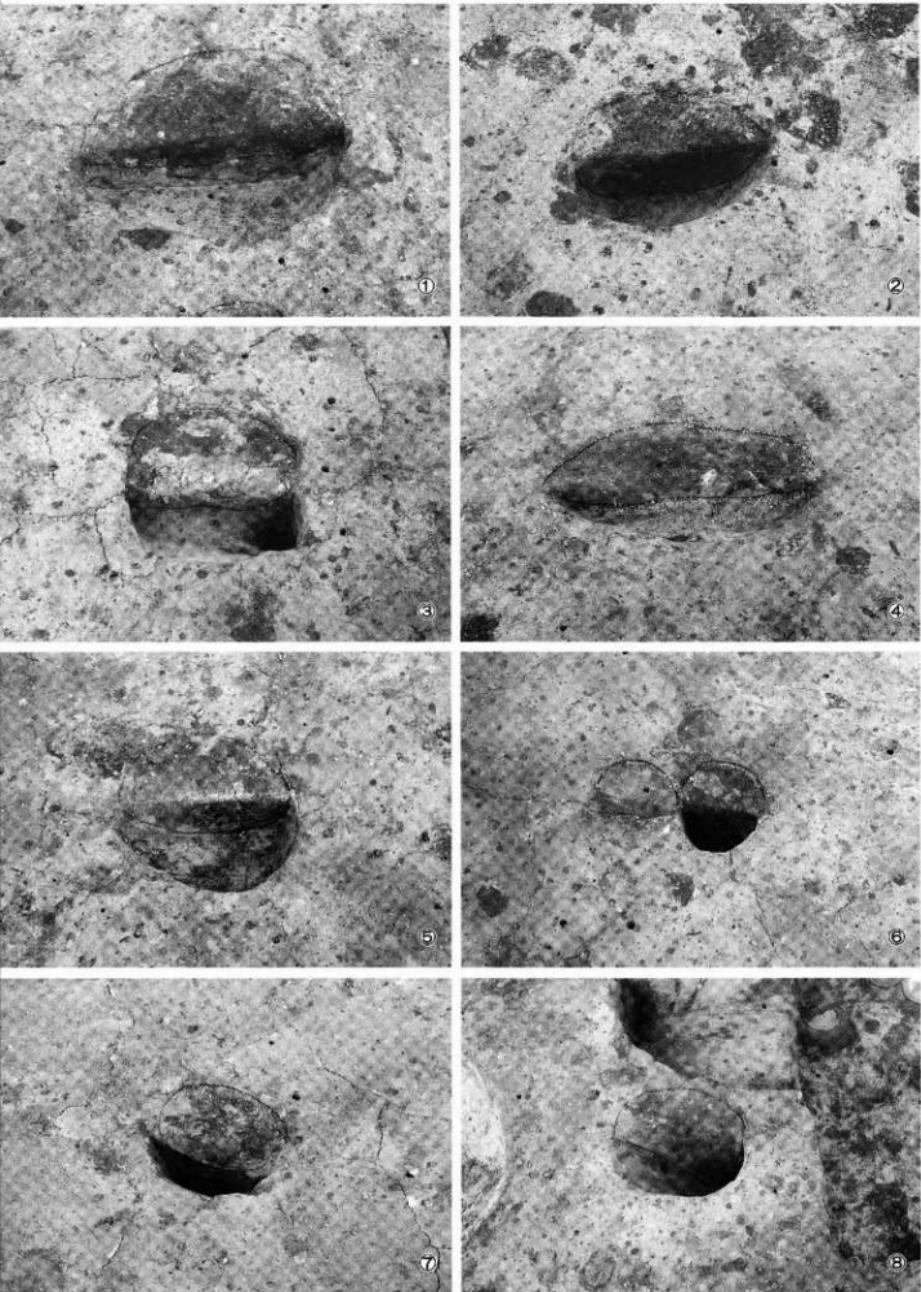
⑦



⑧

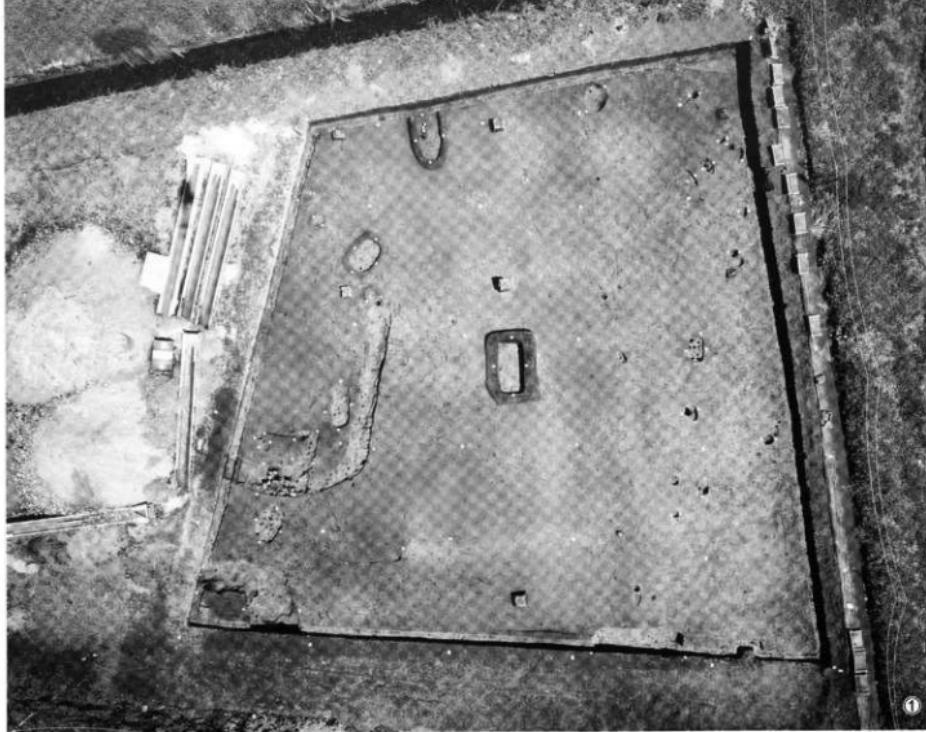
図版21 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構 (13)

- ①P58・59（東から） ②P60（南から） ③P61（南から） ④P64（南から）
⑤P65（南から） ⑥P66（東から） ⑦P67（南から） ⑧P68・69（東から）



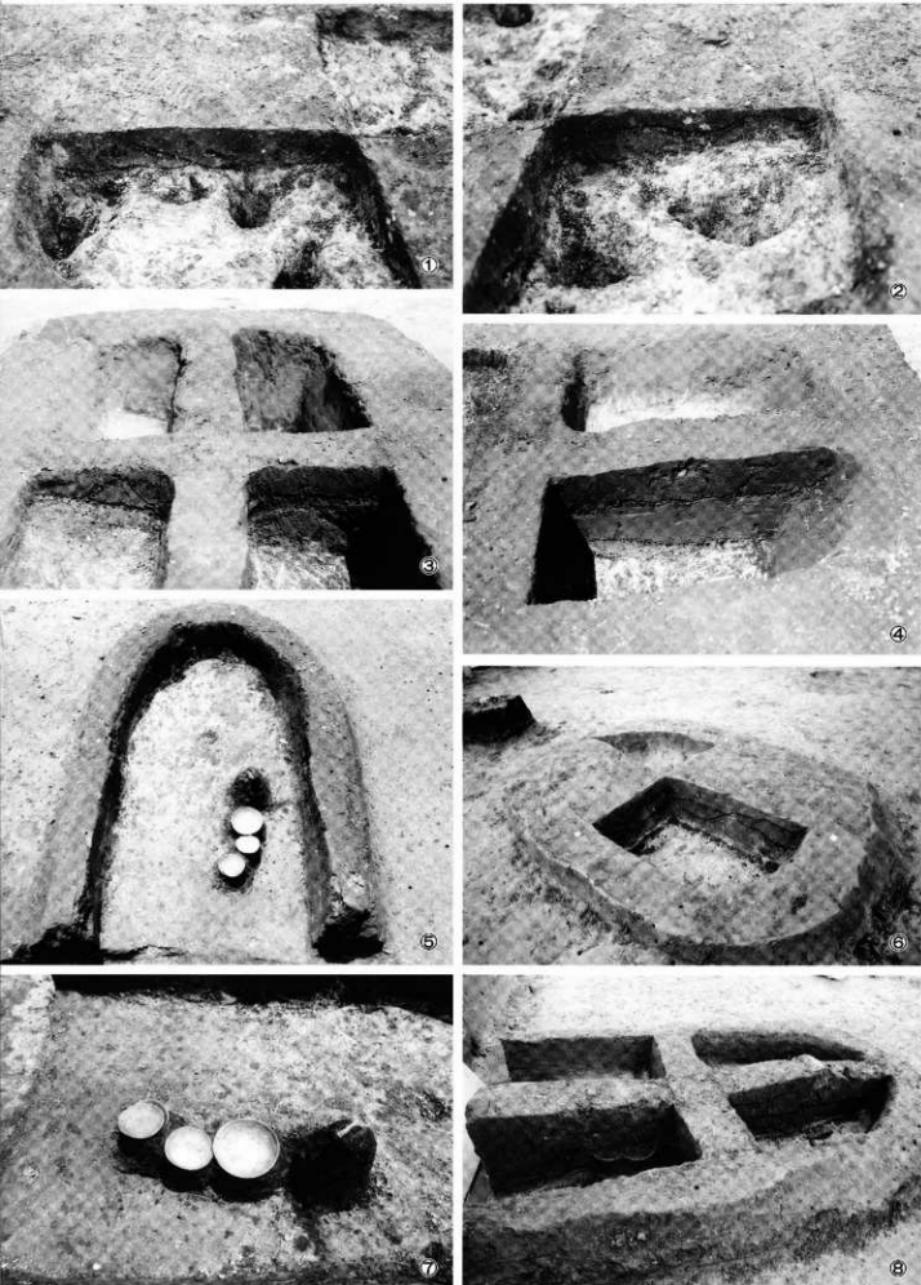
図版22 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺構 (14)

- ①P74 (南から) ②P80 (東から) ③P84 (南から) ④P86 (南から)
⑤P88 (南から) ⑥P90・91 (東から) ⑦P92 (南から) ⑧P93 (南から)



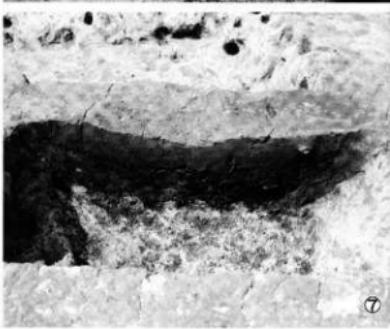
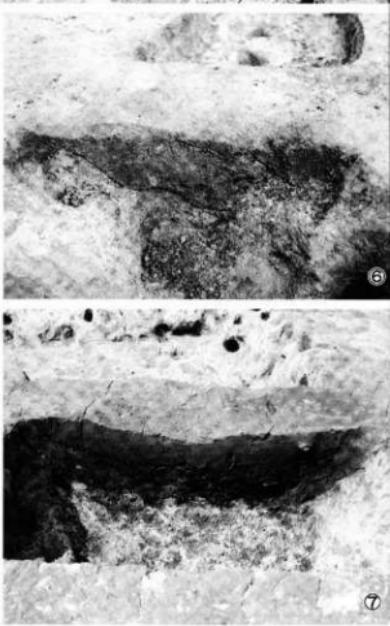
図版23 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区の遺構（1）

①調査区全景 ②調査区遠景（南から、奥は宗守神明社）
③調査区遠景（西から）



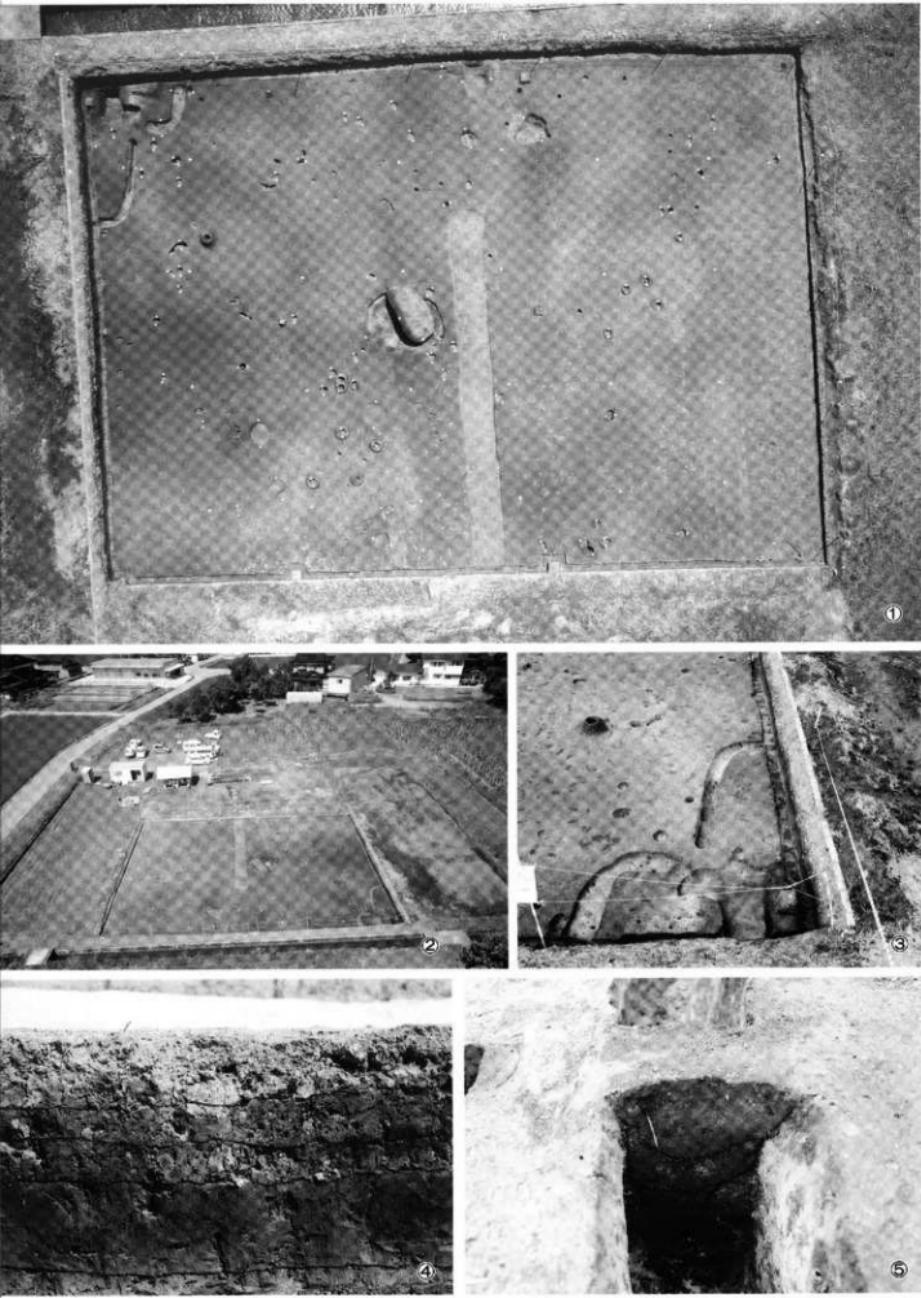
図版24 宗守跡・宗守寺屋敷遺跡2地区の遺構（2）

- ①SK01土層（西から） ②SK01土層（北から） ③SK03土層（南から） ④SK03土層（東から）
⑤SK05（北から） ⑥SK04土層（南から） ⑦SK05中世土器（西から） ⑧SK05土層（西から）



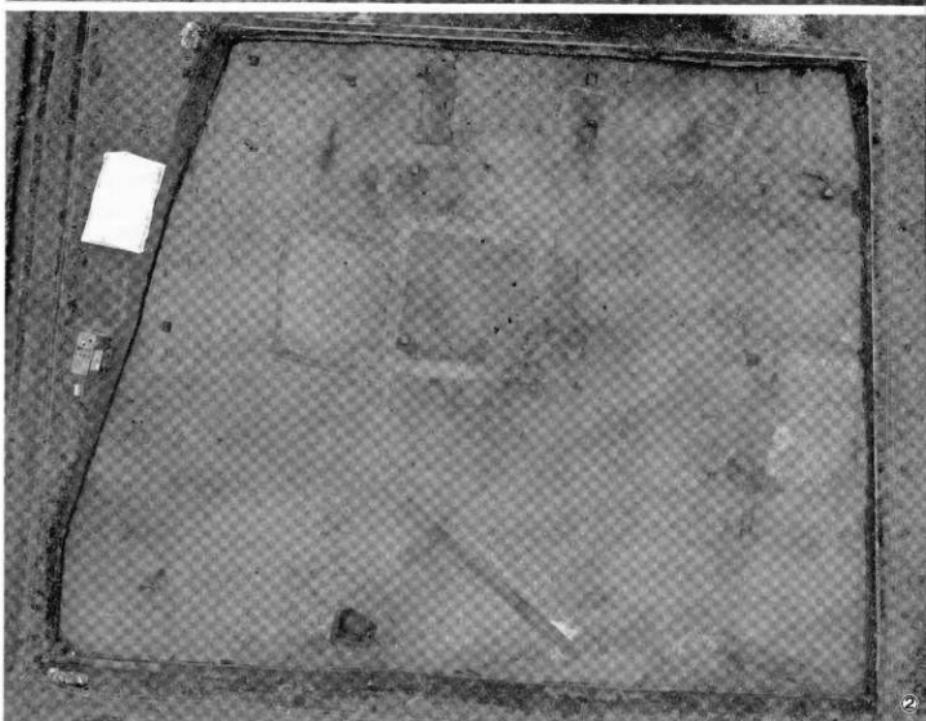
図版25 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2地区の遺構（3）

- ①基本土層（東壁） ②SD01土層（南から） ③SD03・04（西から） ④SD03土層（西から）
- ⑤SD02・03・04（南から） ⑥SK04土層（南から） ⑦SD02土層（南から）



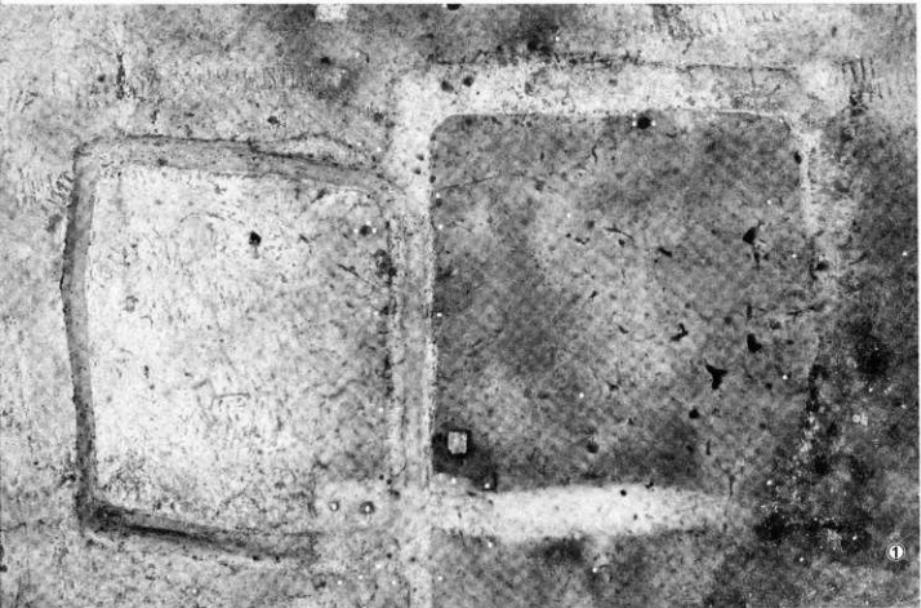
図版26 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡3地区の遺構

①調査区全景 ②調査区遠景（東から） ③SD01（東から） ④基本土層（北壁）
⑤SD01土層（東から）



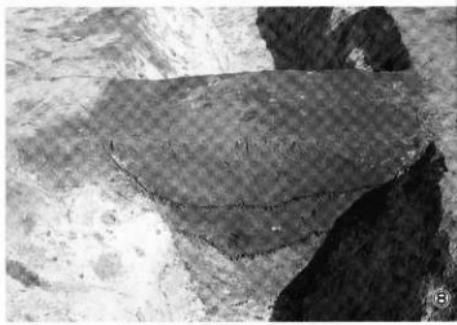
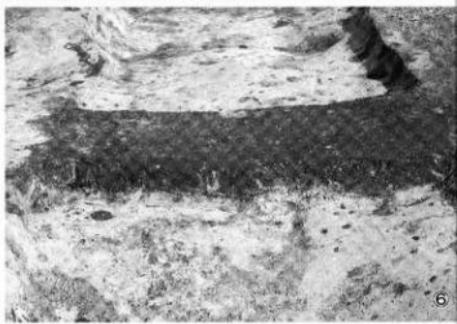
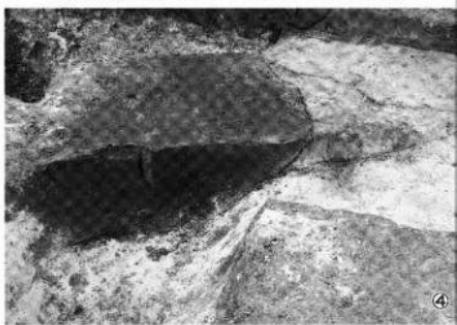
図版27 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区全景

①調査区遠景（東から） ②調査区全景（上から）



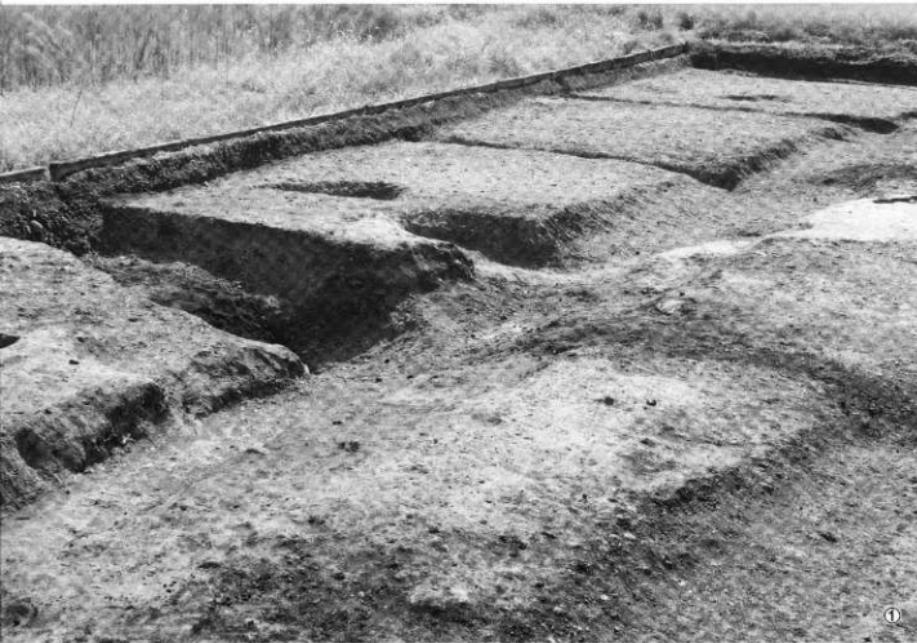
図版28 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺構（1）

①SD01・SD02発掘状況（上から） ②SD01・SD02発掘状況（西から）

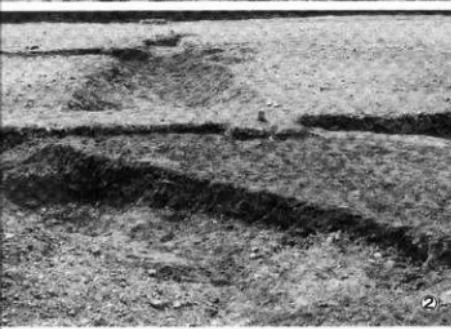


図版29 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺構（2）

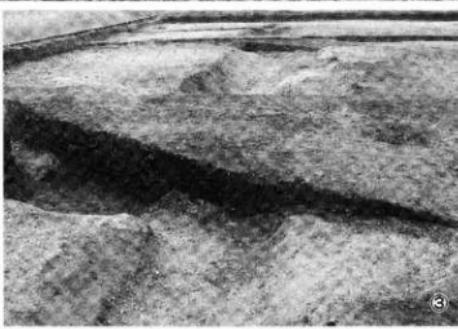
- ①SD01北辺断面（西から） ②SD01西辺断面（南から） ③SD01南辺断面（東から）
- ④SD01南東角断面（南西から） ⑤SD02東辺断面（南から） ⑥SD02北辺断面（東から）
- ⑦SD02南辺断面（東から） ⑧SD01東辺・SD02西辺断面（南から）



①



②



③



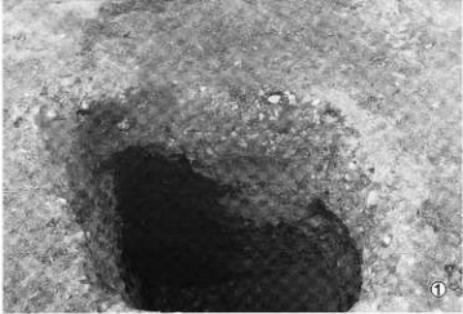
④



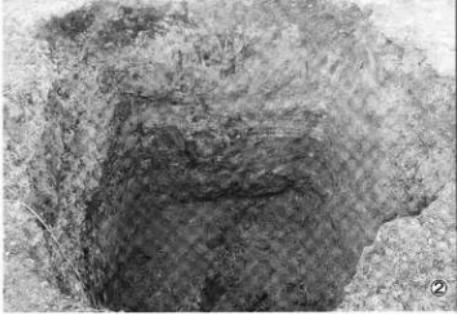
⑤

図版30 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺構（3）

- ①SD03～06完報（北西から） ②SD03・04断面（北から） ③SD03・05断面（北から）
④SD08断面（南から） ⑤SD09断面（北から）



①



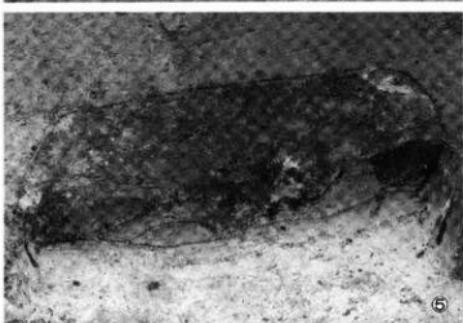
②



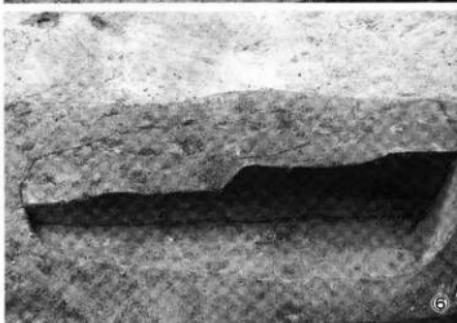
③



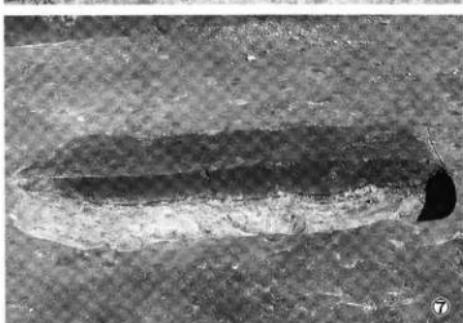
④



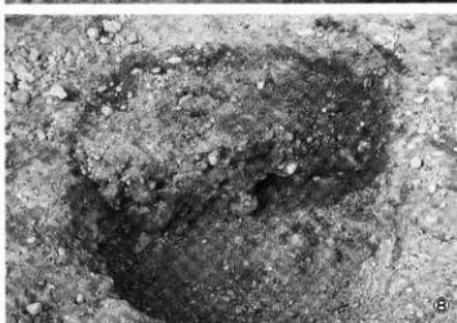
⑤



⑥



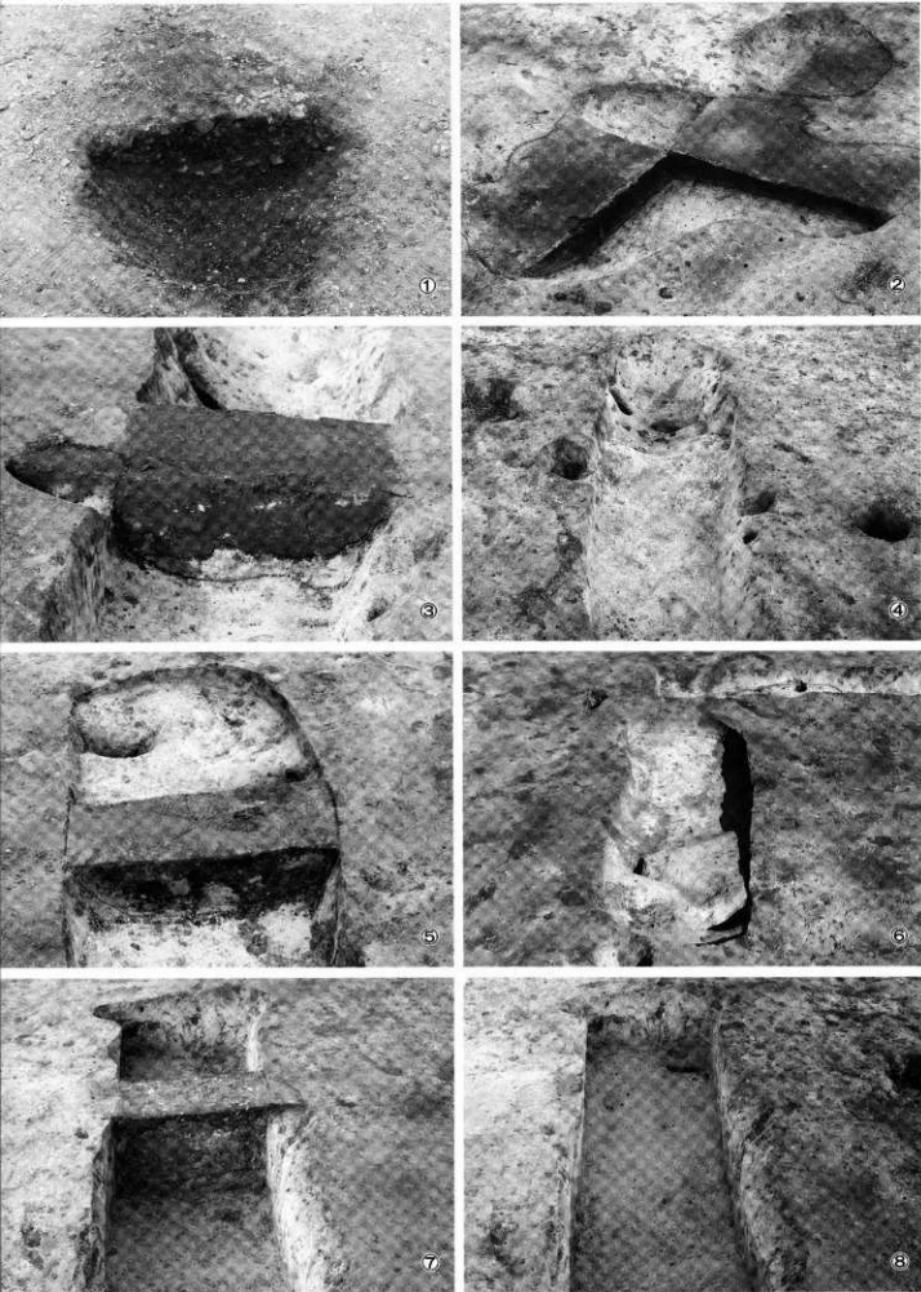
⑦



⑧

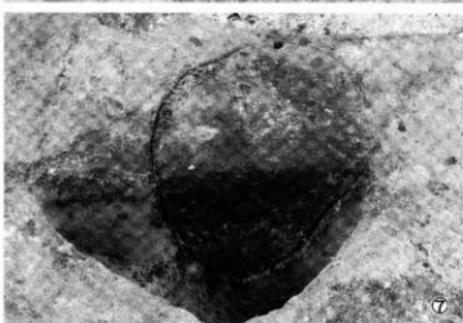
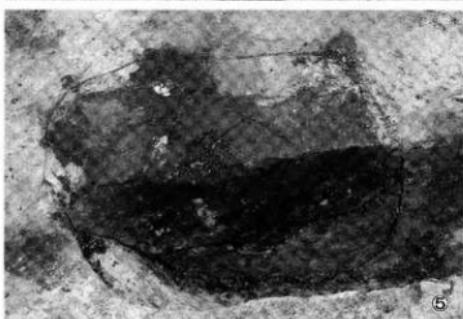
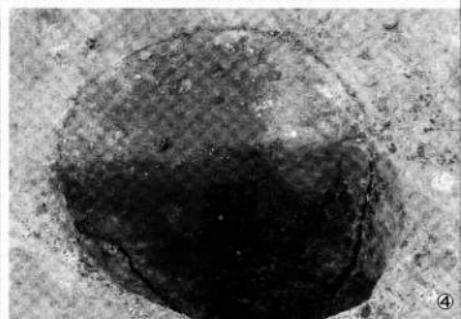
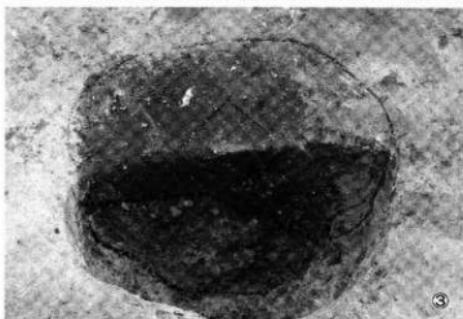
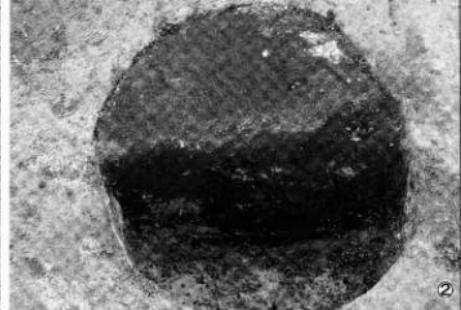
図版31 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺構（4）

- ①SE01断面（東から） ②SE01完掘（東から） ③SK01遺物出土状況（北から）
- ④SK06遺物出土状況（東から） ⑤SK01断面（南から） ⑥SK06断面（東から）
- ⑦SK02断面（西から） ⑧SK04断面（南から）



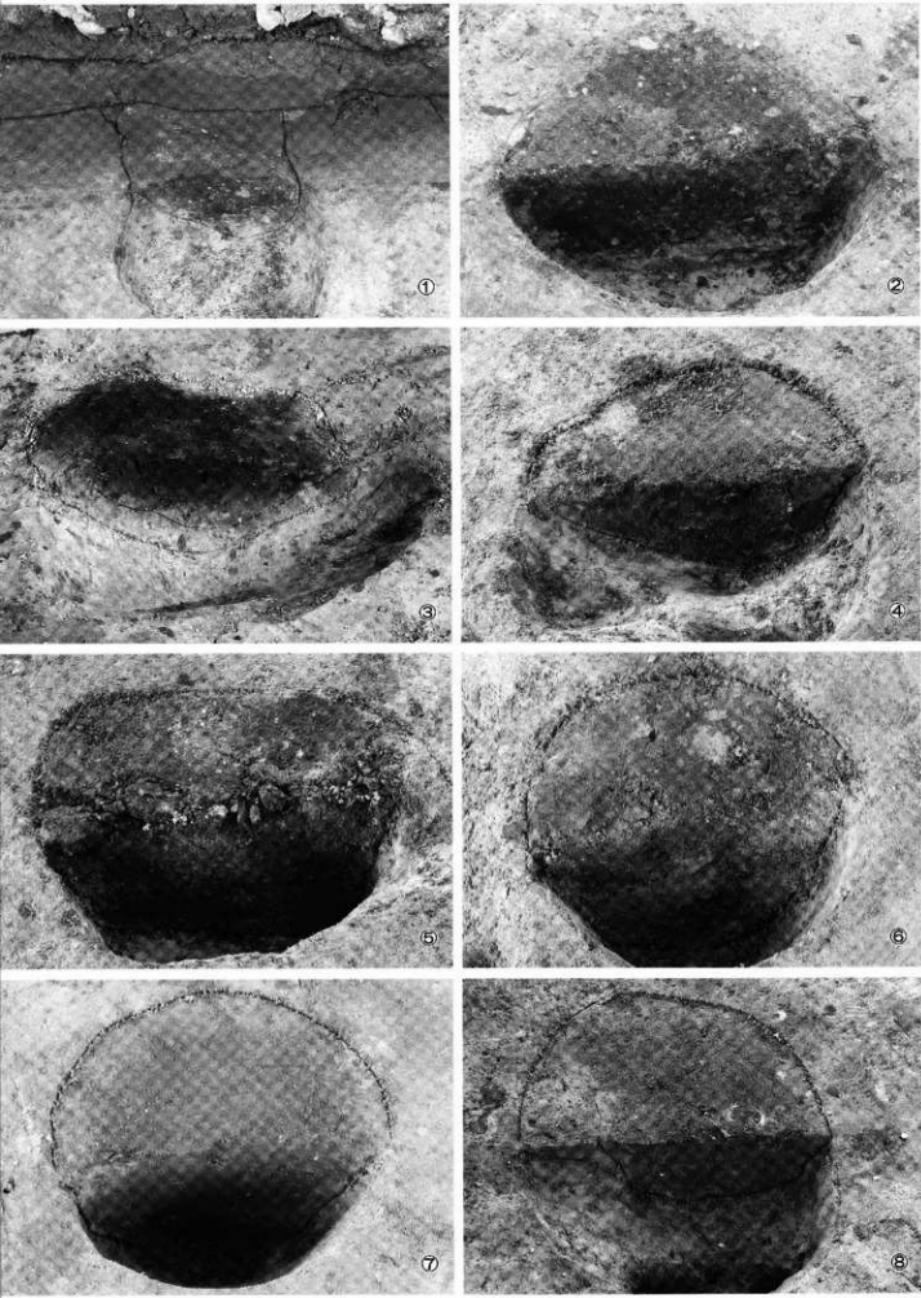
図版32 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の造構(5)

- ①SK05断面(東から) ②SK10断面(北西から) ③SK08断面(南から)
- ④SK08完掘(南から) ⑤SK09断面(北から) ⑥SK09完掘(南から)
- ⑦SK11断面(南から) ⑧SK11完掘(南から)



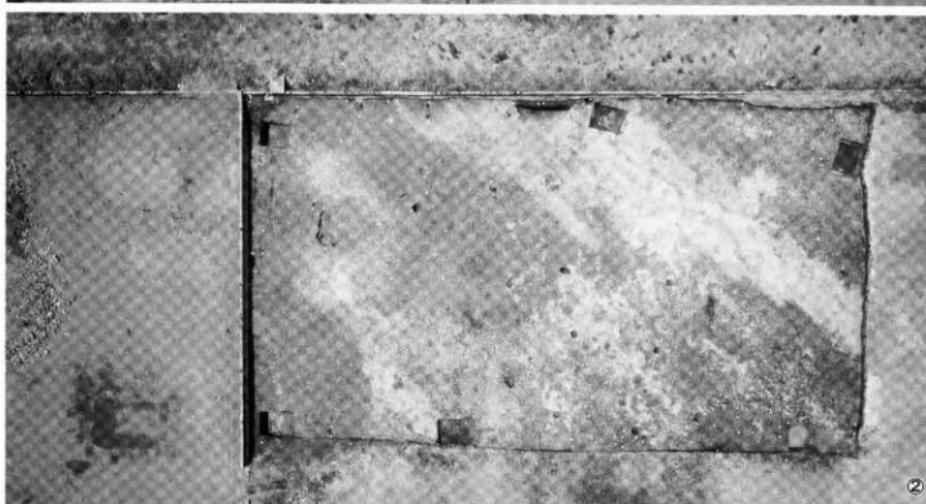
図版33 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺構（6）

- ①P02断面（南から） ②P03断面（南から） ③P04断面（南から）
- ④P05断面（南から） ⑤P08断面（南から） ⑥P10断面（南から）
- ⑦P12断面（南から） ⑧P13断面（南から）



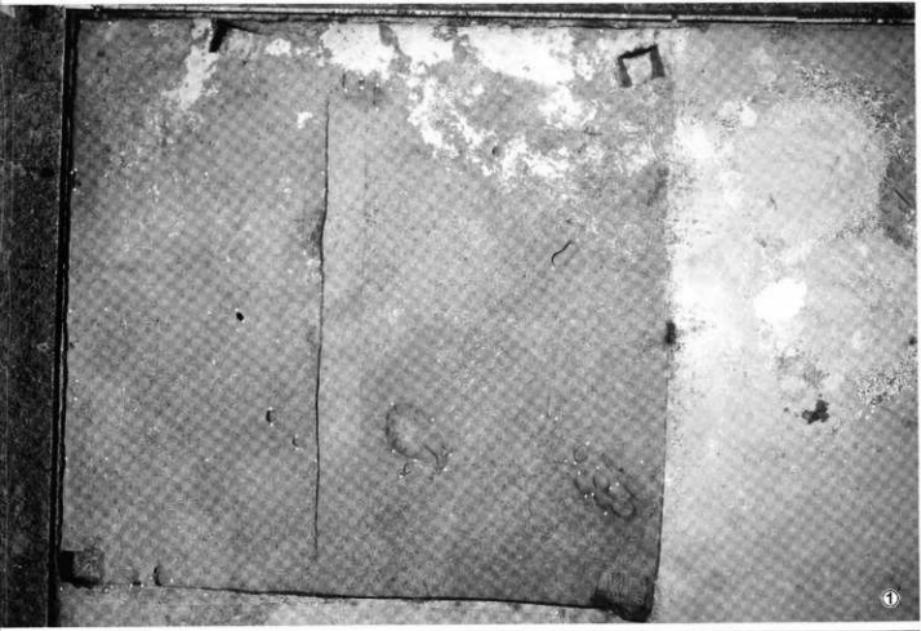
図版34 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺構（7）

- ①P14断面(南から) ②P15断面(南から) ③P17断面(西から)
④P22断面(南から) ⑤P23断面(南から) ⑥P25断面(南から)
⑦P26断面(南から) ⑧P27断面(東から)

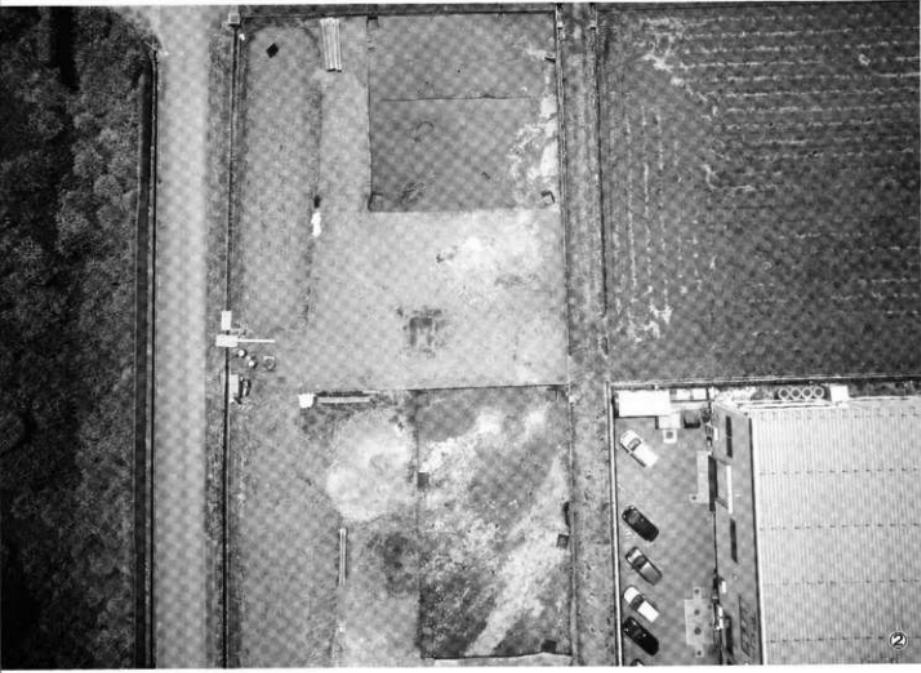


図版35 梅原胡摩堂遺跡27・28地区全景（1）

①調査区遠景（北から） ②梅原胡摩堂遺跡28地区全景（真上から）



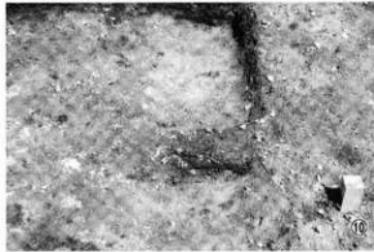
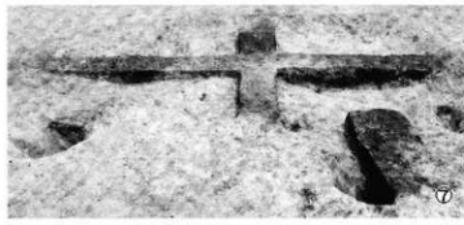
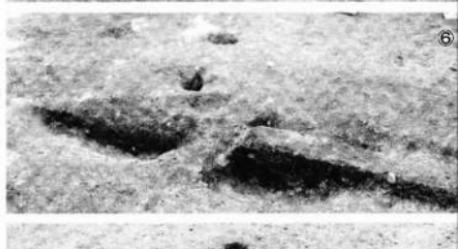
①



②

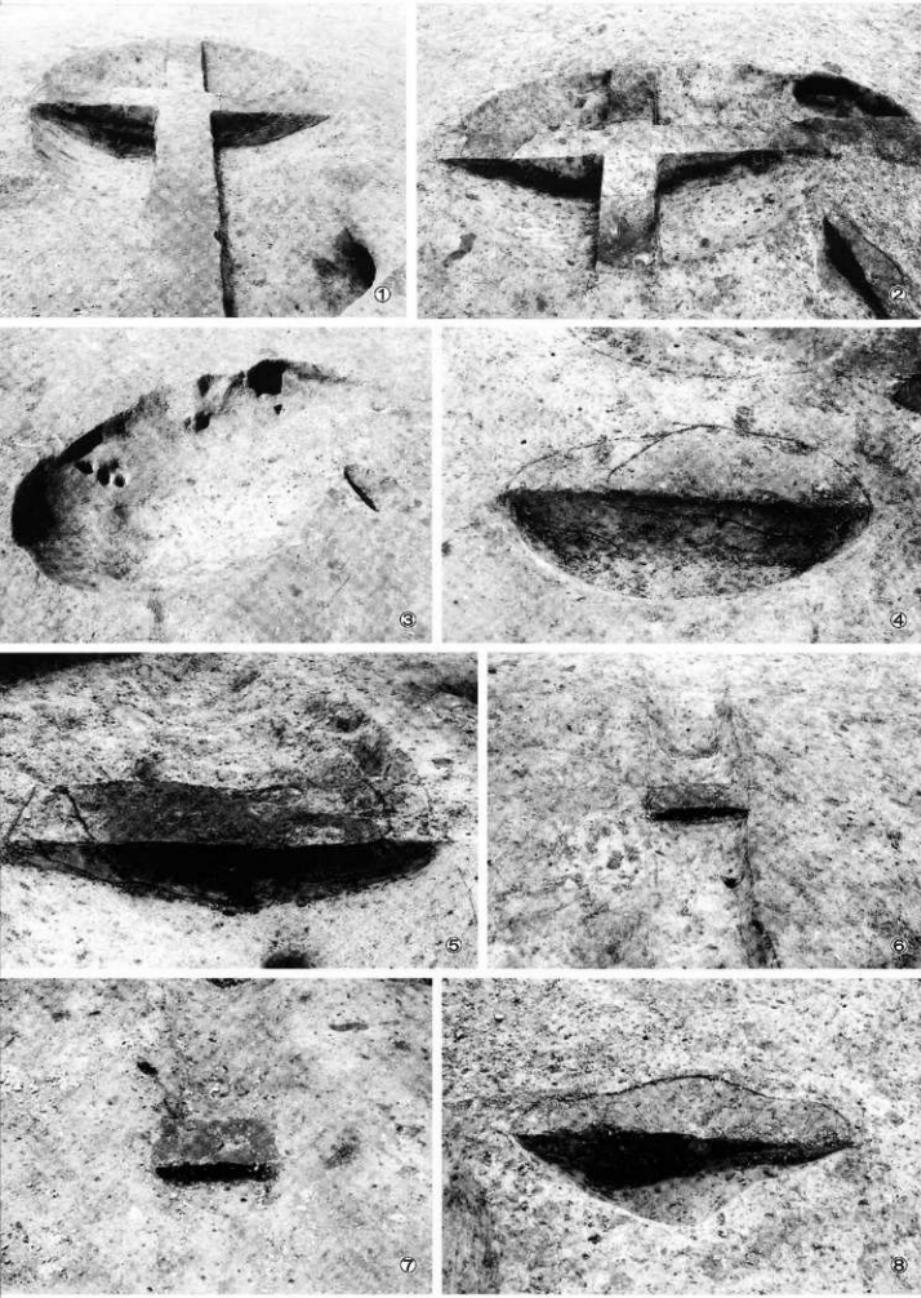
図版36 梅原胡摩堂遺跡27・28地区全景 (2)

①梅原胡摩堂遺跡28地区（真上から） ②梅原胡摩堂遺跡27・28地区（真上から）



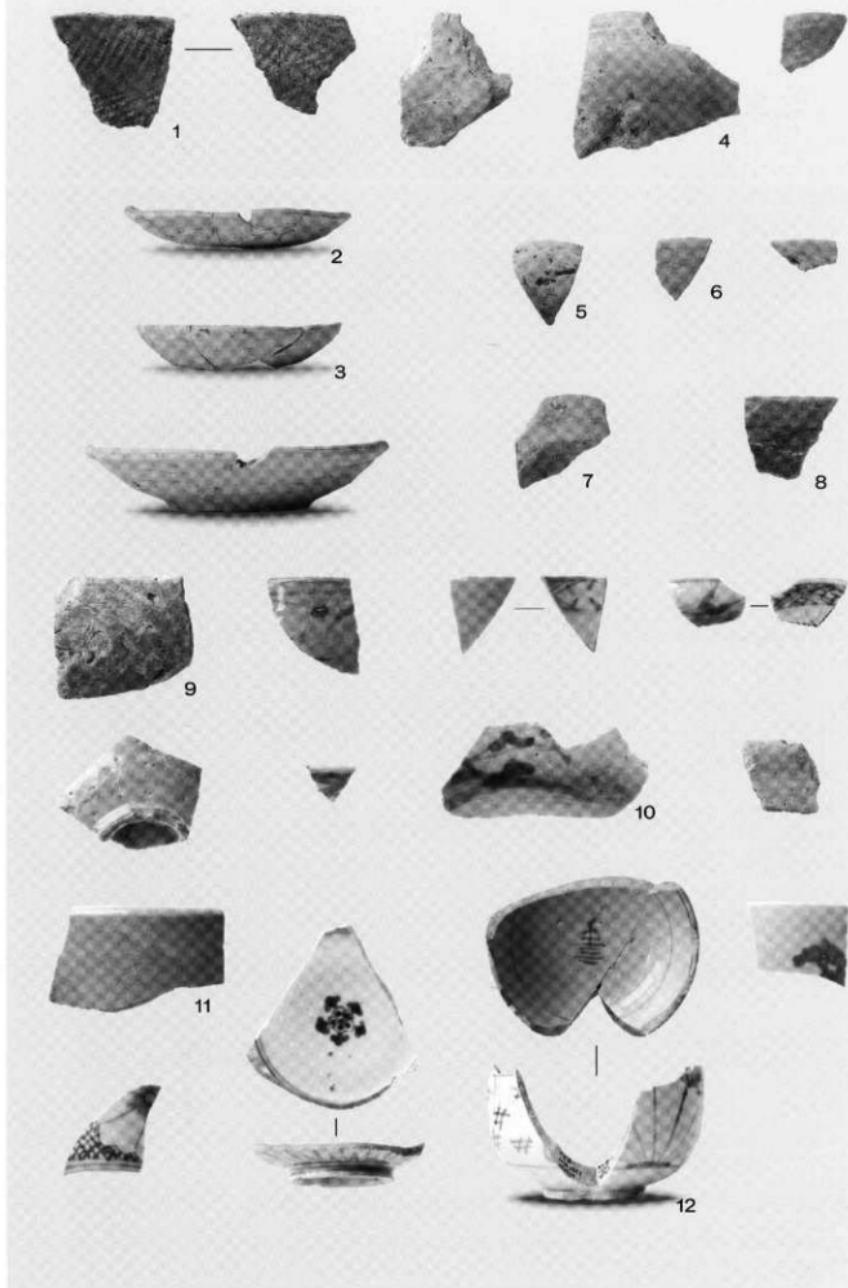
図版37 梅原胡摩堂遺跡27地区の遺構

- ①SK01土層（南から） ②SK01完掘状況 ③SK02土層（東から） ④SK02完掘状況（東から）
- ⑤SK03土層（南から） ⑥SK04土層（西から） ⑦SK06土層（南から） ⑧SK06完掘状況
- ⑨SK07土層（南から） ⑩SD01土層（西から）



図版38 梅原胡摩堂遺跡28地区の遺構

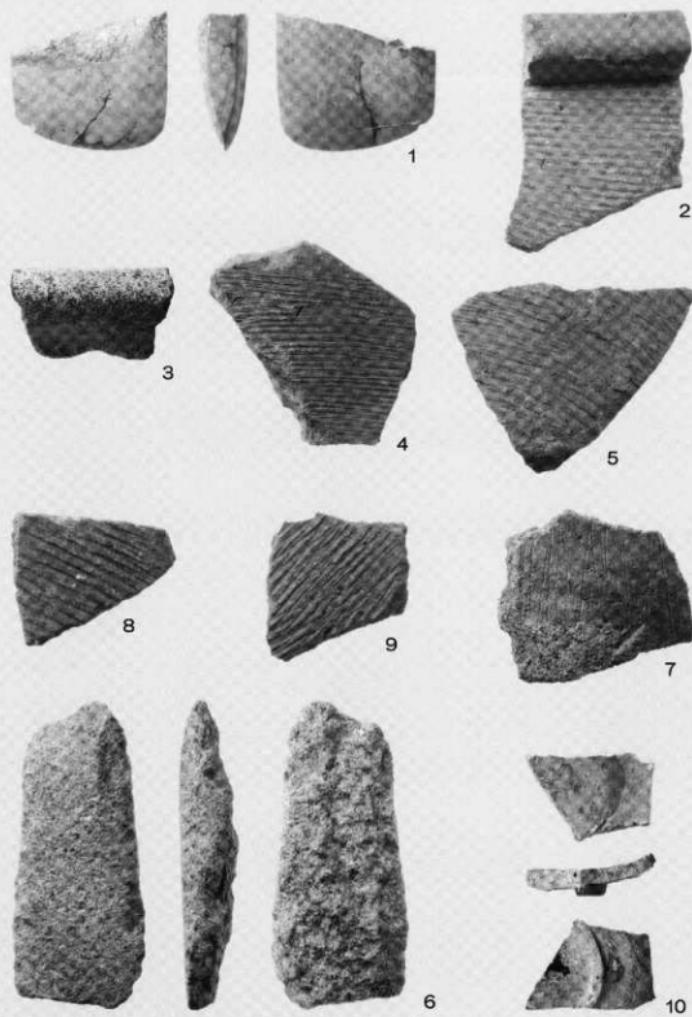
①SK01土層（東から） ②SK01土層（南から） ③SK01完掘状況 ④P1土層（南から）
 ⑤SD02土層（東から） ⑥SD01土層（東から） ⑦SD01土層（東から） ⑧P6土層（南から）



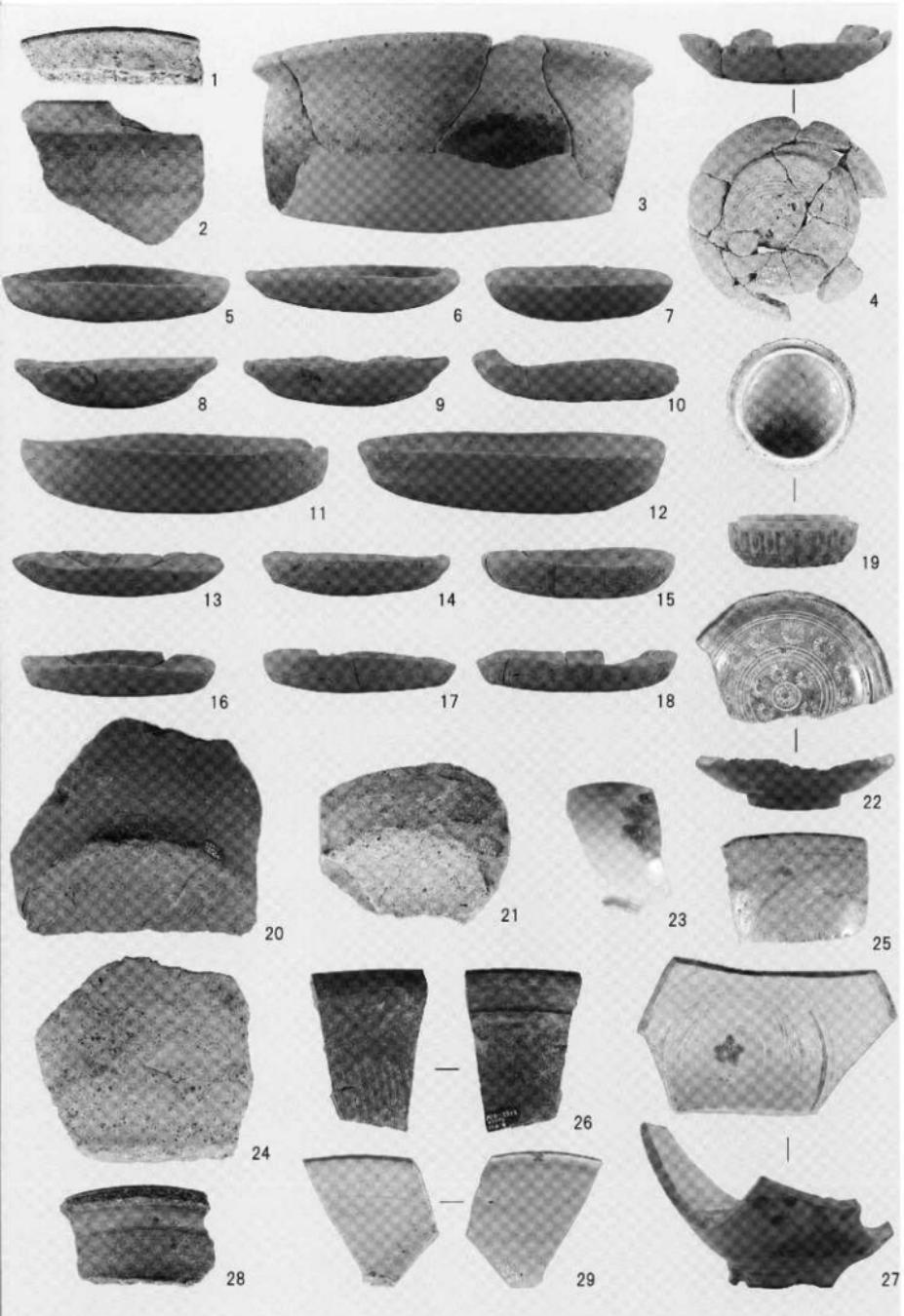
図版39 宗守Ⅲ遺跡1地区の遺物(1)



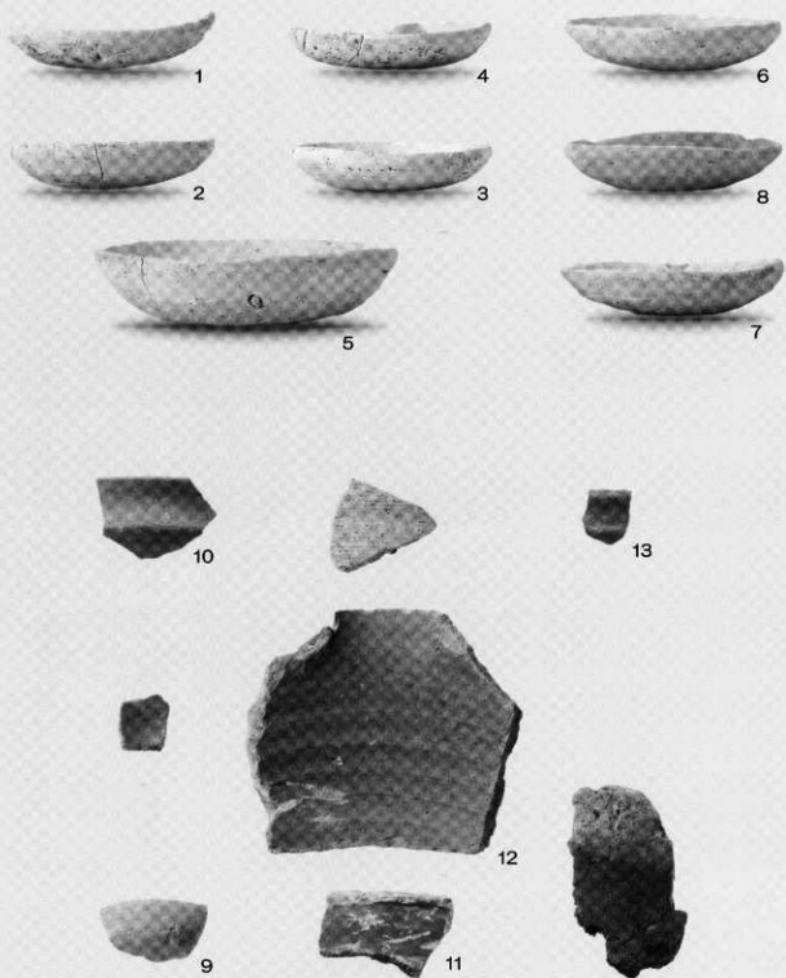
図版40 宗守Ⅲ遺跡1地区の遺物（2）



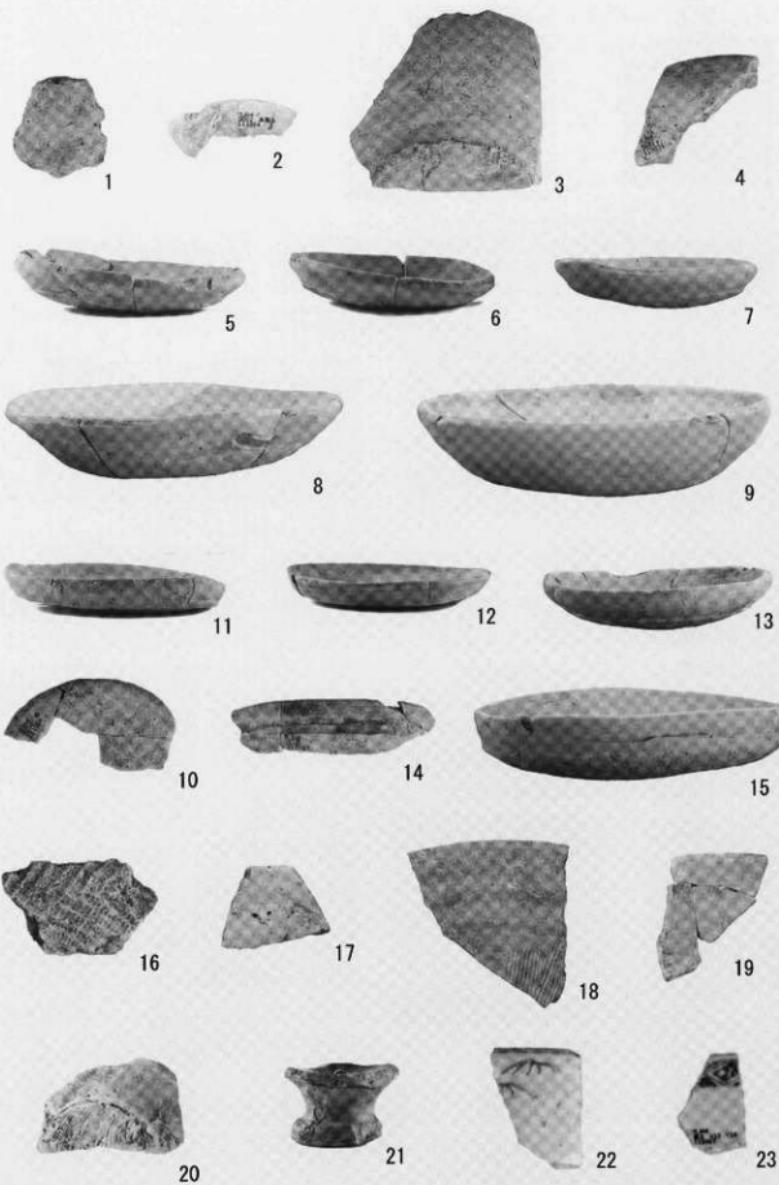
図版41 宗守Ⅲ遺跡2地区の遺物



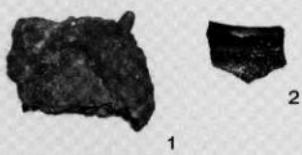
図版42 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡1地区の遺物



図版43 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡2・3地区の遺物



図版44 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡4地区の遺物



図版45 梅原胡摩堂遺跡27・28地区の遺物

報告書抄録

ふりがな	とやまけん なんとし むねもりさんいせき むねもりじょうあと むねもりてらやしきい せき うめはらごまどういせき けんえいほじょうせい びじぎょうきたやまだちゅうぶにしちくにともなうまいぞうぶんか ざいほうぞううちのはつくつちょうさほうこく							
書名	富山県 南砺市 宗守Ⅲ遺跡 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 梅原胡摩堂遺跡 一県営は場整備事業北山田中部西地区にともなう埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告							
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書 32							
編著者名	佐藤聖子 宮崎順一郎 片田ア紀 小川幹太 久保浩一郎							
編集・発行機関	南砺市教育委員会							
所在地	〒932-0292 富山県南砺市井波520 TEL (0763) 23-2014				南砺市教育委員会			
発行年月日	西暦2013年1月18日							
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
宗守Ⅲ遺跡	富山県 南砺市 地内	16210	580	36° 33° 16°	136° 54° 47°	20100720～20100924 20110531～20110715	1,307m ² 860m ²	県営は場整備事業
宗守城跡・ 宗守寺屋敷遺跡	富山県 南砺市 地内	16210	578	36° 33° 15°	136° 54° 29°	20100903～20101105 20110531～20110715 20110810～20111031	900m ² 300m ² 600m ² 1,490m ²	
梅原胡摩堂遺跡	富山県 南砺市 地内	16210	462	36° 33° 33°	136° 54° 12°	20120626～20120720	350m ² 340m ²	
梅原胡摩堂遺跡	富山県 南砺市 地内	16210	462	36° 33° 33°	136° 54° 12°	20120626～20120720	350m ² 340m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
宗守Ⅲ遺跡	集落	中世	土坑、溝	中世土師器、珠洲焼、青磁			—	
		近世	土坑、穴、溝	近世陶磁器			—	
宗守城跡・ 宗守寺屋敷遺跡	城館	古代	堅穴住居、 獨立柱建物、 柱穴、土坑溝	須恵器、上師器			—	
		中世	獨立柱建物、溝、 柱穴、土坑、 土坑墓	中世土師器、珠洲焼、青磁			—	
		近世		近世陶磁器			—	
梅原胡摩堂遺跡	集落	中世	柱穴、土坑、溝	鐵軋陶器、鐵製品			—	

県営は場整備事業北山田中部西地区に伴う
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告

富山県南砺市 宗守Ⅲ遺跡 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 梅原胡摩堂遺跡

平成25年1月

編集 南砺市教育委員会

発行 南砺市教育委員会

印刷 有限会社 ナカダ印刷

